Book in Book THE 100 GREATEST SONGS OF THE CENTURY

METAL HAMMER JAPAN

Vol.6

メタルハマー・ジャパン
第6号

Special Talk Session
ハロウィン
アンディ・デリス × マイケル・キスク

The Documentary
アイアン・メイデン
1981年『キラーズ』の内側

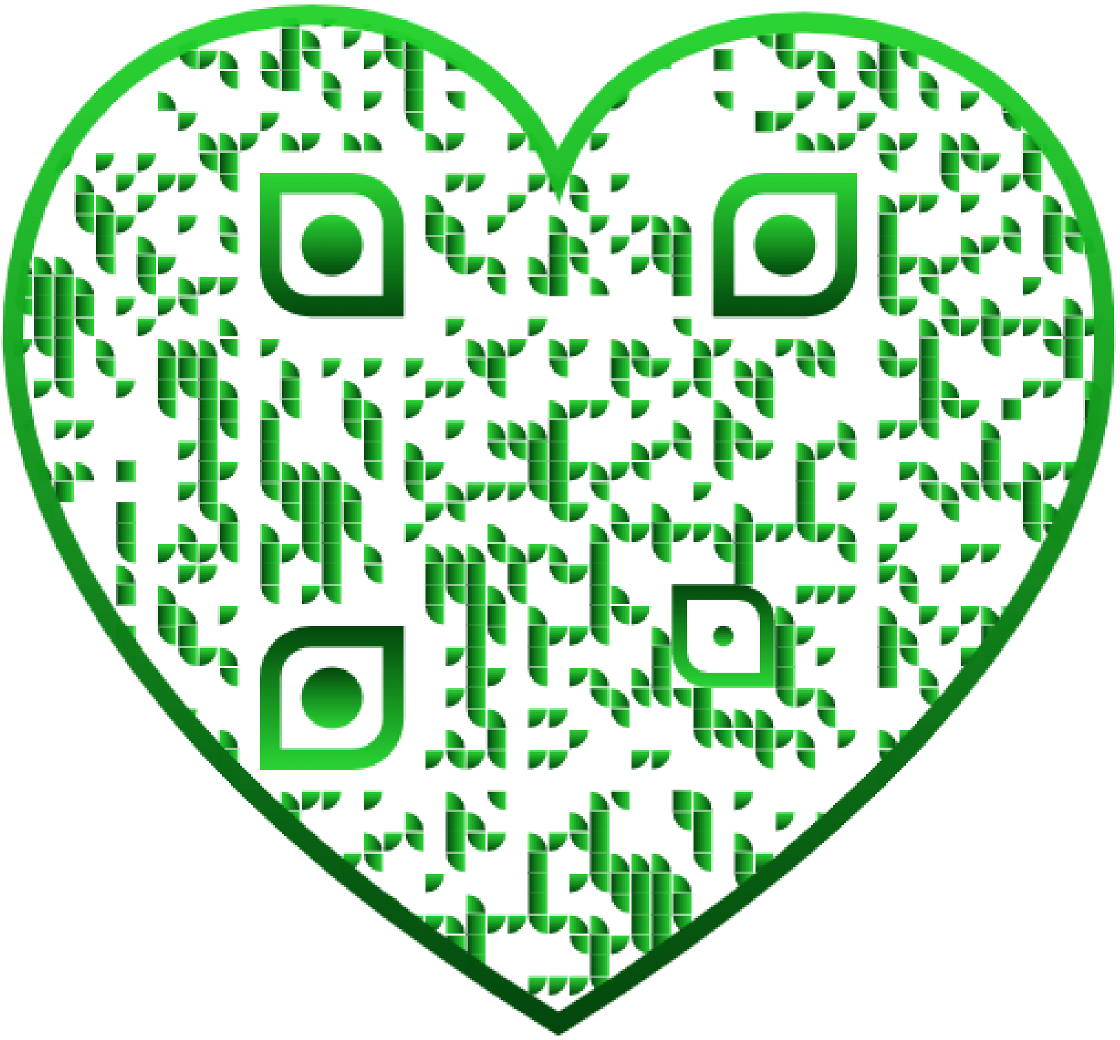
フィリップ・H・アンセルモ
ゲイリー・ホルト
GOJIRA
聖飢魔II
ポール・ギルバート
ラム・オブ・ゴッド
システム・オブ・ア・ダウン
FUTURE FOUNDATION

先取り夏スコア
ウクレレで楽しむ
HR/HMソングス

Let's Get Aggressive!
アグレッシブでいこうぜ!

2000年以降のキラー・チューンはこれだ!
グレイテスト・ソングス TOP 100

Rittor Music Mook



METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1]、[Vol.2]、[Vol.3]、[Vol.4] & [Vol.5] 好評発売中!

お求めは全国の書店・webサイトにて

METAL HAMMER JAPAN Vol.1 価格 1.650 円 (本体 1,500 円+税 10%)

Special Feature **オジー・オズボーン** ○最新インタビュー

○40 年目の『ブリザード・オブ・オズ～血塗られた英雄伝説』

フィリップ・H・アンセルモ／BABYMETAL／スリップノット／アウトレイジ／デイヴィッド・エレフソン／トリヴィアム／KOЯN／エヴァネッセンス&ウィズイン・テンプテーション／アモン・アマース／バロネス／LOVEBITES ...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.2 価格 1.650 円 (本体 1,500 円+税 10%)

Special Feature **ドリーム・シアター／ジェイムズ・ラブリエ**

○1992 年のドリーム・シアター

○アイアン・メイデンはいかにしてプログレッシブになっていったのか!?

メガデス／キング・ダイアモンド／ミルクル／メシュガー／コード・オレンジ／ディジー・ミズ・リジー／ジューダス・プリースト／サバトン／ブラッド・インカンテンション ...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.3 価格 1.650 円 (本体 1,500 円+税 10%)

Special Feature from 1985 to 2001 **アイアン・メイデン LIVE の刻印**

○ジューダス・プリースト『ブリティッシュ・スティール』40 周年

○炎立つスラッシュ・メタルの 1986 年

ビリー・シーン／マイケル・ヴァイカート／マイケル・アモット／キコ・ルーレイロ／ラム・オブ・ゴッド／ペリー・トゥモロー／メイク・ゼム・サファー／KOЯN ...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.4 価格 1.650 円 (本体 1,500 円+税 10%)

Special Feature **BABYMETAL** 彼女たちが突き進んだ 10 年……その視線の先にある未来

○ブラック・サバス『パラノイド』50 年目のドゥーム・ロード

カーカス／アイアン・メイデン／ナパーム・デス／ブリング・ミー・ザ・ホライズン／パワー・トリップ／ゴーストメーン／LOVEBITES／水野真紀 ...and More!

特別付録:
BABYMETAL
オリジナル
両面ポスター

METAL HAMMER JAPAN Vol.5 価格 1.650 円 (本体 1,500 円+税 10%)

Special Feature **エヴァネッセンス**

○エイミー・リー／ウィル・ハント

○女性シンガー飛躍のヒストリー

追悼 **アレキシ・ライホ**

○フィニッシュ・メタルの血統

BAND MAID／ハロウィン／プリティー・レックレス／ゴースト／エイリアン・ウェポンリー／ヘイトブリード／LOVEBITES／聖飢魔Ⅱ／谷原章介 ...and More!

[Vol.6]は 2021年9月 発売予定!

□編集部からの叫び!
日々のオフィシャル Twitter はこちら
>> @MetalHammer_Jp

メタルハマー・ジャパン
オリジナル・シャツ 続々登場!
New
ベースボール・シャツ
［ノーステイル・イエロー・ロゴ×SIX SIX SIX］
5,000円（税／送料込み）
HAMMER
SIX
SIX
SIX
HAMMER JAPAN
HAMMER JAPAN
Let's Enjoy Summer!
ホワイト・シャツでいこうぜ!
model ＞ no-mer-cy、KMK-Z
詳しくはオンデマンドTシャツ・サイト［TOD］をチェック!
https://t-od.jp/index.html

in Japan

LOUDNESS

WORLD TOUR 2019-2020 THANK YOU FOR ALL

21TH, MAY @ZEEP SAPPORO

Minoru Niihara

SETLIST

1. CRAZY NIGHTS
2. LIKE HELL
3. HEAVY CHAINS
4. SOUL ON FIRE
5. I'M STILL ALIVE
6. GO FOR BROKE
7. ROCK SHOCK
8. HIGH TRY
9. RUN FOR YOUR LIFE
10. WE COULD BE TOGETHER
11. LET IT GO
12. BLACKSTAR OBLIVION
13. STRIKE OF THE SWORD
14. MORTALITY
15. METAL MAD

ENCORE

16. LOUDNESS
17. CRAZY DOCTOR
18. S.D.I.

Akira Takasaki

LIVE PHOTO BY NAOKI HARADA

The Revival Day of AMPAN...Like a Phoenix!!!

Masayoshi Yamashita

Masayuki "Ampan" Suzuki

CONT

Let's Get Aggressive!
アグレッシブでいこうぜ!

Special Program P.24

ヘヴィメタルとは、ほかのどのジャンルよりも"激しく、攻撃的で、ラウドな音楽"である! そんな音楽性を形成していく過程には、"永遠のライバル"パンク／ハードコアの影響があるのも事実。そこで今回は、メタル界のなかでも特にアグレッシブな音を放ち続けるフィリップ・H・アンセルモとゲイリー・ホルトが、ヘヴィメタルとパンク／ハードコアの関係性を大いに語る。メタルが最も アグレッシブな音楽となった道筋の一端がここに!

インタビュー

フィリップ・H・アンセルモ P.26

ゲイリー・ホルト P.32

ヘヴィメタル・サウンドに宿るパンク／ハードコアの魂 P.36

The Documentary

IRON MAIDEN From UK P.42

1981年『キラーズ』の内側

ポール・ディアノが在席していたアイアン・メイデンの初期作こそ、パンクとメタルが自然かつ有意義に混じり合った最も顕著な瞬間なのではないだろうか。しかし、1981年に発売された2ndアルバムでは、早くもメンバー内に不穏な動きがあった……。当事者・関係者が語る、40年目の『キラーズ』。

Special Talk Session

HELLOWEEN P.8

アンディ・デリス × マイケル・キスク

ついに7人体制となって初のフル・アルバムをリリースするハロウィン。今回は"ハロウィンの顔"アンディ・デリスと、"伝説の立役者"マイケル・キスクという稀代のフロンマンによるレア対談が実現。新作制作からお互いの歌唱スタイルについてまで、ここでしか聞けないシンガー・トークが飛翔する!

GOJIRA From UK P.16

GOJIRAの魅力とは、苛烈なサウンドに包まれたメッセージや行動にこそある。バンドの中心人物であるジョーとマリオのデュプランティエ兄弟が、バンドの成り立ちから新作に込めた想いまでを教えてくれた。本稿にて、世界中の音楽家からリスペクトを受けるGOJIRAの根幹を知ってほしい。

ENTS

ヘヴィの流儀
Paul Gilbert P.90

80～90年代を代表するギター・ヒーローと言えば、やっぱりこの人！　新作『ウェアウルヴズ・オブ・ポートランド』でもハッピーな音楽を届けてくれたポールが、レーサーX、MR.BIG時代に考えていた“ヘヴィの流儀”とは!?

MONSTER'S RHYTHM TALK BATTLE!
SEIKIMA Ⅱ P.100

ライデン湯澤殿下×ゼノン石川和尚

地球デビュー36周年を迎えた聖飢魔Ⅱより、本号にはライデン湯澤殿下&ゼノン石川和尚が見参！　ロック／メタル・シーンきっての個性派リズム・セクションが、加入当時からの活動を振り返り、ドラムとベースの関係性を自らひも解いていく。野獣的リズム体の宴が、今始まろうとしている……。

From UK P.96
LAMB OF GOD

ラム・オブ・ゴッドの破天荒なシンガーの人生観は、やはりひと筋縄ではいかない。音楽を創造すること、音楽ビジネスについて、アルコールとの決別……ランディ・ブライズがロード生活を通して痛感してきたことは、我々の教訓にもなるはずだ。

FUTURE FOUNDATION P.114

Crystal Lake、SHADOWS、NOISEMAKERというラウド・ロック・バンドが、“ライヴハウス救済”を掲げ結成したユニット、FUTURE FOUNDATION。しかし、もとどおりにライヴができる日は決して近くない。ライヴ・アクトが想う、コロナ禍での活動とは。

SYSTEM OF A DOWN

From UK P.108

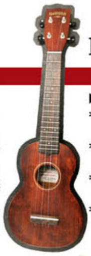
今なおラウド・ロック・シーンでの強い求心力を持つシステム・オブ・ア・ダウン、そのフロントマンであるサージ・タンキアンについて、あなたはどれくらい知っているだろうか？　幼少期の戦争体験、アメリカへの移住、バンドでの成功まで、自身に起きた驚異的とも言えるさまざまな出来事を振り返る。

BOOK in BOOK P.65
グレイテスト・ソングス TOP 100《2000年以降篇》

ベテランからニュー・カマーまで、100バンド分の“2000年以降のキラー・チューン”を［1バンド＝1曲］でランキング！　“今、ライヴで熱い曲は?”、“あのバンドのお薦め入門曲は?”、“なぜこの曲なんだ!?”など、多角的に近代のヒット曲がチェックできるスペシャル企画！

先取り夏スコア
ウクレレで楽しむ HR/HM ソングス P.54

夏になったらメタルでもウクレレ！　昨年からのブームの波に乗り、王道ハード&メタル系楽曲をプレイしちゃおう♪　ウクレレは初めての楽器としても手に取りやすいので、この機会に挑戦してみては？



▶収録曲
＊「スウィート・チャイルド・オブ・マイン」 ガンズ・アンド・ローゼズ
＊「モア・ザン・ワーズ」 エクストリーム
＊「エンター・サンドマン」 メタリカ
＊「クレイジー・トレイン」 オジー・オズボーン

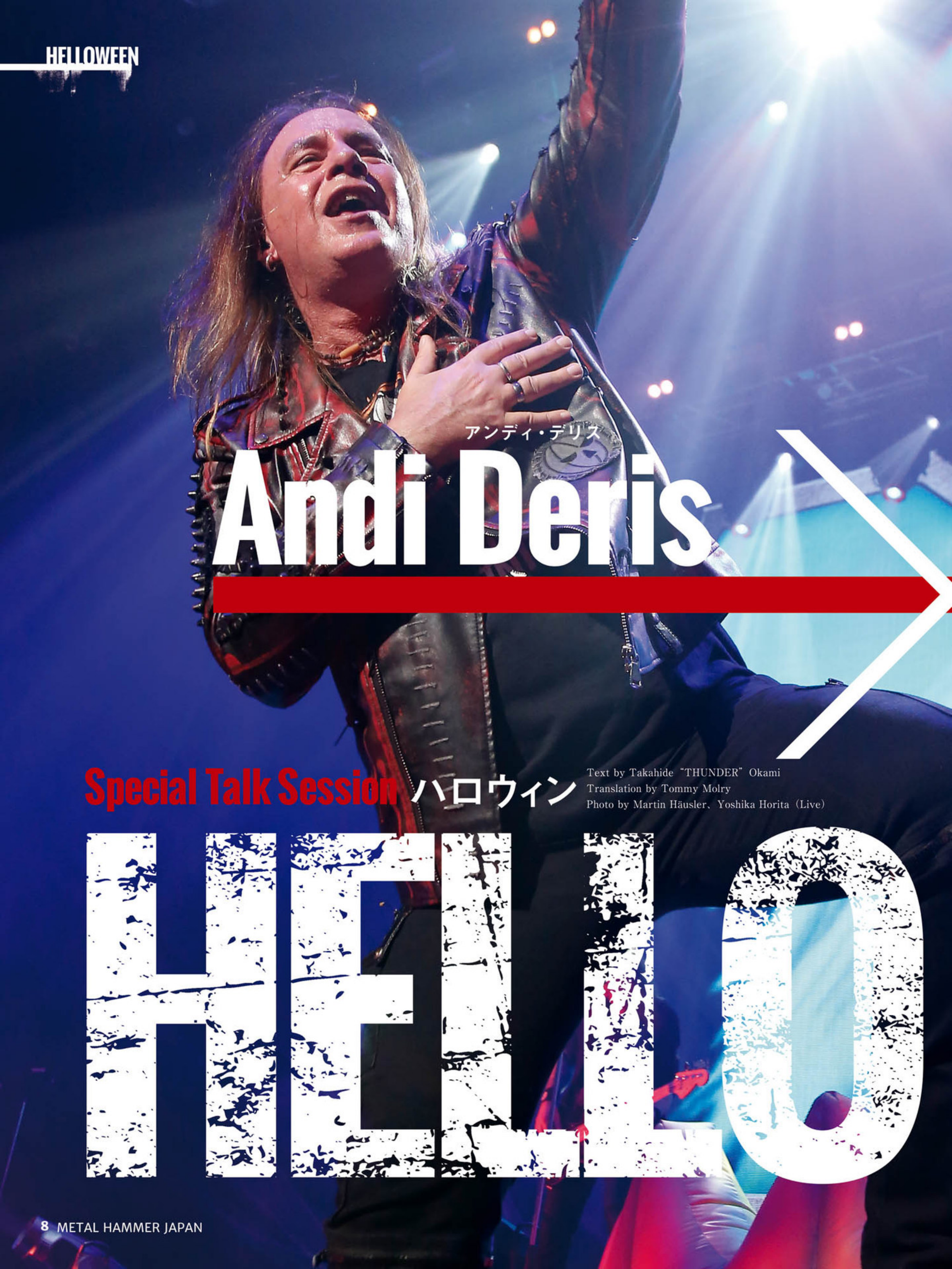
高崎晃 ×マーシャル・ビール P.134

いよいよ到来、ビールの季節！“ロック・アンプの代名詞”マーシャルのオフィシャル・ビールを、同アンプ・ユーザーの代表格である高崎晃がゴクリ！　ロック・ミュージックと爽快なビールの相性は抜群だ！

Tatsuya (Survive Said The Prophet) ×ZOOM G6 P.127

数々の楽器用プロセッサーをラインナップするズームの最新マルチ・エフェクターは、スマフォ間隔で操作ができる［G6］。本機をサバプロのTatsuyaがヘヴィ・リフで弾きたおす！

STARS' WORDS P.64
DISC REVIEWS P.122
METAL NEW GEAR P.131



アンディ・デリス

Andi Deris

Special Talk Session ハロウィン

Text by Takahide "THUNDER" Okami
Translation by Tommy Molry
Photo by Martin Häusler、Yoshika Horita（Live）

HELLO

『ハロウィン』
ビクター
VIZP-167（完全版／ 2CD）
VICP-65555（通常盤）

マイケル・キスク
Michael Kiske

WEEN

84
18

マイケル・キスクとカイ・ハンセンが復帰し、７人体制となって作られた初のスタジオ・フル・アルバム『ハロウィン』がいよいよ発売となる。"実現することはないだろう"と思われていたことが続々と現実化し、果たしてオリジナル・アルバムにまで届いたのだ。これは古くからのファンのみならず、近年ハマったという若いメタル・リスナーにとっても大きなプレゼントとなったことだろう。

そんなスペシャルの詰まった本作だが、そのなかでも耳を惹くのが、３人のシンガーによるヴォーカル・ラインだ。特に専任シンガーであるアンディ・デリスとマイケルは、それぞれの個性を生かし各時代のハロウィンを彷彿させつつも、入り混じることで新しいスタイルをも披露している。そこで本誌では、そんなふたりに対談をオファー。本ラインナップでのアルバム制作までの経緯を始め、互いの歌唱についてなどトップ・ヴォーカリストならではの意見をいろいろと語り合ってもらった。

メロディとアグレッションを共存させることにおいては、シーンきってのふたりがそろったバンドである。ぜひ、ほかではなかなか聞くことのできない貴重なトーク・セッションを堪能していただきたい！

2017年にマイケル・キスクとカイ・ハンセンが合流し、"パンプキンズ・ユナイテッド"として音源をリリースして以来、現在のハロウィンは７人体制がスタンダードとなっている。まさにドリーム／チームでの活動が続けられ、この度のフル・アルバム・リリースにつながったワケだが、そもそも、このメンバーでの活動が通常運転だと言っていいものなのだろうか。まずは改めて、現状況へとつながっていったいきさつについて聞いてみたい。

アンディ・デリス　最初に《パンプキンズ・ユナイテッド・ワールド・ツアー》を計画したとき、"もしツアーが成功してケミストリーが感じられたら、アルバムを作って続けよう"とみんなで決めていたんだ。幸運なことにツアーは快適に完走できて、予定どおりスタジオに入れた。スタジオって何ヵ月も一緒に過ごすし、家族よりも一緒にいることになるから、イヤなヤツと一緒ってのは無理だよ。幸せなことに今もって互いを好きでいられているから、誰かが"やってられるか！"となるまでは続けていく予定だよ（笑）。

マイケル・キスク　俺だったら、自分みたいなヤツとはゴメンだな(笑)。でもアンディには賛同するし、俺らは注意しながら一歩ずつ着実に進んでいったよ。実はツアー中に体調を崩していてキツいものでもあったんだけど、何とか乗り切れたし、言い争いも一切せずにやれたよ。2018年は大きなフェスへの出演だけだったけど、次のステップに向かう雰囲気ではあったよね。

当時はまだ"最初はツアーをすること以外、何の契約もしていなかった（マイケル）"そうだが、ツアーでの好感触をもって、このチームはそのまま進んでいくことになった。もちろん、まずはそのツアーを行なうための土壌を作ることが重要だったはず。その一歩目を知るために、少し時間を戻してみよう。

マイケル　2013年にアヴァンタジアとハロウィンがフェスで遭遇し、ヴァイキー（マイケル・ヴァイカート）と久々の対面を果たしてね。彼は友好的な雰囲気で、俺も彼に対する怒りなんて吹き飛んでしまったよ。恐らくあれがきっかけでオープンになれたんだと思う。そして、翌年にユニソニックがスペインでプレイしたときだったかな……カイから"手遅れになる前にハロウィンで何かしなきゃダメだ"と言われたのがすべての始まりだった。しばらくしてヴァイキーから電話がかかってきて"テネリフェに行って、アンディとうまくつき合えるか具合をみてきてくれ"と言われて。ファンからは俺とアンディの間に軋轢があるんじゃないか？と思われていたところもあったし、そもそも俺らは互いをよく知っていたワケでもなかった。スタッフからも"キミたちふたりがうまくやれなければ、すべてがつまずく"と言われていたんで、テネリフェでアンディと２週間くらい過ごしてみたんだ。すぐに家族みたいなものを感じたし、最高にビビッときたよね。それからはすべてが納得いく形で進んでいったよ。

アンディ　2016年の１月中頃のことだったかな。

マイケル　７人もメンバーがいるということは、ライヴでプレイできないものがないってことが武器になるけど、その一方で何かが少しでも噛み合わないとうまくいかないから、細心の注意が必要なんだ。そういった意味で俺らは賢くやれたよ。

手探りから始まった７人体制のハロウィンだったが、その後の団結はご存じのとおり。2017年のシングル「パンプキンズ・ユナイテッド」はファンの期待を大きく上回り、圧巻のステージは大歓声に包まれたのだった。当然ながら周囲の期待はさらなる活動の発展であり、その先に見るものは新作……オリジナル・フル・アルバムとなる。そしてここに誕生したのが『ハロウィン』だ。先行シングル「スカイフォール」からして、アンディ、マイケル、そしてカイによる３ヴォーカル・スタイルを最大限に生かした"これぞハロウィン"と太鼓判を押せる楽曲となった。ファンが想像していた７人のハロウィンが出す音と、寸分の違いもなかったのだ。最初から３ヴォーカルとしてスタートしたバンドのように。

アンディ　「スカイフォール」では＜マイケルだけ＞、＜マイケルと俺の半々＞、＜マイケルがメインで俺とカイが少しずつ歌う＞という３つのバージョンを作ったんだ。このやり方で吟味できたことが良かったね。結果的にこの曲は『守護神伝』のスタイルなので、マイケルがメインという形で正解だったと思う。

マイケル　それについてはデニス・ワード（※共同プロデューサー）といろいろ話し合い、うまく着地できたと思っているよ。俺のレコーディングはスムーズに進み、誰もが"これだよ！"と納得してくれた。でも

実は、カイからは作業が進んでから“自分ももう少し歌ってみたい”と提案されてね。俺らは基本的に作曲者（※同曲はカイによる）の意志を尊重するので、カイをメインにする可能性もあったと思う。だが『守護神伝』のスピリットを維持したかったので、俺をメインにしたバージョンが採択されたんだ。でも先週カイから“UK チャートでも 1 位になったんだぞ！”って留守電が入っていてさ。そして“お前が歌うってことにはたくさんの意味がある。これからも俺が書いた曲をお前に歌ってもらうって形でやっていくべきだ！”と続けていた。俺にしてみりゃ“知ってるよ！”という感じだったけど！ あまりの興奮ぶりだったんで、カイの音声は消さずに保存しているよ（笑）。

そうしてこの『ハロウィン』には、各メンバーの個性が光る 12 曲が収められることになった。ただしメンバーとしては、はじめからアルバム全体の完成形を見定めて作ったわけではないという。

マイケル　最初からこれを目指したわけではなかったね。“各自が作る曲がハロウィンを作る”というのがシックリくる捉え方かな。まぁ、蓋を開けてみれば全部がクラシックなハロウィン・ソングとなっているよね。例えば「アウト・フォー・ザ・グローリー」なんかは特に『守護神伝』期のタイプだよ。みんなピュアな気持ちで曲を書き、それらのなかから強いものを選んだんだ。アンディが書く曲には彼固有のスタイルがあって、俺に歌わせようとする曲にはやっぱり『守護神伝』期のフィーリングがある。「フィア・オブ・ザ・フォールン」にも似たようなヴァイブがあるかな。それでいてアンディがメインで歌う曲は俺とカイが抜けたあとのハロウィンらしさがあるよ。各メンバーが曲を書いているからこそ、このアルバムは俺らが今まで歩いてきた道のりをバランスよく表現していることになる。

マイケルは、本作に入りきらなかった“あまりにも素晴らしい曲”があったことも教えてくれた。それはアンディが歌うバラードで、マイケルは 1 ～ 2 曲削ってもいいからアルバムに収めたいと思っていたが、残念ながら今回は見送ることになった。

マイケル　それが俺の唯一の不満かな。

アンディ　でも、あれは将来的に次のアルバムに収めて、バンドを代表する名曲になるかもしれないから（笑）。

彼らがどのパートを歌うのかは、曲のイメージを左右する大きな選択となるが、その決定にはプロデューサーのチャーリー・バウアファイント、共同プロデューサーのデニス・ワードという気心の知れたふたりからのアドバイスも有意義であった。

アンディ　もし俺らふたりに任されていたら、あまりにも多くのことをチェックしなければならなかっただろう。基本的にはどの曲でもそれぞれがメインで歌ったバージョンを作り、そこからベストなパートをピックアップするという方法でやっていた。デニスはレコーディングしていく順番やさまざまな段取りを仕切ってくれたので、ストレスなくやれたよ。ときにはマイケルと俺でパートを差し替えてみたりしたけど、その判断はすべてグッドなフィーリングを得ることを基準にしていたんだ。

マイケル　基本的に俺もアンディもカイも、どのパートだって問題のないサウンドで歌いきることができる。でも固有のクオリティもあって、パートによってはきちっと振り分けることでパーフェクトに仕上がることもある。俺はアグレッシブに歌えるけどシャウトするようなタイプじゃない。ジェフ・テイトやスティーヴ・ペリーのようなメロディックなスタイルで、オペラのような歌唱法が得意とする場所さ。でもメロディをなぞるのではなくフックを主張するようなスタイルとなると、アンディのほうが 10 倍以上得意だ。

アンディ　シャウトのパートでも、マイケルが歌うことでグレイトだったところもあったよね。

マイケル　だね。具体的に何が違うのかを伝えるのは難しいけど、それによってバッチリなフィーリングが得られたってことかな。

アンディ　必ずしもシャウトばかりが正し

い選択だとは限らなくて、リラックスして歌い上げたほうがハマることだってあるんだ。

マイケル　どっちがうまいかという競い合いなんてどこにもなくて、パーフェクトなものを目指すプロセスに満足していたよ。

アンディ　自分ひとりだけでベストなものを作らなきゃいけないというプレッシャーがないと、自然とリラックスしていいものができたよね。俺が書いた「フィア・オブ・ザ・フォールン」では、作ったあとになって“どう考えてもブレスを取る余裕がないな”と思ったけど、ふたりでデュエットするならそういったこともまったく問題にはならなかった。これはかつてなら起こらなかったことだね。

マイケル　リスナーやファンに“楽しむ術を３倍にして提供した”とも捉えられるんじゃないかな。それにこのバンドはダニ（ルブレ／d）を除けばみんなが曲を書くわけで、それってアメイジングなことだよ。残念ながら今回俺は作曲で参加はしていないけど、将来的には貢献したいと思っている。俺らはクリエイティブな集団だからさ。

このように、３人の個性的な歌声が楽曲の完成度をより高めていき、ひとつの新生ハロウィンとなっていったわけだが、1993年にバンドを離れ、そして20数年ぶりに古巣へと戻ってきたマイケルには、彼ならではのバンドへの想いもあった。

Album is basically a statement of what is going to happen and what you play in live.
―アルバムっていうのは“俺らはライヴでこの曲をやるんだ”という宣戦布告のような存在。

マイケル　昔は自分が抜けたあとのこのバンドの音楽なんて、まったく聴く気にならなかったよ。俺自身傷ついたまま脱退したというのもあるし、メタル・シーンや音楽産業そのものに嫌気が差して距離を置いていた時期もあった。でもこうやってまた戻ってきて、アンディがやってきてくれたことに大きく感謝している。彼は曲を書くだけじゃなくて、90年代初めからずっとこのバンドの活動を支えてきてくれたんだ。

そしてその想いは、アンディへの大きなリスペクトとして表われている。彼は“アンディなくして今のハロウィンはない”と言葉にする。

マイケル　バンドに対して抱いていたわだかまりが消えたあと、シンガーとしてアンディをしっかりと認めるようになってきたよ。アンディがハロウィンに入って以降、俺は“アンディがハロウィンを救ってくれた”とさまざまなところで言ってきた。機能していなかったバンドに必要だったのはアンディだったんだ。バンドはまだ何をしていいのか方向性を見失っていたけど、アンディがいろいろと提唱をしたことで復活を果たしたと思っている。あのとき、彼が下したさまざまな決断なしに、現在のハロウィンは存在していなかっただろう。俺とカイが抜けたあとの作品を聴けば、それらのすべてがグレイトであることは明確だ。

マイケルが“『マスター・オブ・ザ・リングス』（1994年）なんかハロウィンらしいサウンドだけど、『守護神伝』のコピーなんかじゃない”とつけ加えるように、アンディによる新たな息吹が、バンドをそれまでとはまた異なった高みへと導いた。もちろん、それはファンも同様の意見であることだろう。

アンディ　俺からすると、自分以前のグレイトな曲を歌うっていうのはすごく難しいことだったけどね。だって俺はマイケルやカイとは違うタイプのシンガーだし、自分のベストを出せる曲を作るほうが楽だったのかもしれない。だからこうやってシンガーが変わって誰が得したかっていうと、俺らふたりなのかもしれないね（笑）。

マイケル・ヴァイカート、サシャ・ゲルストナー、カイ・ハンセン、マーカス・グロスコフと、弦楽器チームが作曲に貢献するなか、アルバム中最も豊作となったのがアンディの関わる楽曲だ。彼は作曲を行なう場合、自身の歌唱を含め、ヴォーカル・パートの振り分けをどれくらい意識したのだろうか。

アンディ　例えば「フィア・オブ・ザ・フォールン」は最初からデュエット曲として歌うことを想定していたね。それぞれが歌うパートを同じ量だけ用意しているんだ。ヴァースでは三行ずつ歌い、＜A→B→A→B＞といった形でリフレインが続く。それに

ここではさっき話したとおりブレスを取る暇がないわけで、もしライヴでひとりのシンガーが歌うとなると、ブレイクを挟んだりとか、何かしらの工夫をしなくちゃならないだろう。昔はヴァイキーが持ってくる曲に対して、"頼むからブレスの間を作ってくれよ！"と思うことも多々あったものさ(笑)。

マイケル 「ダウン・イン・ザ・ダンプス」(※ヴァイカート作曲）を最初に聴いたときは、ひとりじゃ歌いきれないだろうなと感じたよ。

アンディ そうなんだよ！ ヴァイキーは頭で歌って考える傾向があって、そのあと鍵盤を使ってメロディを整えていく。これだとブレスについて考えることなんかないから、そういったことが起こりうるんだ！

マイケル でも、そういった難しいことも捉え方を変えれば、成長するための機会となってくれるものでね。『守護神伝』を作っていたときは"なんて難しいことをさせるんだ！"と思っていたけど、俺自身成長することができたよね。トライすることで多くを学べた気がするな。

アンディ デュエット曲の話に戻るけど、今回はふたりで歌うという選択肢が増えたので、作曲方法自体の幅が広がった気がするんだ。

喉という"生楽器"を使うシンガーにとって、ひとつのショウで歌唱を分担できることは、長いツアーでコンディションをキープするためにも大変に重要なことなのだ。

マイケル ライヴで３時間くらいずっと歌い続けなくて済むのは大きなメリットだ。単に俺たちで半々というだけでなく、カイが歌う曲だってある。ツアー中に調子が悪くなることだってあって、そうなったら曲を差し替えて調子のいいシンガーが多めに歌うという選択だってできる。喉の調子が悪いときでもステージに上がらなくちゃいけないのはシンガーとしてとてもツラいことだし、それは誰しもがプレッシャーとして感じてきたことだと思うから。

アンディ 自分の調子が悪くても安心して任せられるシンガーがふたりもいるなんて、ホント助かるよね（笑)。どんなにギターやドラムがグレイトだとしても、シンガーがどうしようもなかったらライヴは台なしになっちゃうものだからさ。

ヴァイカートの作曲法の話が出たが、先に話に挙がった「ダウン・イン・ザ・ダンプス」は作品中白眉とも言える楽曲。マイケルの高らかな歌声から入るその作風はハロウィンを"よりハロウィンたらしめる"ものであり、今後のアンセムのひとつとなる可能性を秘めている。

マイケル それはあると思うね。ヴァイキーはメロディックなラインを持ってくることが多いけど、その展開の仕方がワイルドでかなり激しかったりするので、カイが持ってくる曲よりも歌うのが少し難しかったりもするんだ。デモの段階ですんなり体に入ってこなかったりもするからさ。そういった意味では、「ロボット・キング」も把握するまで時間がかかった曲だったな。アンディ、サシャ、ダニーはデモを聴いた段階で"まぁ、なんとかなるだろう"という感じで、実際に完成形を聴いたときには、彼らが言うとおりバッチリできあがっていたよ。

もちろん、それぞれの作曲家が個性的な楽曲を持ち寄ることで、『ハロウィン』を一辺倒ではない多面的なアルバムに仕上げているのはさすがのひと言。

マイケル ヴァイキーもカイも、できあがってくる曲には彼ら固有のスタンプみたいなものがあるんだよね。カイはジューダス・プリーストの大ファンだから、彼が持ってくるもののヴォーカル・ラインは、ちょっと聴けばどう歌えばいいかわかるものばかりだ。それでいて特定のパートでは"こう歌ってもらいたい"という考えも持っていて、そこは壊さないでおきたいと思っている。その一方で俺も自分らしく歌いたいと常々思っていて、少しやり取りすることはあるけど、何かしらの形で解決してきたよ。

ヴォーカリストとしてのテクニカルな面についても聞いてみたい。本作での弦楽器のチューニングには、スタンダード（ボトムがＥ音）と全音下げ（ボトムがＤ音）がある。ふたりには、歌いやすい傾向はあるのだろうか？

マイケル 俺はスタンダード・チューニングのほうがブライトさがあって好きかな。チューニングを下げるとダークなサウンドになってしまうので、個人的には避けたくもある。しかしギター・リフが全音下げで作られていることもあって、それをノーマルのチューニングで弾いてもうまくいかないことはあるからさ。そう考えると無理にノーマルにしたいとは思わないかな。歌っている立場としては、難易度に大きく影響してくるものではないんだけど。

アンディ どういったフィーリングで表現したいかによると思う。ダークな曲なら低いチューニングのほうが合うだろうから、ぜひそれで歌いたいと思う。何よりもまず曲が映えるチューニングであることが第一で、それが何であってもかまわないさ。

言わずもがな、やはり楽曲の良さありきということだ。

アンディ 全体的な傾向としては、レギュラー・チューニングのほうが声を張り上げてしまいがちなので、意図的にリラックスして歌おうとすることは多いよね。それでもリラックスし切れない場合は、ときとしてチューニングを下げることもある。ただkeyの選択を間違えるとまったく別のバンドの曲のように聴こえてしまうから、そこは注意が必要だよね。今回見送ることにしたバラードは、そういったことも理由だったかもしれない。作業をしていくうちにチューニングを下げることになり、完成したものがあまりにもデモとかけ離れていて、今回はちょっと違うなと思ったんだ。

マイケル デモのほうが高いkeyだったよね。俺もオリジナルのバージョンのほうが好きだったな。

アンディ 本当にそのとおりだ。だけどこういった実験って必ずしも悪いことばかりじゃなくて、チューニングを変えたことでうまくいった例もたくさんある。ただハロウィンらしさを失ってしまったら、それは問題だよね。

マイケル オリジナルのアイディアが間違いじゃなかったっていうことはよく起こるものさ。

"もうひとりのシンガー"であるカイの歌唱についても話題を向けてみよう。カイは先日"自分はあくまでもギターが本職"と語ってくれたのだが、彼の歌声が本作の攻撃的な面を強く補強していることは誰もが知るところだ。

マイケル 充分にグッドなシンガーだし、曲が彼を求めるならぜひ参加してもらいたいと思っている。彼の声はユニークで、将来的にはもっと歌ってもらったってかまわない。しかしアンディか俺が歌ったときにバチッとキマっている曲であれば、それ以外のことについて考えることはないんだ。もちろんカイが歌ってみてとてもクールだったならそれを使わない手はないだろうし、バン

ドにさらなる色を加えていけるとは思うよね。もしライヴ中に彼が歌う曲を挟むことになるなら、俺はバック・ステージでワインを呑んでひと休みさせてもらいたいな。

アンディ 『ウォールズ・オブ・ジェリコ』(1985年) でのカイの声はもちろん好きだよ。でも、マイケルが加入してからの時期でさらなる成功をつかんだのも事実だろ。スパイスとしてのカイの声の存在は大切にしていきたいけど、それを押し出したいがために彼に歌わせるのはちょっと考えが必要かな。カイを前に押し出せば初期のカラーが色濃く出てしまうだろうし、果たしてそれが必要なのかということを念頭に置かなければならないよね。

マイケル 結局はどうバランスを取るかということなのだろうね。パンプキンズ・ユナイテッドをやろうとなったときも、もともとカイはシンガーとしての参加ではなかったんだ。そもそも俺がバンドに加入したのはカイがシンガーとしての活動に限界を感じていたからというのもある。2〜3回のライヴだけなら問題なくやれていたけど、それ以上続けるとなると喉をやられてしまい、それで俺が入ることになったんだ。それから作った『守護神伝』の二作で、カイと俺が在籍していた頃の黄金期を作った。だからバンドの歴史を見れば大体どれくらいのバランスが丁度いいのかわかるもので、そこではファンが聴きたいものや求めているものも明らかになっていくよね。

▲マイケル・キスク (vo)、カイ・ハンセン (g、vo)、ダニ・ルブレ (d)、サシャ・ゲルストナー (g)、アンディ・デリス (vo)、マイケル・ヴァイカート (g)、マーカス・グロスコフ (b) ／L to R

これまでにない組み合わせによって、実にハロウィンらしいアルバムとなった『ハロウィン』。悔しいのは、当コロナ禍によって生のライヴが観られないこと……このことに尽きる。当然ながら、それを一番に痛感しているのはメンバーたちだ。

マイケル 最新ライヴならば、きちっとした形でやれるまで待ちたいね。来年のどこかでできればいいなと思っているよ。俺は配信ライヴっていうのがあんまり好きじゃないので、できることならそれはやりたくない (笑)。新たにアコースティック・バージョンを録音するとかだったらかまわないけどさ。そういうのってライヴ形式でやる必要はないしね。でもオーディエンスが目の前にいないライヴっていうのは、それと同じわけにはいかないから。

アンディ まったくの同感だね。配信っていうのはライヴではなくて、もはやプレゼンテーションだよね。だけどそんな状態じゃ俺らは自分たちをちゃんとプレゼンできるかどうかもわからないよ (笑)。

マイケル ガンマ・レイがそういった試みをしたんだけど、カイはとてもヘンだって言っていたよ。俺も同感で、コンサートっていうのはオーディエンスのエネルギーで8割くらい作られているようなものだ。ライヴをやるときは事前にリハーサルをするけど、ライヴで演奏して初めて完成するようなものだから。彼らからのフィードバックがあってバンドにも熱が入ってくるし、それがオーディエンスをさらに過熱させていき、いいループが形成されるってことだから。オーディエンスの代わりにカメラが立てられた空間で、コンサートのように振る舞うことはできないかな。そうなってしまうと結局は俺らの演奏がつまらないものになってしまうと思う。

もちろん、終らないパンデミックはない。ファンとのつながりを大切にする彼らは、近い将来、必ずやここ日本にやってきてくれるはずだ。それまでは我々もグッと辛抱し、力を蓄えておこう！

マイケル ハロウィンのどの活動時期においても日本は大切な場所であり続けたし、これからもそれは変わらないだろうね。君たちの目の前で披露する日は絶対やってくる。起きていることが永遠に続くわけじゃないし、来年には普通の生活が戻ってくるはずだよ。次第にライヴ・コンサートも開催されるようになっていくだろうさ。これだけ退屈な時間を過ごしてきたんだから、空港で2時間待ちになったりフライトがキャンセルされたとしても、俺たちが不満を言うことはないよ (笑)。

アンディ 俺もマイケルと同じ気持ちだけど、俺たちロック・ミュージシャンはライヴをプレイすることで生きている。昔はアルバムを作って売るだけでもミュージシャンでいられたけど、俺は当時からライヴをしないなんてスゴくヘンだと思っていたよ。頼むから昔の時代に戻ってくれって感じさ。俺が作曲をするときは、いつも"これをどうやってライヴで再現すりゃいいんだ?"と考えている。それにも関わらず、それを人前で演奏できないだなんて、悪夢としか言いようがないよね。

マイケル ロックンロール、ハードロック、メタルと、ロック・ミュージックっていうのはいつの時代もライヴありきでやってきたものだし、アルバムっていうのは"俺らはライヴでこの曲をやるんだぜ!"という宣戦布告のような存在だ。メタルに限らなくったっていい。ジョン・メイヤーやテイラー・スウィフトだって活動できていないわけで、世界全体で起きていることだ。俺らみんなが抱えている問題なわけだし、みんなで協力して抜け出そうぜ！

The latest article from UK

Text by Eleanor Goodman
Photo by Gabrielle Duplantier
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』348

GOJIRA ARE THE BAND OF THE DECADE...

現在のエクストリーム・メタル界において、GOJIRAほどミュージシャン／音楽ファンの両方面から強い支持を得ているバンドはいないのではないだろうか。高い演奏力から成る強烈なサウンドはもちろん、音だけにとどまらないメッセージ性の高さとそれに伴うアクションこそがその理由だ。グラミー・ノミネートを始めさまざまな賞に輝いた前作『Magma』から5年、待望の新作となる『フォーティチュード』にも、彼らの訴えが苛烈な音として収められている。

本稿ではバンドの創設メンバーであるジョーとマリオのデュプランティエ兄弟が、GOJIRAの骨子が生まれた背景、そして新作に込めた想いについて語ってくれた。25年に及ぶキャリアを持っているGOJIRAではあるが、彼らは2020年代の先端を進むバンドでもあるのだ。

クリスチャン・アンドルー（g）、マリオ・デュプランティエ（d）、ジョー・デュプランティエ（vO、g）、ジャン＝ミシェル・ラバディ（b）／L to R

ジョーとマリオのデュプランティエ兄弟はGOJIRAにとって7枚目のアルバムとなる『フォーティチュード』に取りかかっていた2019年の秋、“アマゾンが燃えている”というニュースを目にした。

決して自然発生的な小さなものではなく、何エーカーも燃え広がって農業や林業に従事する者、そして野生の生態を襲い、ブラジルを始めとした南米各国の民族を脅かしていた。しかし多くの人にとっては自分と無関係のデイリー・ニュースであり、翌日には普段の生活が待っていた。しかしデュプランティエ兄弟にとって、そうではなかった。

同日、腹の虫が収まらない彼らは楽器を手に、怒りを発散すべくプレイした。その結果として生まれたのが最新のシングル「アマゾニア」だ。ジョー・ハープ（※口琴）によってドライブされ、喉の奥から吐き出される歌唱、また民族的パーカッションの集中砲火はまるで『ルーツ』時代のセパルトゥラに通じるものもあり、同曲は瞬く間にグルーヴ・メタルのアンセムとなった。曲中、ジョーは《The greatest miracle is burning to the ground! ／最大の奇蹟が焼け落ちようとしている！》と叫ぶ。

しかしアマゾンで起こったこの危機について、彼らは満足できなかった。バンドは実際に“何か”行動をしたいと考え、オンライン・オークションを立ち上げ、リミテッド・エディションのアート・プリントを販売し、その収益を［The Articulation Of Indigenous Peoples Of Brazil（APIB）］という団体に寄付する。さらにフロントマンのジョーは方々に電話をかけ続け、どういった援助ができるのかを問い合わせ、現地団体のリーダーたちと会うことになった。

“WE HAD A FASCINATION FOR BLOODY THINGS AND DEATH”

血みどろの出来事や死に対して憧れを抱いていた。
──ジョー・デュプランティエ

*“そういった人たちと話をすることは、とてもエモーショナルで強烈なものをもたらしてくれた。俺は震えていたよ”*と、ジョーは当時のことを回想してくれた。*“ZOOMを介してのことだったんだけど、こういった状況で彼らはモダンなツールを使って対話を行なってくれた。彼らは常に犯罪組織による攻撃、銃撃、放火から自分たちを守っているんだ”*。

GOJIRAは、ほかのバンドと大きく違うところがある。彼らはこういった事態を前にして無力さを感じつつも、決断力に基づいた行動をとり、怒りに満ちながらも素晴らしい音楽を作っていく。まるで生きている意味を模索し、現在目の前に広がる世界をより良い場所にすべくその方法を探しもがいているようにも感じられはしまいか。

彼らはここ数年のなかで久しぶりの、メタルのしきたりから踏み出ようとするバンドなのだ。それはスリップノットのマスク、サバトンの戦車、ゴーストの司祭的ギミックを用いるのではなく、あくまでも純粋に自分たちらしくあり続けることで実現しようとしている。 生死に対する屈託のない望みや恐れは、とてつもない勢いとともにバンドが作る音楽のなかで表現され、リスナーはそこから力がもらえることだろう。

前作である2016年発表の『Magma』について、メタリカのカーク・ハメットは*“驚異的な芸術作品”*と表現している。また彼らは後続世代をもインスパイアしていて、BLACK PEAKSのフロントマンであるウィル・ガードナーは、2005年のアルバム『From Mars to Sirius』以来のファンであることを公言。*“俺は彼らのユニークでパワフル、そしてエモーショナルでディープなサウンドに引き込まれてしまったよ。バンドの音楽は信じられないくらいヘヴィで超テクニカルであるのと同時に、その核には人間らしさが存在しているんだ”*と語っている。

GOJIRAは今、新アルバム『フォーティチュード』をリリースしようとしている。本作はカタルシスを起こすかの如く垂れ流されるブラスト・ビートのみならず、瞑想的なチャントが秘める力に価値を置いた驚くべきアルバムだ。マラソン選手を沿道から応援するサポーターのように彼らは人々を力づけ、各リスナーたちが背負ってきた障害を取り除き、どんな人にもポテンシャルがあるということを気づかせてくれる。GOJIRAは単なるひとつのバンドという枠組みを超えた、現在のメタル界が必要としている存在なのだ。そしてこの地球が必要としているバンドでもあるのだ。

GOJIRAは典型的な“お高く止まったバンド”ではなく、自身もそれを自覚している。ジョーはインタビューに一番乗りで現われたが、その一方でドラマーである弟のマリオは、私たちを待たせ続けた。ジョーは“アイツはなんてロック・スター気取りなんだ！”と、“若干大人しめにしたフランス版のアクセル・ローズ”に電話をしてくれた。

彼らがセックス、ドラッグ、ロックンロールにまつわるストーリーを書くことはないが、着飾ることのない自分たちらしさを持っている。謙虚だが冷静なジョーがリードして質問に答え、その一方でマリオは昔のことなどは記憶の彼方に……といった具合。

ふたりが前身のGODZILLAをフランスで結成したのは1996年のことで、ジョーは19歳、マリオは14歳だった。USアンダーグラウンドから出てきた身の毛のよだつたくさんのバンドに触発され、自身たちが崇めてきたヒーローを目指して音楽を作ってきた。「Brutal Abortion」、「Rigor Mortis」、「Bleeding」は、初期のデモに収録された曲のタイトルである。

*“俺らは常にああいったエネルギーを求めていて、モービッド・エンジェル、カンニバル・コープス、デスといったバンドを聴いていた。死、ゴースト、恐怖、そして血みどろの出来事に対して憧れを抱いていたんだね。どことなくゲームのルールを理解することに似ていた気もするよ。なんていうか、ああいった世界にちょっとずつ自分たちを合わせていったような感覚だ。しかしかなり早い段階からそういった狭い世界から抜け出し、どうしたら自分たちの世界観を作れるのかを理解してもいって。マリオはかなり真剣に取り組んでいて、あの頃コイツは長髪で……”*とジョーが説明してくれた。

*“そうなんだ。当時の俺の夢はフロリダのタンパに行くことだった”*と、興奮気味にマリオが話す。*“モービッド・エンジェル、カンニバル・コープス、デスたちが独創的なアルバムをレコーディングした［モリサウンド・スタジオ］に行くことを夢見ていたよ。あのスタジオから生まれたプロダクションはすべてアメイジングだったから”*。

2001年リリースのデビュー・アルバム『Terra Incognita』で彼らは独自の世界を展開した。ときを同じくしてオリジナル・ベーシストのアレクサンドル・コルニヨンはジャン=ミシェル・ラバディに交代し、バンド名をGOJIRAとしデス・メタルの新たな光となった。

棍棒で殴りつけるようなオープニング曲

「Clone」は母なる大自然を犯すことへの警鐘をクリーンな歌声で鳴らし、プリミティブなパーカッションや叫び声が各楽器パートの背景に配置されていた。そして「Love」というタイトルの曲さえ収録していた。

ジョー曰く*"俺らは突然閃き、そして気づいたんだ。曲に「Love」と名づけたってかまわないってことにね。愛に関する曲で、それがデス・メタルであったとしてもまったく問題なかった。愛っていうのはとてもパワフルで、ときにはとても破壊的になれるものだよ。俺らはかなり早い段階から＜自分たちの音楽には何が許容でき、何がダメなのか＞といった考え方をしなくなっていったんだ"*。

実在するテーマを開拓した各レコードには激しさを補う形でパッセージや間奏、短い曲が散りばめられ、それらサウンドのギャップの埋め方は、彼らの屋台骨であるデス・メタルからすると想像していなかったものばかりだった。

しかし ニュー・アルバム『フォーティチュード』収録の「ザ・チャント」には、我々も驚きを隠せなかった。

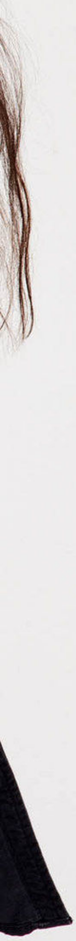
「ザ・チャント」はレイドバックしたヴォーカルのリフレインによって抑揚づけられたダブを感じさせるロック・ソングで、彼らはまだ踏み込んだことのない領域に足を踏み入れていったのだ。

*"「ザ・チャント」でも、俺たちがどの曲にも込めていることを表現していて、それは団結したりと慈悲を持つことであり、このチャントは空や宇宙、見知らぬものに向けた信念や祈りなんだ。これはある意味生まれつき備わっているもので、もちろん俺らの音楽のなかにも備わっている"*とジョーが説明する。

では、その備わっているものとは、どこからやってくるのだろうか？

*"わからないなあ。恐らく俺らは、両親によって決まりきった規範から外に出て考えることの大切さを教えられたんだと思う。母はフランスにやってきたアゾレスの血を引くアメリカ人で、ヨガのインストラクターをやっていてね。街中に住むほかの母親たちとは、当然ながらフランス語の発音が異なっていて。けっこう声がデカくて、話好きで。その一方で父は口数の少ない男で、例え話をしながら俺らに教えることが多かったね"*とジョー。

彼らの父ドミニク・デュプランティエについて、マリオは*"スマートで魅力的だが、短気で皮肉屋なところもある典型的なフランス人アーティスト気質だ"*という。マリオの友人たちはドミニクのことを恐れ、ジョーの妻



も最初は恐れていた（ジョー曰く“初めて俺の妻がドミニクを見たとき、彼女は文字どおり走って逃げたんだ。おかしな話だろ！”）。「To Sirius」（『From Mars to Sirius』収録）のビデオに出演する無表情なドミニクを見れば、この兄弟の意味するところがわかってもらえることだろう。彼はメタルに興味を持っていたわけではなかったが、銀行から借金をしてバンド初の自宅スタジオ設立の際の予算を捻出し、施工工事も手伝った。

人里離れ、起伏のある道の奥にひっそりと佇む古民家にデュプランティエ・ファミリーは住み、真ん中の兄弟のギャビを含む一家は、ワールド・ミュージック、カントリー、アフリカンなパーカッションなどを聴いて育つ。彼らがGOJIRAを始めた頃、地域にはメタル・シーンなど存在せず、彼らは孤高な存在だった。しかし前述した大西洋沿岸のデス・メタル・バンドへの憧憬は凄まじく、セパルトゥラの『ケイオスA.D.』や『ルーツ』でのパーカッションにインスパイアされていた。

とても興味深く、そして彼らが常に質問されてきたことだが……そういった世界各国の音楽を聴いてきたにも関わらず、なぜヘヴィ・ミュージックに傾倒してきたのか？ ジョー自身はその答えをいまだに把握していない。“今も不思議なんだけど、どうして俺らは最初にメタルに魅せられてしまったのだろうか……。でも 早い段階からさまざまな要素を取り入れてきたことについて、自分では何も驚きはしないかな”と振り返る。

GODZILLA～GOJIRA以前、このバンドはジョーとマリオのふたりだけだった。フランス南西部海岸の人口4000人程度の街オンドレでは、多くの人々がサーフィン、ハンティング、トレッキングを楽しみ、山やビーチに出かけている。異なる文化的背景の両親を持ったデュプランティエ兄弟は、アートや森で遊ぶことを好んでいた。

彼らは常にアウトサイダーだった。ジョーは“俺らは『アダムス・ファミリー』と呼ばれていたんだよ”と懐かしむ。

ジョーにとって、学校は決してハッピーな場所ではなかった。いじめられて壁に叩きつけられることもあれば、濡れたトイレットペーパーを投げつけられたこともあった。さらに一風変わった身なりを揶揄されることさえも。“俺は学校に行きたいだなんて、これっぽっちも思わなかったよ。周囲はヒドい人間ばかりだと思っていたから。今日まで友達だと思っていたヤツが、翌日から敵になっていたり……。あの頃の俺はかなり繊細だったんじゃないかな”とバツが悪そうに語る。

その一方で、テニスをしていた5歳年下のマリオは、同級生とうまくつき合っていた。当時のマリオから見てもジョーはかなり内向的なティーンエイジャーで、住んでいた地域の外の世界に対する憧れを強く持っていたと証言する。“ジョーは常に……例えばニューヨークといった街並みや野球に興味を持っていて。片や俺は周囲の現実に目を向けていて、頭のなかで旅をしていたジョーとはまるっきり異なる子供だったと思うよ”。

“確かに、そういったことは無意識ながらあっただろうね。多分、母が生まれ育った場所に惹かれていたんじゃないかな”と、ジョーはその理由をつけ加えた。

彼らの母パトリシア・ローザは、クリエイティブな芸術が文化的に評価される自由の大地での学生時代について、ジョーに話したことがある。ジョーが通っていた学校での音楽の授業はせいぜい週に1時間程度で、そこではなかば強制的にフルートを吹かされていた。しかしパトリシアの学生時代はトランペット、チェロ、バイオリン、ギターといったさまざまな楽器を自由に選ぶことが認められていたのだと。

“母が教えてくれたアメリカの雰囲気や、母が持っていたそれに俺は惹かれていた。すべてがポジティブなエネルギーに満ち溢れているように感じたんだ。俺らは小さな町で生まれ育ったから、どうにかしてそこから逃げ出して新たな環境で過ごすことを夢見ていたんだね”。

ジョーの夢は、彼が13歳のときに実現した。それはペンシルバニアの州都ハリスバーグ近所に住む母の親類に会うために、初めて渡米したときのことだった。空港で彼と従兄弟は叔父に迎えられ、車の窓から見える高層のビル群やその隙間から見えた雲は、オンドレの片田舎で育った彼にカルチャー・ショックを与える。

“叔父さんは俺をピックアップして、ニューヨークのマンハッタン、ハーレム、ブルックリンをドライブしてくれた。通りを行き交う人たちを見て俺の頭はブッ飛んだね。着ていたものだけじゃなくて肌の色も異なり、たくさんのコミュニティが存在していたんだ。ずっと夢を見ていた幼い子供にはとても魅力的に映ったんだよ”と、今も興奮気味だ。“そして親父は言っていた。「お前がニューヨークに行くとしても、帰ってきたらそのことをいつかは忘れてしまうだろう。あっちは何もかもがクレイジーだ。空気は汚染されていて、空は灰色、どこもかしこも車ばかりだ」とね。でも実際の俺はフランスに帰ってきて火が点いてしまった。「俺はあそこに住みたいんだ！」ってさ”。

“PEOPLE CALLED US THE ADDAMS FAMILY”

俺らはアダムス・ファミリーと呼ばれていたんだよ。
――ジョー・デュプランティエ

“1ヵ月経って戻ってきたとき、ジョーはまったくの別人になっていた”と、兄を見ながらマリオは話す。“あの旅行はアニキにとって大きなインパクトを与えてくれたんだろ？ 自信に満ちていたし、心も体もより良い状態になっていたよね。最初は誰なのかわからないくらい、アニキがグレイトに見えたんだから！”。

ジョーの興味が政治的なものに移るに連れアメリカン・ドリームへの憧れは収まっていったが、GOJIRAを結成して人気を博していくにつれてそれは再燃していく。レコード会社にピックアップされるのを待つのではなく、彼らはアモン・アマースとチルドレン・オブ・ボドムとともにUSツアーに出た。しかし今度はマリオが多様性と街のスケールに発狂することとなった。

“到着した初日から、俺は本当に驚いていたんだ。ジョーは13歳のときに最初のショックを受けたようだけど、俺は25歳のときに最初のショックを受けたんだな！”。

ジョーがニューヨークを拠点にするようになったのは2011年のこと。マリオはのちに加わり、2014年には新たな本部として[Silver Cord Studio]を設立する。彼はいまだに移住を決意した理由を探しているが、シックリきたからという理由以外に思い浮

かばないようである。

“俺がやっとのことでアメリカにやってきたとき、何かが自分に合っているってことがわかった。エネルギーを感じたんだ。ヨーロッパとアメリカの両方が体験できたことを嬉しく思うね。ヨーロッパ、特にフランスの教育や繊細さ、そして共和制や革命といった歴史的背景は、フランスの文化に深く根づいている。アメリカでは新たな世界への好奇心が強く、何事もラウドで、楽しく、ビッグなんだ。ヨーロッパ人からアメリカ人へのたくさんの偏見があることも知っている……アメリカ人はとにかく何でも大きくあることを望んでいるからさ。それでも何かしらのおもしろさや自由がそこにあるのを俺は知っているさ”。

“FORTITUDE IS GONNA SMASH MAGMA!”

『フォーティチュード』は『Magma』をブッ壊してくれるはずだぜ!
――ジョー・デュプランティエ

2015年ニューヨーク市のクイーンズにて、GOJIRAは[Silver Cord Studio]で初めて曲をジャムった。「Silvera」と形式的に仮タイトルをつけたが、それは彼らの記憶に深く残り続ける。その後数ヵ月間に渡り、彼らはのちに『Magma』に収録されることになる曲の制作をくり返したが、ふたりの母であるパトリシア・ローザの死によって、その作業は中断された。悲しみと痛みのなかで作られたにも関わらず、アルバムでは“彼女の息子であったことへの喜び”を表現していた。“母さんの魂は何かしらの形で俺らの側にいてくれるんだ”と、ジョーは我々に語ってくれた。

『Magma』は2016年6月にリリースされ、GOJIRAのアルバムとして最も人々の心に届いた作品となった。“とても私的でパーソナルなアルバムとなり、自らの感情を深堀するほど自分の気持ちに正直となり、さまざまな人たちの心に近づくことになった。矛盾しているように聞こえるかもしれないけど、自分の内面の深いところに潜り込んで曲を書くと、より一層リスナーに何かが伝えられるようになるんだ。『Magma』にはそれがあったってことだね”。

その年の終わりのグラミー授賞式にて、彼らのアルバムが《ベスト・ロック・アルバム》に、「Silvera」が《ベスト・メタル・パフォーマンス》にノミネートされた。2018年には［ブラッドストック・オープン・エア］フェスティバルにヘッドライナーとして凱旋。バンドの外からすれば『Magma』は大きなステップアップであったが、本人たちにしてみれば何年もかけて作ってきたキャリアの一部であるに過ぎない。

“多くの人たちが、俺らの飛躍を目にしたことだろう。「おぉ、『Magma』を引っ提げた単独公演はけっこうスケールが大きいぞ!」って具合にね。でも自分たちにしてみれば、そこに至るまで血の滲むようなハードワークがあったし、もし俺らがあのアルバムで失敗していたとしても、いつの日か同じ境地に達していたはずさ。俺らにとって『Magma』はグッドな一歩となり、大きく開けたところがあったけど、それもこれまでの全アルバムがあったからだと思う。ひょっとしたら俺は、「Stranded」と「Silvera」の2曲がどれだけ大きかったのかわかっていないのかもしれないけど”とジョーは話す。

“これら2曲は大きかったと思うね。両方とも聴きやすくて、しっかりと練られていて、強烈なサビがあるから”とマリオがつけ加える。

“それもあったかもね。俺らは曲の形を少し変えたんだ。最終的に曲にはなったけど、壮大なメタル・トラックになるまでにはそれなりの旅路があった。でも『フォーティチュード』は『Magma』で作ったものをブッ壊してくれるはずだぜ!”。

……そう言ってジョーは不敵な笑みを浮かべた。メタル・バンドのフロントマンなら誰もが行なうお決まりの振る舞いだが、これは彼の本心からきたものだろう。『フォーティチュード』は『Magma』ほど感情を露見させた作品ではないが、彼らが過去25年に渡りトライしてきたことのすべてをさらに磨きあげた圧倒的なアルバムである。楽曲群は明快で迫力があり、バンドの新しい姿を示している。

推進力を伴うオープニング曲「ボーン・フォー・ワン・シング」は死と向かい合い、ジョーは最初から唸りをあげていく。「ホールド・オン」はヴァードゥルナのアルバムに完璧にマッチしそうな儚さを感じさせるヴォーカル・ハーモニーで始まり、我々が向き合う“ストレスの海”を表現するサウンドの大渦巻きへと堕ちていく。聴き慣れたピック・スクラッチのトリックで始まる「ニュー・ファウンド」はGOJIRA流の怒りを感じさせるクラシックで、ドライアイスの霧のなかでヘッドバンギングをくり返すオーディエンスたちをアジテートすべく書かれている。「スフィンクス」と「イントゥ・ザ・ストーム」も完全に壮大だ。

彼らはプロダクションについて以前にも増して真剣に考え、ドラム・テックのオーディションも行ない、レジェンドであるアンディ・ウォレスをミキシングに迎えた。アンディはスレイヤーの『レイン・イン・ブラッド』やシステム・オブ・ア・ダウンの『毒性』といったランドマーク的アルバムを手がけたのみならず、彼らが愛して止まない『ケイオスA.D.』と『ルーツ』もミックスしている。このことを知れば、「アマゾニア」の大地を揺るがすサウンドにも納得という感じだろう。

この曲は最も話題となっており、彼らが今感じていること――政治や警察の腐敗により、アマゾンに暮らす人々は絶望のなかにいて、それはさらに悪化している――といったことを表現している。

“自殺件数も増加していて、毎日防弾チョッキを着て子供と離れて暮らしている人たちと話したこともある。彼らには生活すること自体が恐怖なんだ。かなりのストーリーがある。俺たちはこのことを伝えていきたいし、音楽を通じて困っている人たちを助けたいと思っている。森の力、自然のなかにある力が俺らに影響を与えてくれるんだ。火山、波、巨大な樹といったものもね。だから俺たちはこれらをリスペクトして守っていく責任があるんだ”とジョーは言う。

ジョー・デュプランティエにとって、GOJIRAは単なるバンドではない。とはいえ、音楽に秘められた緊急メッセージを伝えるための“乗り物”でもない。

“これは哲学的探求みたいなもの。どうして俺らはここにいて、どうすれば日々気持ちよく暮らせるのか？　死ぬことや生きることへの恐怖、そして境界をブチ破ること、自分を探すこと。ある意味セラピーみたいなものだね”。

もしジョーが25年も続けてきたこのバンドをさらに押し進めようとするのであれば、世界がより必要とするバンドとなるだろう。『フォーティチュード』が重要なアルバムに感じられたのなら、それはまさにそのとおりということだ。

彼らはこのアルバムで転換期を迎えたと言える。この瞬間にもカオスへと陥ろうとグラついている世界に、このアルバムは救いの手を差し伸べると同時に、ファンへ集結を呼びかけている。ほとんど知られていないフランスの僻地で生まれたバンドが忍耐力や強い意志を持ってこれだけのことを成し遂げられるのであれば、自分でも何かできるのでは……と感じることだろう。

GOJIRAはメタルの目覚ましい変化を体現した。セックス、ドラッグ……何でもありといったひと昔前のイメージは幸運なことに消え去った。シーンはもはや外を向いており、個人的なことはもちろん、政治的なだけでなく、地球の住人として環境破壊といった現代が抱えるクライシスにも向き合おうとしている。バンドは『フォーティチュード』というパーフェクトなサウンドトラックを作り、皆にこの惨状を抜け出そうと呼びかけている。

*“自分の人生のなかでどうありたいのか、そして何を成し遂げたいのか、自らに問いかけてみるんだ。音楽や歌詞を作ることはグレイトだけど、具体的な行動こそが大切だよ”*とはマリオ・デュプランティエの言葉だ。

『フォーティチュード』を作ったGOJIRAは、『Terra Incognita』や『From Mars To Sirius』を作ったバンドとは別のビーストになったのかもしれないし、単に表面が変わっただけなのかもしれない。その上面を削り取れば、その下にはデス・メタル・ファンたちが見えることだろう。*“彼らは俺らのDNAに組み込まれている”*とジョー・デュプランティエは言う。*“崖を登ったり、凧を飛ばしたがる人がいるかもしれない……。俺らは顔面を燃やしてやりたいのさ！”*。

『フォーティチュード』
ワーナー／WPCR-18421

世界的な評価を得た『Magma』(2016年)に続く、7枚目のフル・アルバム。楽曲の綿密さや激しさもさることながら、そのテーマにも耳を傾けてほしい。

Let's Get Aggressive!
アグレ
でい

Photo by Patti Ouderkirk/WireImage

ジブ
うぜ!

ヘヴィメタルは、ほかのどのジャンルをも圧倒するインパクトを持っていなければならない。ファンからはもちろん、周囲からもそうあってほしいと求められる宿命にあるのだ。ほかに類を見ない激しいサウンド、血湧き肉躍るステージング、耳をつんざく大音量……これらの要素がそろってこそ、メタルはメタルとしての存在価値を発揮するのである。

そのため先人たちは、それぞれの激情をもってヘヴィメタルという音楽の地位を築いてきたわけだが、そこでは少なからず、他ジャンルからの影響というものがある。こと過激であるという点で言えば、" 永遠のライバル " パンク／ハードコアとの混成は欠かせなかったことだろう。純然なメタル的伝承を骨子に激しさを増していったバンドは多数いるが、その一方でパンク／ハードコアという異分子を吸収し、より凄烈さを極めていったバンドも多い。今もってファンの好みが大きく分かれる両ジャンルであるが、むしろ " アグレッシブな音楽をプレイする " ということで言えば、メタルもパンクも同じ精神を持って生み出された音楽とも解釈できるのではなかろうか。

そこで今回の特集では、そんなメタルの " やんちゃな面 " とも言える、パンク／ハードコアからの影響をクローズアップ。強烈なアティテュードで 90 年代メタルに再び熱気を与えたフィリップ・H・アンセルモ、粗野こそ魅力と言えるスラッシュ・メタルをかき鳴らし続けるゲイリー・ホルトが語るその親和性を筆頭に、後半ではパンクの匂いも多分に内包したアイアン・メイデン『キラーズ』の真実にも目を向けてみたい。

やっぱり、メタルはアグレッシブでなければいけない。テクニックやコンセプトももちろん必要だが、それ以前に豪快で激しく刺激的でなければ。だって、そのほうがカッコいいじゃない!

岡見高秀（メタルハマー・ジャパン編集長）

1st Aggressive Talk!!

Text & Photo by Takahide"THUNDER"Okami
Translation by Mirai Kawashima

PHILIP H. ANSELMO

フィリップ・H・アンセルモ

メタル・シーンに熱狂を取り戻した男がその根幹に根付くHCの魅力を語る

パンテラと言えば、1990年代のヘヴィメタルを代表するバンドであり、新たな波に押されつつあったメタル・シーンを復古させる象徴のような存在だった。

4人の猛者が生み出す、どの音楽ジャンルにも負けないアグレッシブなサウンドが何よりも魅力だが、その一端を担うフィリップ・アンセルモにパンク／ハードコアのアティテュードが存在していたからこそ、パンテラの音楽はよりリアルで生々しく攻撃的なものになっていたとも言える。つまり彼は、メタル側の視点でパンク／ハードコアとの関係性を語ってもらうのにうってつけのミュージシャンであるのだ。

現在はジ・イリーガルズとしてエクストリーム・メタルを追求している彼に、そのスタイルの一部を支えるパンク／ハードコアの魅力について教えてもらおう。

あの日はアグノスティック・フロントがすべてを持っていった。俺はまだ15〜16歳で、本当にぶっ飛ばされたね。

ハードコアの第一印象はヴォーカルが怠け者というものだった。

フィリップ　そっちの状況はどう？

——良くないですね。ワクチンの接種もほとんど行なわれていないし、感染者数も増えています。変異種も多いようですし。もうワクチンは打ちましたか？

打ってないよ。君が言ったみたいに変異種が出てきているから、そもそもワクチンに意味があるのかわからないだろ？

——それも怖い話です。フィリップ・H・アンセルモ＆ジ・イリーガルズの先の日本公演が2020年初頭でしたが、本誌が取材をした、現段階での最後の海外ミュージシャンのショウでもあるんです。

そうだったのか。俺たちはあのあと3月にメキシコでもプレイをしたんだけど、それが最後になったよ。アメリカとメキシコの国境も閉まる直前だったから、ショウの次の日に家に帰るとき空港には人がまったくいなくて、まるで夢みたいな光景だったな。日本、メキシコ、それでおしまいだよ。

——ワクチンの接種が進んでも、不安定な状況はまだ続くでしょうね。さて今回はヘヴィメタルに潜むパンク／ハードコアの要素を探っていきたいと思っています。ヘヴィメタルのなかでも特にアグレッシブなパフォーマンスを見せるあなたですが、そもそもハードコアを聴くきっかけは何だったんでしょう？　もともとはヘヴィメタルを先に聴いていたんですよね。

時期的には難しいな。学校で友人たちがヘヴィメタルの話題を出すようになったのと、ブラック・フラッグを聴ようになったのはほとんど同時期だったように思うよ。昔のことだから、よく思い出さないとな。当時ニューオーリンズにシェル・ショックというバンドがいてね。彼らのことは、ほかのどんなハードコア・バンドよりもよく知っていた。地元のバンドで、個人的な知り合いだったから。

——そうでしたか。

シェル・ショックのグレッグとマイクのハッチ兄弟が、80年代初期に新しいヘヴィメタルのバンドのこととか、特にブラック・フラッグなんかのハードコア・バンドの話

インタビュー冒頭のとおり、2020年1月のジ・イリーガルズの公演が最後に観た来日バンドだったという人も少なくないのでは。ステージ外では、ネガティヴ・アプローチのフーディを愛用していた。

What I wanted to bring to Pantera, more than anything, was the attitude of hardcore punk.

俺がパンテラに持ち込んだハードコアの要素は、間違いなくそのアティテュードさ。

をよくしていたから、俺も彼らからいろいろと学んだんだと思うな。

——では最初からメタルとハードコア、両方を楽しんでいたと。

いやいや、当時の俺の耳はまだ清潔でさ（笑）。ヴォーカリストはきちんとした音程で、キレイにうまく歌っているハードロックばかり聴いていたから、ハードコアの第一印象は、ヴォーカルが頑張っていなくて怠け者だというものだった。

——ハハハ、そういう感想もあるんですね。

だからヘヴィメタルのほうが好きだったよ。そこから話を早回しすると、1987年にディスチャージの『ヒア・ナッシング・シー・ナッシング・セイ・ナッシング』のレコードを手に入れてさ。あのチェインソー・ギター！　あのアルバムには本当に人生を変えられたよ。

——なるほど。

1986年（※同年10月27日）にモーターヘッド、アグノスティック・フロント、ハロウズ・イヴというライヴを見に行ったんだけど、俺はアグノスティック・フロントというバンドのことはよく知らなくって。もちろんモーターヘッドが悪かったわけではなかったし、俺はモーターヘッドが大好きだけど、あの晩はアグノスティック・フロントがすべてを持っていったよね。俺はまだ15歳か16歳で、本当にぶっ飛ばされたね。

——彼らの何がそれほどスゴかったんでしょう？

ほかのバンド……ハロウズ・イヴもモーターヘッドも、みんな長髪で革ジャンやデニムのベストとかっていう“制服”を着ていたけど、アグノスティック・フロントは、ストリートにいる奴らそのままみたいな格好に見えた。ドレスアップなんてしていない、普通の人だったんだよ。ところがステージに上がると凄まじいエネルギーで、オーディエンスはあのアンセミックな歌を合唱している。これは本当に印象的だった。何も飾らないでステージに上がって、会場を大騒ぎにしていて、最高だったね。

——パンテラがパイオニアというワケではありませんが、当時のメタル・シーンでヨレっとしたシャツに短パンという服装だったのも、それらから得たあなたの感性が反映されたものだったり？

あれもハードコアからの影響だったと思う。だけど、短パンでのショウを誰が最初にやったかはわからないな。80年代後半、短パンというのはハードコアから入って来たものだったけど、レッド・ホット・チリ・ペッパーズのヴォーカル（アンソニー・キーディス）なんかも履いていたよな。俺は何で短パンを履くようになったんだっけかな……とにかく履き心地が良かったことは間違いない（笑）。

——また『俗悪』（1992年）あたりで坊主頭になったことも、当時のメタル・ファンには衝撃的でもありましたが、アグノスティック・フロントからの影響もあった？

理由のひとつであったことは間違いないね。

不思議とメルヴィンズは気に入っていて、彼らの好みはわからなかった（笑）。

——話をあなたのパンク／ハードコア考察に戻しましょう。1986年のそのライヴがきっかけで、いろいろとハードコアを聴きだすようになったんですか？　この頃にはDRIなどのクロスオーバーも流行ってきました。

DRIは大好きだった。DRIは1stアルバム（『Dirty Rotten LP』1983年）も好きだったけど、やっぱり「ファイヴ・イヤー・プラン」（『クロスオーヴァー』1987年）とかさ。だって“5ヵ年計画”だぜ！（※5年かけて自分を裏切った奴に復讐してやるというかなりバカな内容）。あのアルバムは、まさに今話していることそのものだろ？　何しろタイトルが“クロスオーバー”だからさ。印象深かったよ。ハードコアのバンドがヘヴィメタルから影響をされているのか、と思って。逆じゃなかったんだ。ハードコアのほうがメタルに影響を受けていたのさ。間違いなくあのライヴ以降、いろいろとハードコアを聴くようになったな。

——ちなみに、どのあたりがお好みでしたでしょう？

ディスチャージ、ブラック・フラッグ……ブラック・フラッグで一番好きなのは『マイ・ウォー』（1984年）かな。だけど『スリップ・イット・イン』（1984年）も最高だし名作は多いよね。そうそう、『ダメージド』も最高だ。挙げ出したらきりがないけど、『ファミリー・マン』（1984年）、『Everything Went Black』（1982年）、『イン・マイ・ヘッド』（1985年）、……それに『ライヴ '84』（1984年）もいいな。でも『マイ・ウォー』、『スリップ・イット・イン』、そこに『ダメージド』が俺のトップ3かな。ブラック・フラッグに関してはね。

——『マイ・ウォー』のB面はスラッジの元祖とでも言うべき内容ですよね。

イエス！　そのとおりだよ。メルヴィンズなんかに大きな影響を与えているんじゃないかな。俺がダウンを始めたときも影響を受けたから。ブラック・サバスっぽい遅いのをやりたかったんだけど、「ベリー・ミー・イン・スモーク」（ダウン『ノラ』収録）のリフは「ナッシング・レフト・インサイド」に近いと言えるから。

——当時、ニュー・オーリンズのメタル・シーンとハードコア・シーンの関係はどんな感じでしたか？

ニュー・オーリンズは小さな街だからね。当時アンダーグラウンド、あるいは最先端の音楽と考えられていたものは、どちらのオーディエンスも惹きつけていたよ。当時俺はまだ小さくて、年上の奴らとバンドをやっていたんだ。彼らから“スパンデックスを履いてジューダス・プリーストを歌え”なんて言われていた。ところがシェル・ショックのショウに行ってみたら、メタルではなくもっとハードコアやパンク・ロックの客ばかりでね。まあだけど、マーシフル・フェイトやヴォイヴォドなんかが来ると、メタルのファンもパンクのファンもいたな。

——え、そうなんですか。ヴォイヴォドはパンクの要素もあるのでわかりますが、マーシフル・フェイトは完全にメタルという気も……。

そうなんだよ。ただ、マイク・ウィリアムズ（アイヘイトゴッドのvo）に会うのはそういうショウでだった。シェル・ショック、キング・ダイアモンド、モーターヘッドとアグノスティック・フロント。そういうショウを観に行くと、必ず彼がいたのさ。お互いまだ子供でね。

——その後移転したテキサスのシーンはどうでしたか？　同地はメタル・シーンもパンク・シーンもよく知られていますよね。

ひとつ、小さなパンクのグループがあってね。そいつらはパンクのショウにやって来ては、喧嘩を始めていた。そのうちメタルのショウにも来るようになって、そこでも喧嘩をやり始めたから、パンクの奴らが責められていたけど、実際そういうことをするのはひとつのグループだけだったんだ。ときが経つにつれてヘヴィメタルとハードコアのクロスオーバーが始まり、それから両方のオーディエンスが仲良くなっていったように思う。80年代終わりのことさ。

——その頃は、すでにパンテラに加入していました。バンド内では、ほかのメンバーもハードコアを聴いていた？

俺だけだったよ。

——あなたから彼らに曲を聴かせたりなどは？

一番の例は、ポイズン・アイディアの「ザ・バッジ」のカバーさ（※オリジナルは『フィール・ザ・ダークネス』に収録、パンテラ版は『悩殺』の日本ボーナス・トラック）。俺がハードコアを聴かせると“これは悪くないね”なんていうこともあったし、“俺の好みじゃない”なんていうこともあった。メルヴィンズを聴かせたこともあるんだけど、不思議なことにメルヴィンズは気に入っていたな。彼らの好みはわからなかったよ（苦笑）。

——意図的にパンテラの音楽にハードコアの要素を取り入れることはあったのでしょうか。

バンドとしてそれをやるのは難しかったかな……それはミュージシャンのタイプの違いという意味でね。俺がパンテラに持ち込んだハードコアの要素は、間違いなくそのアティテュードさ。歌詞、そしてステージでの立ち振舞を通じて出すものだね。俺がハードコアのアティテュードをパンテラに持ち込んで、それがよく知られるようになったのさ。

——では、楽曲構成として、パンク／ハードコアの影響が感じられる曲は？　例えば「ファッキング・ホスタイル」は、ギターの鋭いリフ・ワークこそメタルらしいですが、シンプルなコード構成やノリの姿勢はパンク的でもあるのかなと。

そういうパートもあるかもしれないし、言いたいことはわかる。曲のテンポとか、アタマ　の“1、2、3、4”とか……あれはライチャス・ピッグスから影響されたんだった（笑）。ハードコアのバンドがやりそうなことだろ。そうだ、俺のお気に入りのハードコア・バンドで忘れちゃいけないのがミスフィッツ。ミスフィッツは本当に最高だよ。ミスフィッツもパンテラのメンバーに聴かせたら、“オーマイゴッド、すごくいい曲だな”なんて言うだろうな。ミスフィッツを忘れるわけにはいかないよ。あれ、何の話だっけ？

——「ファッキング・ホスタイル」です（笑）。

そうだった！　あの曲は確かにハードコアのヴァイブがあるかもしれないけれど、同時にサビなんかはZ.Z.トップっぽくもある。速いリフだけれど、ブルースやサザン・ロックっぽい部分もあるんだ。

——ミスフィッツの話に転じると、初期はメロディックでしたが、『Earth A.D.』ではハードコア化しましたよね。どの作品が好きでしたか？

『Earth A.D.』は怒りでいっぱいで凶暴な作品だよな。ただ、初期の作品も好きだよ。確かに『Earth A.D.』はアグレッシブで、グレン・ダンジグも無調というか、keyに合わせて歌っていない感じではある。だけど、どちらも合唱せずにはいられないからね。“I want your skulls～♪”。

——と、なると、やはりサムヘインも好きですか？

いや、実はそんなに好きじゃなかった。“samhain”という名前もいいし、アティテュードもいい。イメージも良くってバンドのアイディアは最高なんだけど、聴いてみたらガッカリだったことを覚えている（苦笑）。今聴き直せば気に入るかもしれないから、今度改めて聴いてみるよ。

『カウボーイズ・フロム・ヘル』をリリースした1990年頃のパンテラ。フィルはひとりすでに短パン姿で、また髪型は幅の広いサラサラ系モヒカン刈りだった。男前である！

ギターでぶん殴られたみたいな衝撃。それがハードコアなんだよ。

——あなたが思う、ヘヴィメタルとパンク／ハードコアの違い、定義とは？

ヘヴィメタルには、きちんと演奏しようという明確な意志がある。ハードコアはもっと力ずくで汚いディストーション・サウンドで、優れたヘヴィメタルのギター・プレイヤーのようなテクニックは持ち合わせていない。才能という意味では、ハードコアのプレイヤーはメタルのプレイヤーに及ばないというか……生き生きとした作品を作るために違った才能が必要とされるよ。

『俗悪』リリース後となる1992～93年頃の写真。メンバー全員がラフな格好になり、これがまたカッコいい！　フィルはさらに幅の狭いモヒカンに。やはり男前！

——なるほど、才能の方向性が違うというか。

ハードコアにはエネルギーが必要で、ネガティブ・アプローチと言いたいところだけど……そうだな、マイナー・スレットを例に出そう。マイナー・スレットのギタリスト（ライル・プレスラー）の初期の映像を観てみると、彼はときに弦をハジくのを恐れているようにすら見える。だけど、アンプやPAを通じて出てくる音は、荒々しくて若さ溢れるエネルギーに満ちていて、バンド全体でプレイすると、凄まじいサウンドになるよね。ヘヴィメタル・バンドはうまく演奏しようとするけど、ハードコア・バンドはもっと自由に、エネルギッシュに……うーん、何て表現したらいいだろう、喉まで出かかっているんだけど。

——言いたいことは伝わってきます。

素晴らしい才能を持つ、ソロから何から完璧にこなせるギタリストがいたとして、それはもちろん素晴らしいことだけど、才能ではなくそのギターで頭をぶん殴られたいみたいな衝撃を受けることもあって、それがハードコアなんだよ。才能はどうでもよかったんだ。演奏という意味においてのね。アナル・カントなんかは、俺にとってはテクニカルなバンドと同じくらいクレイジーだったから、革新的なことをやるとかそういう才能も必要なんで、そこは誤解しないでほしい。ブラック・フラッグなんかも、とてつもない才能を持ったバンドさ。だけど、グレッグ・ギンはアルペジオを弾いたりはしないよな？　言いたいことはわかってもらえたかな。

——納得ですね。ただ、世代や影響の違いにもよりますが、いまだパンクやハードコアを拒否するメタル・ファンも少なくありません。あなたからのお薦めハードコア・アルバムがあれば、メタル・ファンもこれは聴いてみようという気持ちになるのではと。

そうだな。ポイズン・アイディアの『Pick Your King』（1983年／EP）。このEPは最高だよ。クリプティック・スローターの『Convicted』（1986年）。アグノスティック・フロントの『Victim In Pain』（1984）。シージの『Drop Dead』（1994年／編集盤）。そうだ、ラモーンズも忘れちゃいけないよ。ラモーンズこそ、俺が最初に聴いたパンク・バンドだったかもしれない。確か『Over The Edge』のサウンドトラックに、「ティーンエイジ・ロボトミー」（収録『ロケット・トゥ・ロシア』1977年）が入っていて。あれでラモーンズが好きになったんだ。それはともかくブラック・フラッグなら『マイ・ウォー』か『Slip It In』を進めるし、ミスフィッツならもう何でもだな。ネガティヴ・アプローチの『Total Recall』（1992年）、Raw Powerの『You Are The Victim』（1983年）ってのもいいよ。あとはディスチャージね。ギャング・グリーンは好きだった？

——メタルになりすぎる前の作品は好きでした。

俺も“ビールがどうの～”というのは好きじゃなかったな。ほかにもシアー・テラーはほかと違うバンドだった。ライチャス・ピッグスとカーニヴォアを混ぜ合わせたみたいでさ。

——シアー・テラーは、セルティック・フロストからも大きな影響を受けていましたからね。

あぁ、まったくだよな。『Just Can't Hate Enough』（1989年）は最高だね。

——いろいろお薦めが聞けました、きっとメタル・ファンも手を伸ばしてみることと思います。今日はミュージシャンによるメタルとパンクとの関係性についての貴重な話、ありがとうございました。最後に、あなたの近況を報告してもらえますか。

先日は、イリーガルズでパンテラの曲をやるライヴ・ストリーミングが大成功に終わって、そのあとはリラックスして過ごしているよ。それと、自分のスタジオを作り直したところでもあってね。ビジネス的には、わりといい時期さ。それからもちろん約束はできないけれど、8月と10月にこっちでライヴができるかもしれない。まあコロナがあるから、ライヴができる確証は世界中のどこにもないんだけどさ。

——ライヴ・ストリーミング自体については、けっこう前向きなんですね。

イリーガルズのライヴ・ストリーミングは、50人だけだけどファンを入れたから楽しかったよ。普通のライヴに近い感覚でもあって。ダウンやエン・マイナー、スカウアー（Scour）でやったときはオーディエンスがいなかったから、少々活気がなくてなんとも奇妙でもあった。俺の1～2m先にカメラがあるだけなんで、変な感覚だったよ。ライヴをオーディエンスに届けられるということはいいけれど、やっぱり本当のショウが恋しいな。

——日本のファンも、あなたの生のパフォーマンスを恋しがっていますよ！

俺も日本が大好きだよ。国、習慣、美しさ、エネルギー、音楽への熱狂、全部が大好きさ。またすぐに行きたいよ。コロナ……地獄に堕ちろ。アイ・ラブ・ユー。

文：川嶋未来

Hardcore Albums Recommended by Philip

インタビュー中でフィルが推薦してくれたハードコア系のアルバムだ。各バンドを代表する初期作品が多いので、ぜひこれらを足がかりにいろいろ手を伸ばしてほしい！

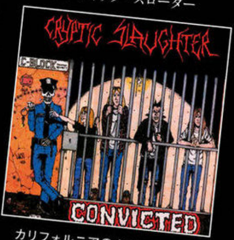
『ヒア・ナッシング・シー・ナッシング・セイ・ナッシング』
◎ディスチャージ

イギリスの元祖ハードコア・パンク・バンドによる、1982 年の 1st フルレングス。あのメタリカもカバーを披露するなど、スラッシュ・メタルに一番影響を与えたハードコアの作品と言えば間違いなくこれ。本作と『Why』（EP／1981 年）を聴いておけば間違いなし。

『Pick Your King』
◎ポイズン・アイディア

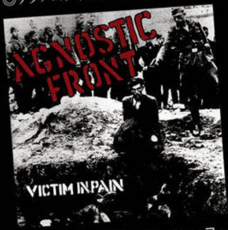
オレゴンのハードコア・パンク・バンドによる 1983 年のデビュー EP。13 曲で 13 分弱と、とにかく速くて短い 80 年代初期のアメリカらしい作品。パンテラがカバーしたのは『フィール・ザ・ダークネス』（1990 年）からの曲。この頃はギターがヘヴィメタリックになっていて、これまたカッコいい。

『Convicted』
◎クリプティック・スローター



カリフォルニアのクロスオーバー、1986 年のデビュー作。アルバムというフォーマットでは、当時最速の作品のひとつで、そのスピード、荒々しさには度肝を抜かれた。ナパーム・デスもカバーするなど、グラインド・コア誕生のきっかけになったバンド。1987 年の 2nd『Money Talks』も必聴。

『Victim In Pain』
◎アグノスティック・フロント



1984 年のデビュー作。ニューヨーク・ハードコアの歴史はここから始まったと言っても過言ではなく、ヴォーカルのロジャー・ミレットも本作を自分たちの最高傑作に挙げる。全 11 曲で 15 分というのも実にハードコア。2nd アルバム『Cause for Alarm』（1986 年）はクロスオーバーの傑作。

『Drop Dead』
◎シージ

マサチューセッツのハードコア・バンク・バンドによる 1984 年のデモ。当時としては信じられないような速度でプレイしていたが、リアルタイムで彼らに注目していたのはマニアだけだろう。のちにナパーム・デスがカバーしたことで多くの人が知る存在となり、本デモも EP／CD 化された。

『ロケット・トゥ・ロシア』
◎ラモーンズ

説明不要のニューヨーク・パンクの最重要バンドのひとつ。本作は 1977 年の 3 作目だが、70 年代の作品はすべて必聴。と言いつつ 80 年代以降のポップな味つけやメタルっぽいアプローチも捨てがたく、結局全作必聴。メタル・サイドにも大人気で、さまざまなバンドがカバーを披露している。

『マイ・ウォー』
◎ブラック・フラッグ

カリフォルニアのハードコアのパイオニアによる 1984 年の 2nd。B 面はサバスやセイント・ヴァイタスから影響を受けたと思しき激遅の大作 3 曲が占めるという斬新すぎる作りで、以降のスラッジへのインパクト大。1981 年のデビュー作『ダメージド』もハードコアの金字塔的作品。

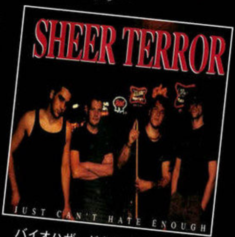
『Total Recall』
◎ネガティヴ・アプローチ

アグノスティック・フロントなどにも大きな影響を与えたミシガンのバンドで、ハードコア・パンクのパイオニアのひとつ。本作はディスコグラフィー的作品で、彼らが 80 年代にリリースしたアルバム、EP、デモなどがまとめて聴ける。ハードコア創世記の初期衝動が詰まった作品だ。

『You Are the Victim』
◎ Raw Power

イタリアのハードコア・パンク・バンドによる 1983 年（翌年説もアリ）のデビュー・アルバム。80 年代から積極的にアメリカ・ツアーを行なっており、ベイエリアのスラッシュ勢にも大きなインスピレーションを与えた。何とガンズ・アンド・ローゼズが彼らの前座を務めたことも！

『Just Can't Hate Enough』
◎シアー・テラー



バイオハザードを筆頭に、90 年代以降ニューヨークではヘヴィメタル的な重さを持ったハードコアがひとつのブームになるが、このシアー・テラーはその元祖と目されるバンドだ。本作は 1990 年のデビュー・アルバム。セルティック・フロストの影響がモロに感じられ、メタル・ファンにもお薦め。

2nd Aggressive Talk!!

Text by Takahide "THUNDER" Okami
Translation by Mirai Kawashima
Photo by Yuki Kuroyanagi(P.33)

Gary Holt

ゲイリー・ホルト

技巧と暴力性の両刀を武器に スラッシュ道を突き進む男のパンク論

今も昔も、エクソダスはスラッシュ界の暴れん坊であり、そのワイルドなサウンドはメタル一辺倒にならない粗暴さを備えている。では、そんな彼らにパンク／ハードコアの影響とはどれくらいあったのだろうか？　自身の音楽的ルーツからハードコア的名盤、伝説的ライヴハウス［ルーシーズ・イン］でのジャンルを超えた共演など、ゲイリー・ホルトに当時のスラッシュ・シーンにおけるパンク／ハードコアとの関わりについて聞いてみた。

サークル・ジャークスや MDC なんかも好きだったけど、一番燃えたのはイギリスのハードコア・シーンだったね。

パンク・バンドのアティテュードと メイデンやプリーストからの 影響が合わさって スラッシュ・メタルが生まれたんだ。

――今回は、メタル・ミュージックとパンク／ハードコアの関係性について、あなたの経験から思うところを聞かせてください。あなたが少年時代のサンフランシスコで、メタル・シーンとパンク／ハードコア・シーンの明確な棲み分けはありましたか？

子供の頃だった 70 年代は、まだハードロックしか聴いていなかったな。AC/DC やテッド・ニュージェント、ブラック・サバスとかね。パンクに出会ったのは 80 年代になった頃だった。兄貴がパンクとかイギリスのハードコアに完全にハマって、それで俺もパンクを聴くようになったんだ。ディスチャージ、ジ・エクスプロイテッド、シャム 69、GBH、ヴァルーカーズとか、兄貴を通じて本当にたくさんのバンドを知ったよ。こういうバンドのアティテュードと、アイアン・メイデンやジューダス・プリーストからの影響が合わさって、スラッシュ・メタルが生まれたんだ。

――まだハードロックしか知らなかった当時、初めてパンク／ハードコアを聴いたときの印象は？

最高だと思ったよ（笑）。アティテュードやアグレッションとかね。その頃はハードロックを越えて、初期のアイアン・メイデンや NWOBHM などのへヴィメタルを聴いていたんだけど、お気に入りのパンク・バンドはディスチャージで、今聴き直してみるとかなりメタルだよね。ギター・サウンドは本当に厚くて、簡単にはマネできないよ。今聴いても興奮するな。

――80 年代初頭、サンフランシスコのメタル・ファンがハードコアも聴くというのは普通のことだったのでしょうか？

サンフランシスコというより、バークレーだね。［ルーシーズ・イン／ Ruthie's Inn］があったから、パンク・シーンの面々がメタルのコンサートに来たり、メタル・ファンがパンクのコンサートを観に行って……なんて感じで、アメリカのほかの地域よりも、ずっと前にこういう現象が起こっていたと言える。ベイエリアでは、メタルとパンクのシーンが融合していたんだよ。“ロング・ヘアーなんてファックだ”とか“あのパンク野郎はクソったれ”なんていうことがまったくなくて、みんな仲良くしていたよ。同じ音楽が好きだったから。俺たちも GBH を観に行ったし、パンクスが俺たちのライヴに来たりさ。オーディエンスは超ヴァイオレントで、最高だったな。

――エクソダスを始めた頃、バンド内でのパンク／ハードコアという音楽は、どういう扱いでしたか？

俺がエクソダスに入ったのは 17 歳の頃で、ちょうど兄貴のコレクションを聴き始めたばかりだった。兄貴なんてパンク・ロッ

その激烈なサウンドは、当然ながらスレイヤーでのステージでも健在（2019 年@ダウンロード・ジャパン・フェス）。同公演が日本における最後のステージとなっており、エクソダスでの再来日が待たれる。

ク・バケーションとして、わざわざイギリスまで巡礼の旅に出たりしていてさ。トム・ハンティングもハードコアが好きだったし、カーク（ハメット）だってそう。ポール・バーロフもあらゆる音楽が好きだったから、そんなに大きな違いは感じなかったな。メタルが好きだったからメタルを聴いていたし、パンクも好きだからパンクも聴いていた。俺たちはソウルメイトみたいなもんだったから。

——その当時のエクソダスで、パンクやハードコアのスタイルを意識的に取り入れようということは？

いや、そもそも故意に何かをやったということはないな。ただ音楽を聴いてスポンジのように吸収して、それが自然と出てくるだけ。イスに座って“よし、この曲はエクスプロイテッドみたいなサウンドにしよう！”なんていうのは、インチキをしているようなものさ。子供の頃好きで聴いていた音楽は頭のなかに染みついていて、それが自然と出てくるんだ。自然な流れなんだよ。

——イギリスのハードコアが大好きだったということですが、例えばデッド・ケネディーズやサークル・ジャークスなどの西海岸勢、DRI や MDC などテキサスからサンフランシスコにやって来ていたバンドなどはいかがでしたか？

もちろん大好きだったよ。特にデッド・ケネディーズは、ベイエリアではレジェンドだった。みんなこれらのバンドが好きだったけど、俺個人としては、やっぱりイギリスのハードコア・シーン、音楽のほうに惹かれていたな。みんなそれぞれ好みが違うのさ。例えばジェフ・ハンネマンは LA のパンク・シーンが大好きで、それを自分の音楽のなかで示していたよね。俺たちは同じ音楽が好きだけど、そのなかにも好みというものはあって、みんな NWOBHM が好きだったけど、メタリカはダイアモンド・ヘッドが大好きで、俺はヴェノムやエンジェル・ウィッチが好きだった。それがそれぞれのサウンドに影響を与えるんだよ。俺はサークル・ジャークスや MDC、初期のブラック・フラッグなんかも好きだったけど、やっぱり一番燃えたのはイギリスのバンドだったね。

——イギリスのパンクとアメリカのパンクの違いは何だったと思いますか？

そうだな……イギリスのバンドは、ロックからの影響というのは語弊があるかもしれないな、彼らは既存のロックに反抗していたワケだからね。イギリスのバンドはサビがわかりやすかった。アメリカのバンドはとにかく早口で、ヴァイブが違ったよ。「City Baby Attacked by Rats」（GBH）なんかを聴けばわかるけど、あのサビはみんなで大合唱できて最高だよね（笑）。

みんな仲が良かったけど、
いい意味でヴァイオレントだった（笑）。

——対バンという点ではどうでしょう？

いろいろやったよ。特にルーシーズ・インは音楽的分断なんてまったくなくて、メタルとパンクがいつも一緒にやっていたんだ。ものすごく豪華なラインナップのショウだったりもして。俺らも 7 Seconds とツアーをしたし、Fang とか地元のバンドとよくやっていたよ。フライヤーが手元にあったはずなんだけど。

——やはりルーシーズ・インが、メタルとパンクのミックスの震源地だったんですね。

そう、あそこですべてが始まったんだ。（オーナーの）ウェス・ロビンソンはシーンのことだけを考えていて、いいバンドだと思ったらどんなスタイルでもプレイさせていた。彼が違ったスタイルのバンドを一緒にプレイさせるというのを始めたんだ。俺たちも、それがとりわけ特別なことだなんて思っていなかった。“クロスオーバーのショウだ、スゲェ！”なんていう感じではなく、普通のライヴだと思っていたから。

——現場の雰囲気というと？　ケンカがあったりは……。

いや、ケンカなんてまったくなくて、みんな仲が良かったよ。もちろんいい意味でヴァイオレントだったけどさ（笑）。

——のちのスラッシュ・シーンで活躍するミュージシャン仲間に、パンク畑から来た人はいましたか？

いたかもしれないけど、俺のいた界隈ではわからないな。もちろん DRI などはそもそもクロスオーバー・バンドとしてスタートして……というか、彼らがクロスオーバー・シーンを始めたワケだけど。スラッシュ・メタルをプレイするにはテクニックが必要だから、多くのミュージシャンのバックグラウンドはメタルだったんじゃないかな。複雑な曲を演奏する技術を学んで、そこにパンクのアングル、ヴァイオレンス、アグレッションを加えていくんだ。

ハードコアから本当に下品で
アグレッシブなエッジを得たのさ。

——スラッシュ・メタルは“従来のハードロック／ヘヴィメタルをより速くした”のとはまた違う、粗暴なスピード感が魅力です。そのあたりは、パンク／ハードコアの影響も少なからずあったでしょうね。

ハードコアがメタルのスピードアップにひと役買ったことは間違いない。それ以前にも速いメタルはあって、モーターヘッドもいたし、レミーは自分たちを“ただのロックンロール・バンドだ”と言っていたけど、俺たちにとってはヘヴィメタル・キングだからね。ジューダス・プリーストの「エキサイター」は最初のスラッシュ・メタル・ソングと言えるかもしれないし、クイーンの「ストーン・コールド・クレイジー」も相当スラッシュだよね。こういう速い曲自体は存在していたんだ。だけど、ハードコアから本当に下品でヴァイオレントでアグレッシブなエッジを得たのさ。

They learn to play the intricate stuff from metal, and then bring all those violence and aggression from punk in the music.

複雑な曲を演奏する技術をメタルで学び、そこにパンクのヴァイオレンス、アグレッションを加えていくんだ。

——エクソダスに限らず、特に言葉を詰め込んで胴間声で歌うスラッシュらしいヴォーカル・スタイルは、そちらからの影響もあったのでは？

ポールに関してはよくわからないな。彼はエクソダスに入るまで、歌ったことがなかったから（笑）。彼の歌唱はどんなヴォーカリストにも似ていなかったけど、パンクからの影響もあったのかもね。パンク・シーンでも、ほかのパンク・ヴォーカルとまったく違うことをやっていた人もいるし。

——ポールはいきなりスクリームしてみせたんですね。

そう、やって来て、いきなりスクリームしたんだ。彼が好きなヴォーカリストを全部合わせたものだったんだと思うよ。歌の経験がなかった分“どうしよう、とりあえず叫んでみるか”みたいな感じで、100%ポール・バーロフさ。

——先ほども話に出ましたが、純粋にギターの演奏テクニックということに関しては、純然なメタルの系譜にあるということになりますか？

例えばアイアン・メイデンやジューダス・プリーストから影響を受けるとなると、まず彼らのテクニックを学ぶことになる。パンク・ギタリストのなかにも素晴らしい技術を持っている人はいて、さっきも言ったように初期のディスチャージのギターはどんなバンドよりもファットで、それに演奏テクニックもあった。特に弦をハジく右手のテクニックだな。スタミナもあるし。

——確かに。

スラッシュ・メタルもハードコアも、ギターはどちらもクランチーだし、セックス・ピストルズなんかもそうだろ？『勝手にしやがれ！！』のギター・サウンドは最高だよね。スティーヴ・ジョーンズは演奏もうまいし、本当に素晴らしいよ。

——チョイスする楽器については？

そこは違いがあるかな。俺はアームを使うのが大好きだけど、あれはパンクのギターでは使われないよね。パンク・ギタリストは、手に入るものなら何でも使ってしまえって感じだった。レス・ポールとか、フィックスド・ブリッジのギターとかね。だけど、いいギターを使って最高のサウンドを出しているバンドもたくさんいたよ。

——実際、エクソダスにはパンク／ハードコアの血はどれくらい流れていると思いますか？

少なくとも25%はそうだね。『ショベル・ヘッデッド・キル・マシーン』のタイトル・トラックなんかは、かなりハードコアだよ。曲全体を通してコードが3つしかなくて（笑）。

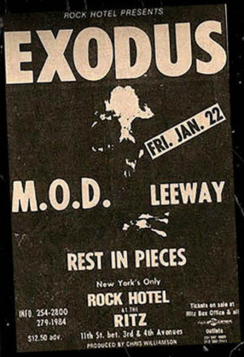
——ハハハ、なるほど。クロスオーバーとなると、今度はスラッシュ・メタルからの影響が強く出てきますよね。

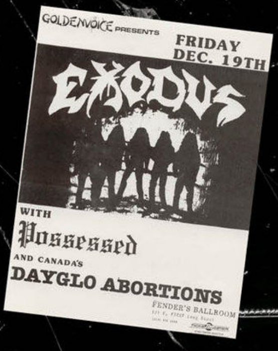
——ハードコアはメタルに多くのものを与えてくれたからね。こちらから与え返すことができたというのは素晴らしいことさ。

——お互いが切磋琢磨し影響を与え合うことはいいことですよね。ただ、今もパンク／ハードコアにアレルギーを持っているメタル・ファンも少なくありません。そういう人たちにオススメするハードコアの作品というと？

そりゃ、ディスチャージの『ヒア・ナッシング・シー・ナッシング・セイ・ナッシング』だよ。これさえ聴いておけば充分さ。ジ・エクスプロイテッドはどれもいいし、ヴァルーカーズも聴くべき。まあレコード店に行って、目をつぶってディスチャージとジ・エクスプロイテッドのアルバムのどれかを選べば間違いないよ（笑）。俺にとってはディスチャージがハードコアのすべてであり、一番大きな影響を受けたバンドだから。いや、俺個人というだけでなく、エクソダスとしてもディスチャージからの影響が一番大きいよ。

ゲイリーが提供してくれた、当時のコンサート・フライヤー。D.R.I、シック・オブ・イット・オール、LEEWAY、カナダのDAYGLO ABORTIONSなどハードコア、クロスオーバー系バンドとも多数共演している。





Sprit of Punk/Hardcore within Metal

ヘヴィメタル・サウンドに宿る

パンク ハードコアの魂

文：川嶋未来

Profile

ブラック・サバスのデビュー・アルバムより１ヵ月ほど年上。10代でヴェノムに出会い、人生を狂わされる。エクスペリメンタル・メタル・バンドSIGHのヴォーカル、シンセ、フルート、尺八等担当。現在ニュー・アルバムを鋭意制作中。

相対するものとして語られるジャンル同士の軋轢も、しかしその一方では相互影響を与え合っているからこそ、現在の姿があるとも言える。むしろ、メタルがより過激な音楽として進化していくためには、パンク／ハードコアの影響は絶対不可欠であったはずだ。前項フィル、ゲイリーふたりの言葉からも、ミュージシャン個々が持つ両シーンの関係性が垣間見られたのではないだろうか。

そこでここからは、ヘヴィメタル・ミュージックのなかに息づくパンク／ハードコアの精神を探してみよう。メタルが細分化し進化していく道筋で、彼の音楽との関わりをひも解くことで、パンク／ハードコアの魅力も改めて浮かび上がってくるはず。なによりも、メタル・ファン＆パンク・ファンにとって、楽しめる音楽の幅がより広がればそれに越したことはないのだ。

ヘヴィメタルとパンク。外部の人たちから見たら、どう違うものなのかまったくわからないかもしれないふたつのジャンルであるが、当事者間ではいまだ水と油のように語られることもある。

21 世紀の今、“いやいや、メタルとパンクの対立なんて都市伝説だろ”と思う人も少なくないかもしれないが、パンクの演奏力の欠如が気に入らないヘヴィメタル・ファンもいれば、ヘヴィメタルの思想的欠如が気に入らないパンク・ファンも実際にいるのである。本稿を読みながら“パンクなんて聴いてらんねえよ！”と心の中で呟いている人も少なくないのではないだろうか。

1990 年に NHK 総合で放送された『燃えてトライアングル トークバトル　パンク VS ヘビーメタル』という番組は、もはや伝説となっているが、こういう企画モノは別にしても、かつてメタルとパンクが激しくいがみ合っていたのは事実。80 年代のニューヨークで、クラムサッカーズというクロスオーバー系のバンドのライヴにメタリカのカーク・ハメットが飛び入り参加した際、それを良く思わなかったストレイト・アヘッドというハードコア・パンク・バンドのメンバーがカークに唾を吐きかけ、あわや大乱闘勃発という事態になったこともある。ダン・リルカ（ニュークリア・アソルト、ほか）も“はじめは長髪でパンクのライヴに行くのが怖かった”と発言している。

メタルとパンクの対立は、決して都市伝説ではないのだ。だが、音楽的に見た場合、両者には切っても切れない深いつながりがあることも間違いない。

■パンクを通過したうえでの新しいスタイル

パンク・ロックの象徴と言えるセックス・ピストルズ……だが、音楽面で直接的に影響を受けたメタル・バンドはさすがに少ないか。

1970 年代、ロック・シーンでは重厚長大なバンドがもてはやされていた。プログレッシブで曲も長いバンドが大きな人気を博していたのだ。

だが、70 年代中盤になると、パンクの火がニューヨーク、そしてロンドンへと燃え広がっていく。徹底してシンプルでラフなそのスタイルは、大仰になりすぎたロックへの反動だったと言える。だが、そんなパンク・ブームも長くは続かない。その象徴的存在だったセックス・ピストルズも 1978 年に解散してしまう。

パンクと入れ替わるように台頭してきたのが、ニュー・ウェイブ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィ・メタルというムーブメントだ。これはパンクに飽き飽きしていた若者たちの手によるものではあったが、同時にこれがパンクを通過したうえでの新しいスタイルであったことは間違いない。

その代表格、アイアン・メイデンによる最初の２枚のアルバムが、パンクから大きな影響を受けていることはよく知られている。ヴォーカリストのポール・ディアノは、ロブ・ハルフォードやグレン・ヒューズを自身のフェイバリットに挙げつつも、“ジョーイ・ラモーン（ラモーンズの vo）やジョニー・ロットン（セックス・ピストルズの vo）が大好きだった”としている。マシーン・ヘッドのロブ・フリンによる“ポール・ディアノはメタル・バンドと歌っているパンク・シンガーだった。彼らの最初の２枚のようなパンクを取り入れたメタルのアルバムなんて聴いたことがなかった”という発言はとても興味深い。

80 年代初頭のメタル・シーンで、革ジャンに短髪のポール・ディアノは異彩を放っていたと言える。ただ、彼が持ち込んだパンク魂が、メイデンをよりハードなバンドへとしていった。

メイデンの最初の２枚のアルバムは、当時の基準としては規格外のスピードだった。彼ら以外にも、メタルのスピード・アップに貢献した NWOBHM のバンドは多い。ディープ・パープルの「スピード・キング」や「ハイウェイ・スター」、そしてモーター

ヘッドからの影響に加え、パンクからのスピード感を取り入れることで、メタルはBPMを上げていったのだ。

†

片やスピード信仰の源流のひとつとなっていたパンクの世界においても、さらなるスピード・アップの革命が起こっていた。ハードコア・パンクの登場である。

1980年になるとイギリスではディスチャージが、アメリカではデッド・ケネディーズやサークル・ジャークスがデビュー。その過激なスタイルは、シーンに大きな衝撃を与えた。そしてメタル側も、スラッシュ・メタルという形でそれに追随していく。

スラッシュ・メタルはNWOBHMとパンク／ハードコアをかけ合わせることで誕生した音楽だ。例えばロサンゼルスからはスレイヤーが登場。ケリー・キングの持っていたジューダス・プリースト的要素と、ジェフ・ハンネマンのハードコアのバックグラウンドのケミストリーにより、まったく新しいスタイルが生まれたのだ。彼らはのちにハードコア／パンクのカバー集もリリースしているほど。

■より強い影響を感じさせるメタル＝スラッシュの音楽性

ベイエリア・スラッシュ・シーンを生み出したサンフランシスコには、DRIやMDCといったハードコア・バンドが移住してきていた。ルーシーズ・インなどの伝説的なライヴハウスでは、メタルとハードコアの共演がたびたび行なわれ、切磋琢磨していたことは想像に難くない。エクソダスのゲイリー・ホルトは、ディスチャージ、Anti-Nowhere League、U.K.サブスあたりのイギリスのバンドからの影響を公言しているし、スティーヴ・スーザは“スラッシュ・メタルはハードなロックとパンクのエネルギーが合体したもの”だとし、“ウェイステッド・ユース、マイナー・スレット、Angry Samoansなど、あらゆるバンドを観に行った”と言っている。

デス・エンジェルのロブ・キャヴェスタニィによる“スピードと攻撃性、激しさ、怒りを混ぜ合わせるというスタイルは、パンクから来たもの。DRI、デッド・ケネディーズ、MDC、Verbal Abuseたちとはよく一緒にライヴをやったものさ”という発言も示唆に富んでいる。

アンスラックスを生み出したニューヨークも、やはりハードコアの聖地だ。そのアンスラックスの初代ベーシスト、ダン・リルカは、スコット・イアンに初めてディスチャージを聴かせてもらったときのことを“メタルと同じくらいヘヴィ。非常に恐ろしい現実的なメッセージが強力で、自分たちもこういうものを取り入れたいと思った”と思い返している。

アンスラックスの別働隊バンド的な立ち位置でもあるS.O.D.だが、そのサウンドや遊び心は明らかにパンク／ハードコア。ライヴではメタル度が強くなっていた印象も。

†

とまあ、パンク／ハードコアから大きな影響を受けて発展したスラッシュ・メタルであるが、80年代中盤となると、逆にパンク側がメタルから影響を受けるようになる。いわゆるクロスオーバーというムーブメントだ。

DRIやC.O.C.といったバンドが牽引したこのムーブメントは、おもにハードコア側のバンドがメタルに接近することで起こった。何しろ当時、メタルはメインストリームの音楽。メタリカ、メガデス、スレイヤー、アンスラックスといったバンドが大きな人気を誇ったことで、彼らに影響を与えたパンク／ハードコア・バンドたちのなかに、逆に影響を受け返されるものが現われ始めたのだ。今やメタル・バンドと言ったほうがしっくりくるかもしれないスイサイダル・テンデンシーズも、もともとはピュアなハードコア・バンドだ。

このムーブメントで一番のビッグ・ヒットを放ったのは、ニューヨークのS.O.D.。これは最初からメタルとパンクの中間地点を狙った企画モノでもあったが、アンスラックスのメンバーを擁していたこともあり、そのデビュー作は100万枚以上の売り上げを誇った。

90年代メタル暗黒期の救世主というイメージの強いパンテラも、パンクから大きな影響を受けている。フロントマンのフィリップ・アンセルモは1986年、モーターヘッドのライヴを観に行き、そのオープニングを務めていたニューヨークのパンク／ハードコア・バンド、アグノスティック・フロントに衝撃を受ける。そのエネルギーの凄まじさに“これこそ俺がやりたいことだ”と思い、一気にパンク／ハードコアにハマっていったのである。フィルがスキンヘッドにしているのも、アグノスティック・フロントからの影響である。

パンクとメタルを融合させ、より過激にしたグラインド・コア。ナパーム・デスのシェーン・エンバリーも、地元バーミンガムにて両シーンの匂いを吸収していった。

■最も距離がありそうな デス＆ブラック・メタルに見る パンク／ハードコアの影響とは

80年代後半には、デス・メタルというさらに過激なスタイルの音楽が台頭してくる。

現在のデス・メタルには、非常にテクニカルな、パンクとは対極的なジャンルというイメージがあるかもしれない。だが、本来デス・メタルとは、むしろパンク／ハードコア直系のジャンルだったと言える。

デスの初代ドラマーにしてマサカーのヴォーカリスト、カム・リーは、“初期デス・メタルの核には、ディスチャージやAmebixといったクラスト・パンクからの影響があった”と名言している。80年代後半のデス・メタルは、グラインド・コアという明らかにパンク側のムーブメントとセットとして出てきたというのもある。これはナパーム・デスやカーカス、ボルト・スロウワーといったバンドを輩出したイギリスのシーンを見れば明らかだ。

デス・メタルの聖地、スウェーデンのシーンも、そもそもパンク／ハードコアから派生したものだ。“ヘヴィメタル・ギタリストの権化”のような印象もあるアーチ・エネミーのマイケル・アモットですら、その出自はハードコアである。

近年、極度にテクニカルでクリーンになりすぎたデス・メタルへの反動として、オールドスクール・スタイルのリバイバルが大きな波となっているが、ネクロットやフローズン・ソウルなど、ハードコアのバックグラウンドを持ったバンドが多く出てきていることも、デス・メタルがパンク／ハードコアの申し子である証なのだ。

†

デス・メタルに輪をかけてハードコアとは無縁という印象のあるブラック・メタル。確かにエンペラーやクレイドル・オブ・フィルスといったシンフォニックなバンドに、パンクからの影響を見出すのは難しい。さらに90年代のノルウェーのブラック・メタルは、明確に“アンチ・ハードコア”を標榜していたということもある。サタニックであることを強いられた当時のシーンにおいて、社会的な歌詞はご法度だったからだ。

だが“アンチ・ハードコア”を掲げていた張本人のメイヘムですら、1987年のEP『Deathcrush』におけるハードコアからの影響は顕著。当時ノルウェーのシーンと対立していたフィンランドのインペイルド・ナザリーンなどは、堂々とエクストリーム・ノイズ・テラーのカバーを披露していた。あらゆるジャンルと結びつき新たなスタイルを生み出し続けているブラック・メタル。今ではブラック・メタルとハードコアを融合した抒情的なバンドも珍しくない。

メタル、パンク……ではなく、ロック・ミュージックをやっている者であれば、問答無用で全員が好きなモーターヘッド。レミーは自身の音楽をロックンロールとしか語っておらず、細かいことを言わない普遍性がまたカッコよさにつながっていた。まさに不世出のロック・ミュージシャン／バンドである。

とまあそんな訳で、メタルとパンクが切っても切れない関係にあるということは、メタルコアというジャンルがすっかり定着し、大きな人気を誇っている現在、改めて説明する必要はない気もする。

モーターヘッドは、ディスチャージを始め、多くのパンク／ハードコア・バンドに影響を与えた。そしてそのディスチャージらは、多くのスラッシュ・メタル・バンドのインスピレーション源となった。やはりディスチャージから大きな影響を受けたヘルハマー／セルティック・フロストは、ナパーム・デスに影響を与えた。さらに、ナパーム・デスから影響を受けたデス・メタル・バンドはいくらでもいる。

ヘヴィメタルのルーツであるブラック・サバスは、ブラック・フラッグなど、パンク／ハードコアのバンドにも大きな影響を与えた。そしてそのブラック・フラッグは、スラッシュ・メタルに影響を与えた。C.O.C.は、ブラック・サバス、ブラック・フラッグ双方からの影響を公言している。

もし、食わず嫌いでパンクを敬遠している人がいるとしたら、それはとてももったいないことだ。両者の距離は、それほど遠くない。なかにはメタルなのかパンクなのか、判断に迷うような作品すら存在する。

ここに記したように、メタルとパンクは非常に複雑に影響を与え合っており、そもそも切り離すことなどナンセンスな関係なのである。“パンクなんて無理”と思っているあなたが聴いているメタルにも、間違いなくパンクの要素が入り込んでいるのである。

■メタル・ファンにお薦めしたい パンク／ハードコア・アルバム選

本枠ではメタル・ファンも自然と楽しめるパンク／ハードコア・アルバムをピックアップ。パンク系バンドだと知っていたからこそ、聴かず嫌いをしていた……そんな人もいるのでは？

『Walk Among Us』1982年
◎ミスフィッツ

80年代半ばにメタリカがカバーしたことで、一気にメタル・ファンにその名が広まったミスフィッツ。ホラー・パンク路線なら『Walk Among Us』、ハードコア寄りなら『Earth A.D./Wolfs Blood』がオススメだが、EPにも名曲多数なので、まずは『Misfits』と題されたコンピレーション盤でひととおり聴くのがいいかも……と言いつつ、ダンジグ在籍時のミスフィッツは未発表曲も含めてすべて聴いておいたほうがいいと思います。本当に捨て曲がひとつもないので。

『Initium』1984年
◎サムヘイン

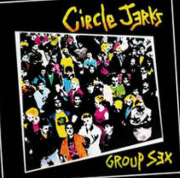
ミスフィッツの解散（1983年）後、グレン・ダンジグがやっていたバンド。本来はサイド・プロジェクトの予定だったようだが。明らかにバウハウスあたりのゴシック・ロックからの影響下にあり、ミスフィッツに感じられた明るさはほぼ消失。このバンドも、本作を筆頭に全部が必聴。

『暗殺』1980年
◎デッド・ケネディーズ

非常に強い政治的主張を持つ、サンフランシスコのパンク・バンド。ベイエリアでスラッシュが盛りあがった理由のひとつに、デッド・ケネディーズの存在があったことは間違いない。80年代にリリースしたアルバム4枚のどれもが名作だが、名曲「カンボジアの休日」を含むこのデビュー作はロック史の残る金字塔。

『The Record』1982年
◎フィアー

1977年結成のカリフォルニアのパンク・バンドで、LAハードコア・シーンの先駆け的存在。とにかくキャッチーな曲とリー・ヴィンの歌唱力を武器に大きな人気を誇った。80年代初頭には、レッド・ホット・チリ・ペッパーズのフリーがメンバーだったことも。



『グループ・セックス』1980年
◎サークル・ジャークス

ブラック・フラッグのオリジナル・ヴォーカリスト、キース・モリスが結成したバンド。全14曲で15分しかないこのデビュー・アルバムは強烈。1980年の時点でこの速度。メタル・サイドがメイデンのデビュー作にビビっている間に、ハードコア側はこんなことになっていたのだ。まあ比べること自体が間違っていますが。

『Complete Discography』1989年
◎マイナー・スレット

ワシントンDCハードコアのアイコン、イアン・マッケイ率いるマイナー・スレットは"呑まない、吸わない、快楽のためのセックスはしない"というストレート・エッジ思想のパイオニア。当時はEPしかリリースしていないので、本作で一気に聴いてしまおう。

『バッド・ブレインズ』1982年
◎バッド・ブレインズ

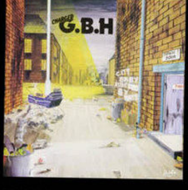
ワシントンDCのライヴハウスをすべて出禁になりニューヨークに移住……というのは都市伝説の類らしいが、いずれにせよ彼がやって来なかったら、ニューヨークのハードコア・シーンは間違いなく違ったものになっていただろう。もともとジャズ／フュージョン系をやっていたらしく、演奏力も異常に高い。本作以外にも『ロック・フォー・ライト』、ハードコア色は薄いが『アイ・アゲインスト・アイ』あたりも必聴。

『Millions of Dead Cops』1982年
◎MDC

テキサス出身のバンドだが、80年代初頭にはサンフランシスコを活動拠点にしていた時期があり、ベイエリア・スラッシュ勢へ与えた影響は大きい。デッド・ケネディーズとも親交が深かった。本作はまさにその頃の彼らを捉えたデビュー・アルバムにして、左派ハードコア・パンクの傑作。

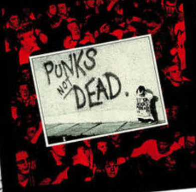
『Dirty Rotten EP』1982年
◎DRI

こちらもMDC同様テキサス出身ながらサンフランシスコに移住、ベイエリア・スラッシュのスピード・アップにひと役買ったバンド。彼らはのちにクロスオーバー・ムーブメントの立役者として名を上げるが、デビュー作である本EPは全22曲18分という短さ・速さでパンク、メタル両サイドの度肝を抜いた。



『襲撃』1982年
◎G.B.H

ディスチャージと並ぶUKハードコア界の重鎮。ピストルズにモーターヘッドやサバスをかけ合わせたとされており、ディスチャージよりも従来のロックンロールに近い分聴きやすい。政治色が強い歌詞のなかにも"死体をヤっちゃえ！"なんていうユーモラスな面もチラホラ。



『パンクス・ノット・デッド』1981年
◎エクスプロイテッド

ディチャージ、G.B.Hと並ぶ重要バンドと言えば、当然スコットランドのエクスプロイテッドが挙げられる。"パンクは死んでない"という力強すぎるタイトルが、当時のパンク・ファンのハートを鷲づかみにしたであろうことは容易に想像できる。今なおグリーン・デイに噛みついたりと、ヴォーカリスト、ワッティー・バカンのパンク魂は健在。キリング・ジョークっぽい『ホラー・エピックス』もぜひ。

メタル・ファンは聴いていた
パンク／ハードコア魂を宿すカバー・アルバム選

こちらは、メタル・バンドによるパンク／ハードコアのカバー曲をチェック！　ほら、あなたの好きなメタル・バンドにも、パンクの要素があるでしょ～（笑）。

『アンディスピューテッド・アティテュード』1996年
◎スレイヤー

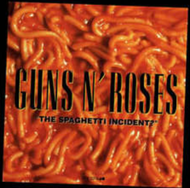
メタル・バンドによるハードコアのカバー集と言えば、誰もがこれを思い浮かべるはず。DRI、マイナー・スレットといった王道から、ドクター・ノウやD.I.といった渋いところまで、スレイヤーの青春がぎっしり詰まった内容だ。これらのバンドを聴いて、スレイヤーはスピード・アップを重ねていったのだろう。イアン・マッケイは勝手に歌詞を変えられてオカンムリのようですが。

『ガレージ・インク』1987年
◎メタリカ

メタル・バンドによるパンクのカバーの元祖と言えば、やはりこのメタリカか。ついでに言えば、メタル界にカバー・アルバムという概念を持ち込んだのもメタリカという気も。本作ではミスフィッツ３曲にディスチャージ２曲、さらにアンチ・ノーホエア・リーグのカバーが披露されている。

『ソー・ファー・ソー・グッド・ソー・ホワット』1988年
◎メガデス

メガデスは3rdアルバムで「アナーキー・イン・ザ・U.K.」のカバーを披露。バッキングはかなりメタルに寄せているものの、ムステインのヴォーカルは意外なほど違和感なし。本家ピストルズのギタリスト、スティーヴ・ジョーンズもゲスト参加。メタリカに比べると選曲がストレート過ぎる気がしなくもないが。



『ザ・スパゲティ・インシデント?』1993年
◎ガンズ・アンド・ローゼズ

ガンズはミスフィッツの名曲「アティテュード」をカバー。ヴォーカルの崩し方に賛否両論あるかもしれないが、バッキングやギター・ソロのハマり方は見事。ハードコアがスラッシュ・メタルと親和性が高い一方、パンクはやはりハードロック、それもLA系がしっくりくる。

『デケイド・オブ・デカダンス』1991年
◎モトリー・クルー

「アナーキー・イン・ザ・U.K.」をもうひとつ。モトリーは1991年のベスト盤にて同曲を新録、ライヴでも披露していましたね。ガンズのミスフィッツ同様、違和感は皆無。結局LAメタルもパンクも、名前こそ違っても、結局はロックンロールなのだと再認識させられる素晴らしい仕上がり。

『アナイアレイション・プリンシプル』1989年
◎ラーズ・ロキット

カリフォルニアのラーズ・ロキットは、この４枚目のアルバムでデッド・ケネディーズの代表曲「カンボジアの休日」をカバー。しかしこれ、故意なのか声域のせいなのか、ヴォーカルのメロディ・ラインに妙なアレンジが施されていて違和感ありまくり。オリジナルより先にこっちを聴いてしまったら、この曲の魅力がさっぱりわからないのでは。

『メタル・ディスチャージ』2003年
◎デストラクション

本アルバムの２枚組バージョンにて、メイデンやメタリカに混じってエクスプロイテッドの「U.S.A.」を収録。彼らは1987年の『マッド・ブッチャー』で、ウェンディ・O・ウィリアムズ率いるプラズマティックスの「呪」も披露しており、ハードコアからも大きな影響を受けていることを匂わせている。

『!!!Fuck You!!!』1988年
◎オーヴァーキル

オーヴァーキルによる本EPは、タイトル曲がイギリスのパンク・バンド、サブヒューマンズのカバー。1999年のカバー集『Coverkill』ではデッド・ボーイズとラモーンズも披露。そのほかピストルズのカバーもやっており、そのルーツがハードコア以前のパンクにあることが容易にうかがえる。

『Thirsty and Miserable』1987年
◎セイント・ヴァイタス

タイトル曲がブラック・フラッグのカバー。今でこそドゥームの帝王という感じの彼らだが、独特すぎるスタイルがゆえに当時はメタル界に居場所がなく、本作のリリースもブラック・フラッグのギタリストのレーベルから。スピーディな原曲を完璧にドゥーム・メタルに翻案した、まさにカバーの理想型のような出来。

『Third World Posse』1992年
◎セパルトゥラ

セパルトゥラは1992年の本EPでデッド・ケネディーズの「ドラッグ・ミー」をカバー。YouTubeを探せば、ジェロ・ビアフラをヴォーカルに迎えた「カンボジアの休日」のライヴ映像も観られるはず。カヴァレラ・コンスピラシーでも「カンボジア～」をやっているし、ネイルボムでは「ポリス・トラック」もカバーと、マックスは相当のデッド・ケネディーズ・フリーク。

『パンクス・ノット・デッド』2009年
◎チルドレン・オブ・ボドム

2009年のカバー集にて、メイデン、スレイヤー、スコーピオンズらに混じってラモーンズの「サムバディ・プット・サムシング・イン・マイ・ドリンク」を日本ボーナス・トラック（『ヘイト・クルー・デス・ロール』日本ボーナスにも収録）。そもそもラモーンズがヘヴィなスタイルに寄っていた時期の曲なので、チルボドらしい味つけが見事にマッチしていてカッコいい。

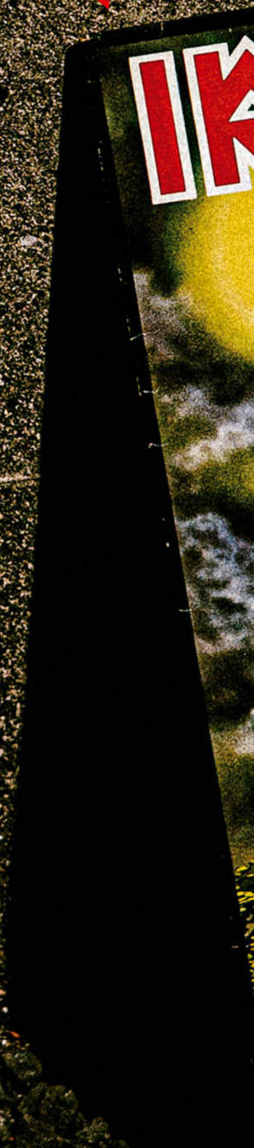
Text by Dave Ling
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』347

IRON MAIDEN

Inside Killers

『キラーズ』の内側

怒りがこみ上げる評論、秘密裏に行なわれたオーディション、そしてポール・ディアノの脱退



アイアン・メイデンの 2nd アルバムとして、デビュー作『鋼鉄の処女』の翌年である1981年にリリースされた『キラーズ』。パンキッシュなヴォーカルとメタル的様式美を兼ね備えた鮮烈なサウンドで一躍シーンの中央に躍り出た彼らがリリースする第二撃であった本作だが、そこにはさまざまな壁が立ちはだかり、早くも何かが変わろうとしていた。

その後の大飛躍へとつながるクラウチング作であり、初期スタイル最後の作品となった『キラーズ』の内側を、ポール・ディアノ、スティーヴ・ハリス、プロデューサーのマーティン・バーチら関係者の声とともに振り返る。

STEREO EMS-91016
IRON MAIDEN
Killers
SEX SHOP
Ruskin

コアなアイアン・メイデン・ファンにとって、最初のアルバム２枚はこれからも必要なものであり続けるはず。ソーシャルメディア上ではいまだに“メイデンはポール・ディアノを失ったときからエッジを失った”、“悪化した”と訴える者もいる。“ブルース・ディッキンソンの加入によって、スティーヴ・ハリスとその仲間たちは見違えるほどにヘヴィメタル過ぎる路線に変わってしまった”……とも。

ポールとともに、いくつかの特別な何かが離れてしまったのは疑いようのない事実であるが、エネルギー溢れるそのシンガーは、自ら—アイアン・メイデンという規制のなかに収まり続けることはなかっただろう—と認めている。

世界制覇へ：『キラーズ』に伴うワールド・ツアー中のデイヴ・マーレイ、スティーヴ・ハリス——1981年、7月1日。

バンドにはグッドな曲があって、それらを手放したくなかった。——スティーヴ・ハリス

“俺をバンドから追い出したからって、アイツらのことを責めちゃいないさ”。昨年ポール・ディアノは本誌にそう語った。**“あのバンドはご存知のとおりスティーヴ・ハリスが生んだものだが、俺はもっと（作曲で）貢献できたらと思っていた。しばらくしてからそれが俺を悩ませるようになってね。しまいには俺はアイアン・メイデンに100%を捧げることができなくなり、それじゃバンド、ファン、自分自身に対してフェアじゃないと思ったんだ”**。

彼の言葉は全容の半分しか伝えていない。ポールはエキサイティングでワイルド、そして予想のつかないフロントマンであり、目に余る狂気を見せつけてくるような男であった（ジューダス・プリーストをサポートする大きなツアーで、メイデンは彼らをステージから引きずり下ろしてやると豪語したのは有名な話だ）。

しかしメイデンの初期２枚のアルバムが現在でもワールド・クラスであり、今も広く愛聴されていることに何ら驚きはない。そして確かにメイデンはブルース・ディッキンソン加入後に異なるグループとなった。彼らはそうしなければならなかったのだ。ブルースはすべてを捧げてきたプロフェッショナルで、それはトップに昇り詰めたことで証明されたのみならず、何事にも進んで犠牲を払ってきた姿勢が物語っている。しかしその一方で、ポールはまったく別のビーストだった。

ポールが制作に関与していたのは、ほんのわずかな時期のみに過ぎないが、アイアン・メイデンはUKチャートのトップ５入りを果たしている。にも関わらず、ポールは自身を“完全なるクソ野郎”と称して突き放す。さらにギタリストのデニス・ストラットンは次のチャプターをエイドリアン・スミスへと引き継ぐことで、ふたつの問題が浮上した。ひとつ目はデビュー・アルバムのプロダクションをどのように発展させ、スティーヴ・ハリスが求めたサウンドをどのように実現するのかということ。ふたつ目はポールをどうするか？であった。

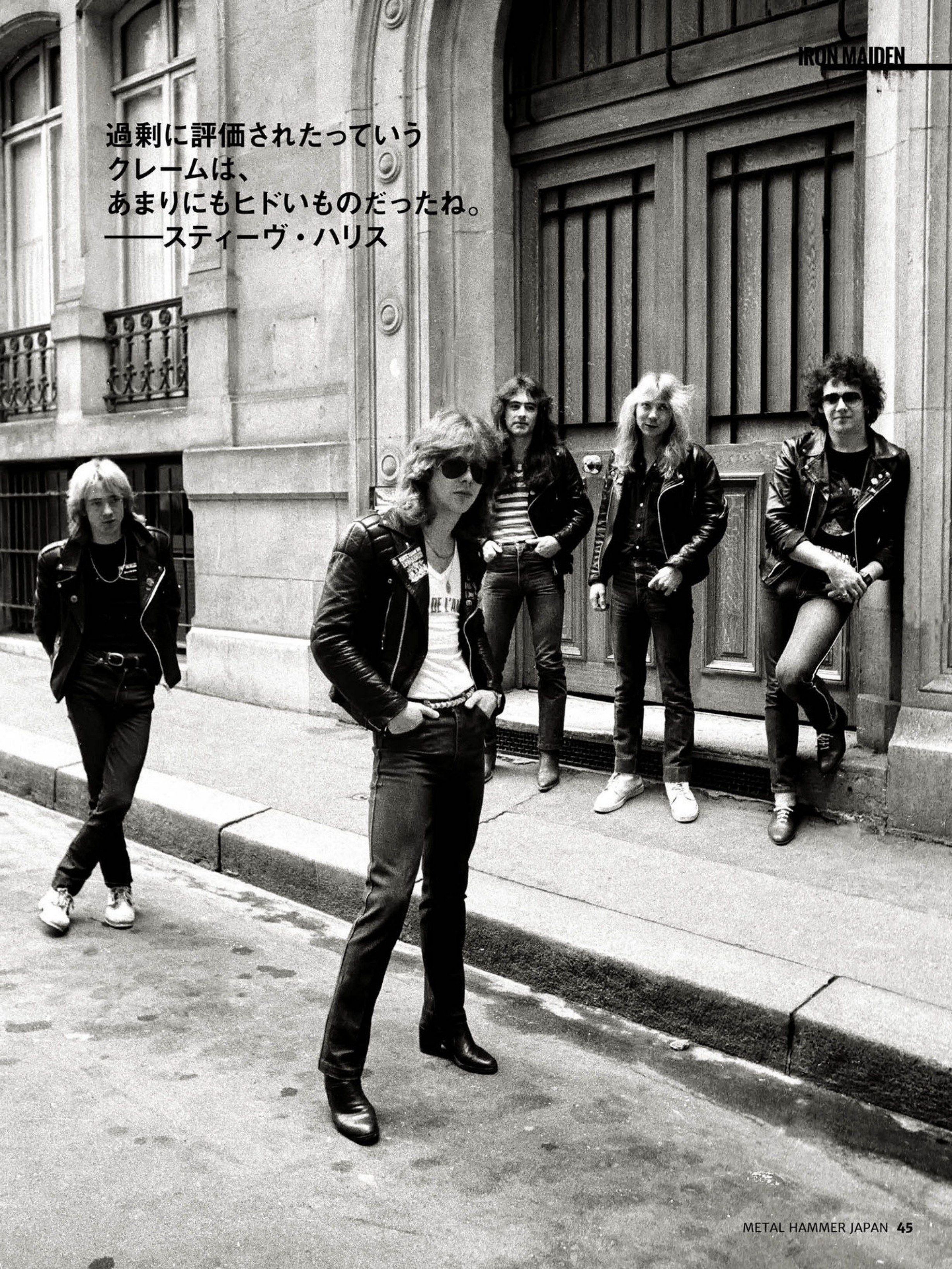
プロデューサー選びについて、バンドがリストアップしたなかのトップにいたのはマーティン・バーチであったが、彼はロニー・ジェイムス・ディオをフロントマンに迎えたブラック・サバスの『ヘヴン＆ヘル』（1980年）の制作で忙しくしていた。プロデューサーとしてはロールス・ロイス級の存在で、彼はメイデンがヒーローとしていたディープ・パープル、レインボー、ウィッシュボーン・アッシュを手掛けていた。

バーチは“『キラーズ』になろうとしていたアルバム”の件でバンドがコンタクトを取ってきたときのことについて、**“彼らは当時のことを「俺らはあなたがプロデュースをするに値するバンドだとは、自分たちでも思っていなかった。それまでにあなたがやってきたことや名声からして、俺らを引き受けてくれるとは思っていなかった」と振り返っていたが、私は「まずはそれが間違いだ。なぜなら私は、君たちがオファーを真っ先にくれなかったことを残念に思っていたからね」”**と回想している。それ以来長く続く絆が生まれ、バーチは『キラーズ』を始めとして、『フィア・オブ・ザ・ダーク』（1992年）までの全アルバムを手掛けることとなった。

しかし、ポール・ディアノにとって『キラーズ』は、メイデンでの最後の作品となってしまった。

ポールは『キラーズ』の時期について、**“何かがどこかで変わってしまった”**と、自叙伝『The Beast』のなかで語っている。**“音楽は洗練され、もっとコマーシャルなものになっていった。俺らが持っていたパンクっ**

過剰に評価されたっていう
クレームは、
あまりにもヒドいものだったね。
――スティーヴ・ハリス



ぽいエッジを失っていったんだ。個人的には芸術家気取りのくだらないものになろうとしていると感じていたよ”。

メイデンの方向性は最終的に永久不滅のヘヴィメタルへと向かっていったが、当時成長していたバンドのファンベースからすれば、少々違和感のある新らしいものだと異論が唱えられるものだった。しかしそういった議論はいつの世にも交わされてきたことである。

最終的に『キラーズ』に収録された曲の多くは、実はステージでパフォーマンスされてきたものだった。実際、「無実の逃亡者」とヒット曲となった「ラスチャイルド」の2曲については、70年代中盤のステージ上でしばらくプレイされてきた。さらに「ラスチャイルド」にいたっては、明らかに見劣りする別のバージョンが、EMIによるNWOBHMのコンピレーション盤『Metal For Muthas』にて、オフィシャルな形としてすでにリリースされていた。

ライヴでオーディエンスをシンガロングさせるためにポールが全力投球していた「ドリフター」にいたっては、ショウのはずせない1曲として数年間披露され続け、ライヴが録音された当時のテープを聴けば、ファンたちのお気に入り曲であったこともわかる。

端的に言ってしまえば、多くの古株のメイデン・ファンにとって『キラーズ』は“新譜には感じられなかった”のである。しかし幸運なことに、マーティン・バーチのプロダクションは楽曲たちにまったく異なる命を吹き込んでいる。

“プロダクションの観点でいうと、『キラーズ』は1stアルバムに比べて本質的にまったく異なるものだね”と、スティーヴはアイアン・メイデンのオフィシャル・ブック『Run To The Hills』にてそう記述している。そして当時アルバムには書き下ろしの新曲が足りていなかったことも認めているが、ライヴで披露していたそれらの良質な曲を正式な形でリリースをしないままにしておくことはナンセンスだったとも反論している。

“1stアルバムは俺らのライヴのセットリストから選ばれた<ベスト・オブ>的な内容で、何年もプレイしてきたものだった。『キラーズ』を作るとなったときも「ラスチャイルド」みたいにかなりいい曲がまだたくさんあって、それらを手放したくなかったんだよ”。

俺は100%を捧げられず、それはバンドにフェアじゃなかった。——ポール・ディアノ

ポール・ディアノ——偉大な才能は、メイデンのメンバーにはワイルドで予測不可能過ぎた。

1981年のアイアン・メイデン：スティーヴ・ハリス、クライヴ・バー、ポール・ディアノ、エイドリアン・スミス、デイヴ・マーレイ（L to R）

このアルバムはプレスの間でもさまざまな論争を巻き起こしていた。"アーティストのキャリアをブレイクへと導くことも終わらせることもできる"と言われていた大手音楽誌『SOUNDS』は、メイデンのデビューについて次のように力強くサポートしていた。＜80年代のヘヴィメタルで、目も眩むほどのスピードと恐ろしいまでのどう猛さを持ち、彼らに比べれば60年代や70年代のヘヴィロックが気の抜けた葬送歌のように聴こえてしまう＞。

当時のこのレビューはお墨付きをもらったことと同義で、燃え盛るNWOBHMの炎をさらに勢いづけるのにひと役買った。しかし『キラーズ』はいささか異なる形で受け入れられた。ロビー・ミラー（ポールと交際していたとも言われている）のレビューは、温かく受け入れられたとは言い難い内容だったのだ。

＜メイデンは本当の意味でレコードと呼べるものを作ったとは言えない＞と書いている。＜ちょっと待って、私たちはこのアルバムを過大評価していないだろうか？＞と続け、『鋼鉄の処女』に関しても＜デビュー・アルバムはチャートの4位に昇り詰めたかもしれないけど、それってゴリ押しがあったから？＞と炎上しそうな疑問を投げかける。

当のメンバーはこのレビューに対して驚きの表情こそ見せなかったものの、＜未完成のプロダクションによる初期段階でのリリース＞と酷評されたことに対して不当に扱われたと感じていた。すぐさまSOUNDS誌によるインタビューに5人全員が集められ、バンドに対して共感的な立場のライターであったギャリー・ブッシェル（個人的には1stアルバムのほうを好んでいたようだが）によって取材が行なわれた。

ポール・ディアノが荒れ狂った様子であった一方（**"ロビー・ミラーってのは本当にクソみてぇな女だったんだぜ！"**と叫んでいた）、スティーヴ・ハリスはもっと外交的だった。**"彼女の（レビュー上での）曲選びは建設的だったと思うが、過度に評価されていたっていうクレームの入れ方はあまりにもヒドかったね。彼女が暗示していたのは1stアルバムが（恣意的にアシストされて）チャートに入ったってことだけど、過剰にプッシュしたからといってそれがシルバーになることはないさ。どんなに猛プッシュしたからって63,000もの人に買ってもらうことはできないだろ。日本ではゴールドになったけど、あっちでも見せかけだけでそんなに売れたっていうのかい？"**。

『キラーズ』はUKチャートでは初登場12位といささか不発気味の発進となったが、それでもバンドを前進させ、その後彼らが世界を制覇するための土台を作ることとなった。それから40年、今や誰もが認めるクラシック・アルバムだ。

こういった事実がありつつも、ポールがバンドに残り続けることはなかった。彼のアルコールとドラッグ癖が悪化し、15の地域で120以上もの公演を行なったあとに、"完全に友好的な形で"、"音楽性やツアーに対する意見の相違"という公式見解をともない1981年9月に離脱することとなった。

その後、彼がどうなったかについては、皆の知るところである。秘密裏に行なわれたオーディションを経て、NWOBHMのライバル関係にあったサムソンのブルース・ディッキンソンがバンドのフロントマンの座を手にし、その翌年にメイデンはすべて新曲で構成された3rdアルバムをリリースした。『魔力の刻印』（1982年）と名づけられたこのアルバムは、その後のヘヴィメタルの形に大きな影響を与えた。

あなたが熱狂的なメイデン・ファンであろうが、そこまでではなかろうが、確実に言えることがある。『キラーズ』はひとつの時代の終わりを告げ、そしてアイアン・メイデンは二度とあの頃に戻ることはなかった。

開花前夜？　不作の谷年!?
メタル・シーンにとって、1981年とはどんな1年だったのか

文：竹内伸一

アイアン・メイデンがデビューした1980年の翌年である1981年。先項のとおり『キラーズ』発売年でもあるが、その後のメタル・シーンの中心軸となるアイアン・メイデンの周辺では、一体どのような動きがあった一年だったのだろうか。やや地味な印象も受ける同年におけるメタル・シーンの潮流を分析してみよう。

Profile
1968年、東京都出身。某音楽専門誌の編集部勤務を経てフリーのライター／編集者に。ヘヴィメタル関連では［ラウドパーク］の公式パンフレットの制作などに携わる。中学生だった1981年は、メタルの意味も知らずにAC/DCやMSGなどを聴きまくる日々。

1960年代末から世界のヘヴィロック・シーンを牽引してきたレッド・ツェッペリンが、ジョン・ボーナムの急逝により解散。それと相前後してアイアン・メイデンがデビューを飾った1980年。偶然ではあるものの、ひとつの時代が終わり、新たな時代の幕開けを告げたその年は、ヘヴィメタルにとって大きな転換点となった1年だった。

メイデンのサウンドは、これまでのヘヴィメタルとは一線を画すスピード感があり、新時代の到来を強烈に印象づけ、彼らはイギリスの音楽シーンにおいて新世代の旗手となり、さらに、デフ・レパード、サクソン、エンジェル・ウィッチなどの新鋭バンドも台頭。“New Wave of British Heavy Metal（NWOBHM）”と呼ばれたムーブメントを形成し、そのブームにより改めてヘヴィなサウンドを鳴らすバンドに注目が集まり、モーターヘッド、ブラック・サバス、オジー・オズボーン、ジューダス・プリーストら70年代から活動するバンドも続々と新作をリリースしチャートを賑わす……では、そんな活況を呈した1980年の翌年、1981年はヘヴィメタルにとってどんな年だったのだろうか。

Records of 1981

ズバリ、同年リリースのアルバム（ライヴ盤含む）を厳選して紹介！

『アイ・サレンダー』（2月）
◎レインボー

ジョー・リン・ターナー（vo）が初参加。ラス・バラード作のシングル「アイ・サレンダー」は全米105位。ベートーベンの“第九”をアレンジした「治療不可」はライヴの定番に。

『ファイアー・ダウン・アンダー』（2月）
◎ライオット

前年に伝説の第1回［モンスターズ・オブ・ロック］への出演で受けた刺激を封じ込めたかのような直情的なサウンドは、NWOBHMに通底。全米49位とチャート・インも果たす。

『ブレイカー〜戦慄の掟』（3月）
◎アクセプト

3rdアルバム。アメリカ指向だった前作から一転、NWOBHMに直結する激しく疾走するナンバーが並ぶ。“ドイツにアクセプトあり”を世界のメタル・ファンに印象づけた1枚。

『戦慄のマンティス』（3月）
◎プレイング・マンティス

インディーズで注目を集めたマンティスのメジャー・デビュー作。メロディアスなサウンドは日本でも人気が高い。以降、契約トラブルなどで活動がままならなかったのが惜しまれる。

□ NWOBHMは早くも飽和状態

まずはNWOBHMに沸き、当時のヘヴィメタルの中心地だったイギリスから振り返ってみたい。

前年からのメタル・ブームは1981年も続いており、新人バンドが続々登場。ヴァーディス、デーモン、ダーク・スター、プレイング・マンティス、ガスキン、スウィート・サヴェイジ、トレスパス、ブリッツクリーグ、ホロコーストといったバンドが、デビュー・アルバムもしくはEPをリリースしている。まさに雨後の筍のごとくといったところで、いずれも熱心なメタル・ファンには今でも人気の高いバンドではあるが、商業的な成功を収めたとは言い難く（マンティスは全英16位と高位につけたが）、知る人ぞ知るといった存在。

アイアン・メイデン『鋼鉄の処女』（全英4位）、デフ・レパード『オン・スルー・ザ・ナイト』（全英15位）、タイガース・オブ・パンタン『ワイルド・キャット』（全英18位）など、デビュー作にして好セールスを記録した作品が生まれた前年から見ればやや物足りない感もあり、NWOBHMのムーブメントはすでにピークを過ぎ、飽和状態にあったと言えるだろう。アイアン・メイデンの『キラーズ』にしても全英12位と、チャート・アクション的には前作には及ばない結果となった。

ベテラン勢も状況は似たようなもので、ジョー・リン・ターナーをヴォーカルに迎えた新生レインボーの『アイ・サレンダー』（全英3位）、ホワイトスネイクの『カム・アンド・ゲット・イット』（全英2位）などは前作を上回るセールスを記録し、モーターヘッドのライヴ・アルバム『極悪ライヴ』はバンドにとって最初で最後の全英1位を獲得するなどヒット作も生まれたが、オジー・オズボーン『ダイアリー・オブ・ア・マッドマン』、ブラック・サバス『悪魔の掟』、ジューダス・プリースト『黄金のスペクトル』などは前作ほどのセールスを記録できず。3組ともに1980年にはメタル史に残る名作（『ブリザード・オブ・オズ』／全英7位、『ヘヴン＆ヘル』／全英9位、『ブリティッシュ・スティール』／全英4位）を発表しており、続く1981年発表作も今改めて聴くとそれほど悪い内容とも思えないので、やはりブームがピークを過ぎたことを端的に表わしている例と言えるだろう。

†

そんななかで興味深いのは、飽和状態のイギリスに見切りをつけ、早くも市場のデカいアメリカに意識を向けた音作りを行なうバンドが登場していること。

デフ・レパードの2ndアルバム『ハイ＆ドライ』は、母国では26位と前作よりもセールスは下回ったが、全米では38位にチャート・イン。AC/DCやフォリナーをメガ・ヒットさせたロバート・ジョン“マット”ラングをプロデューサーに迎えたそのサウンドは、全米で1000万枚を売るヒットとなる『炎のターゲット』のプロトタイプとも言えるタイトなもので、アメリカでの成功の足がかりになる1枚となっただけでなく、同国における80年代のメタル・ブームに先鞭をつける作品ともなった。

アイアン・メイデンとはまた違ったキャッチーさを武器に、アリーナ・バンドへと駆け上っていったデフ・レパード。翌年にはギタリストの交代があり、ピート・ウィリス（中央）からフィル・コリンに。これも躍進の一端となった!?

『スペルバウンド』（4月）
◎タイガース・オブ・パンタン

NWOBHMを支えた5人組の2作目。ジョン・サイクス（g）が加入し、よりスリリングなサウンドを展開。6カ月後の同年11月には3rd『クレイジー・ナイツ』も発表している。

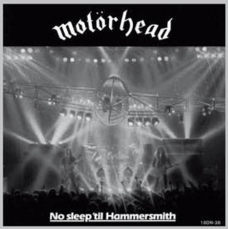
『カム・アンド・ゲット・イット』（4月）
◎ホワイトスネイク

4thアルバム。ブルースに根ざした70年代スタイルのソウルフルなハードロックに軽快なロックンロールを織り交ぜた作風は、初期の彼らの真骨頂と言える。全英2位。

『戒厳令』（4月）
◎ヴァン・ヘイレン

4thアルバム。全米5位はそれまでの最高位。ヒット・シングルは生まれなかったが、エディ・ヴァン・ヘイレンのギター・ワークが冴えわたり、テクニック面では最高峰の呼び声も。

『極悪ライヴ』（6月）
◎モーターヘッド



同年の英国ツアーを収録（1980年の録音も1曲あり）。爆音でならした彼らの全盛期の熱演が楽しめる。全英1位であり、シングル・カットされた「モーターヘッド」も全英6位とヒット。

レインボー歴代シンガーのなかでも、最も甘いトーンを聴かせるジョー・リン・ターナー（右）。欧州的哀愁とアメリカ的な派手さが共存し、今も人気の高い曲が多い。

また、英国でもヒットしたレインボー『アイ・サレンダー』は、ジョー・リン・ターナーの甘い歌声が映えるキャッチーなサウンドを展開。古くからの熱心なファンからは“まるでフォリナーのよう”と揶揄されたりもしたが（当時、なぜかフォリナーはメタル・ファンから“ロックの魂を売った売れ線音楽の代表”のように語られることが多かった）、全米50位とこれまでで最高のセールスを記録している。ジューダス・プリースト『黄金のスペクトル』、英国を拠点にしていたMSG『神話』なども、アメリカナイズされたサウンドと当時は評されていた。なお、メイデン『キラーズ』は全米では78位にとどまっている。アメリカ市場に迎合しないヘヴィなサウンドで、これだけ売れたのだからそれはそれですごいことだとも思うが。

英国の1981年において、忘れてはいけないのがヴェノムの登場だろう。彼らが鳴らしたスピード感と凶暴性を併せ持つサウンドは、のちのスラッシュ・メタルやブラック・メタルに大きな影響を与えたとされる。折からのNWOBHMムーブメントによって、英国には彼らのようなエクストリームな音楽を受け入れる土壌が生まれていたという事実は、メタルの発展に大きな意味を持っていたのではないだろうか。

□アメリカはヘヴィメタル夜明け前

イギリスではアメリカ市場を意識するバンドが現われ始めたと書いたが、では、そのアメリカはどうだったのか。

1983年頃からはいわゆるLAメタル勢が台頭し、その後はスラッシュ・メタルも生まれ、80年代中盤から後半にかけてはヘヴィメタルが米音楽市場のメインストリームとなるが、1981年時点ではまだ始まってはいない。

この当時、アメリカで人気があったロック・バンドといえば、ジャーニー、フォリナー、スティクスあたり。いずれもラジオでエアプレイされそうなキャッチーなヒット曲を連発し、アルバムの大ヒットに結びつけていた時代で、米国産のメタル勢といえば、70年代を席巻したキッス、エアロスミスはメンバー・チェンジなどもあって低迷期を迎えており、ヴァン・ヘイレンが孤軍奮闘といった状況だった。また、1980年にイギリスのメタル・フェス［モンスターズ・オブ・ロック］に出演したライオットが『ファイアー・ダウン・アンダー』を、イエスタデイ＆トゥデイから改名したY＆Tが『アースシェイカー』をリリース。激しさのなかに哀愁味を忍ばせるサウンドは、NWOBHMからの影響も感じさせ興味深い。

話は逸れるが、現在、キッスやエアロスミス、ヴァン・ヘイレンをヘヴィメタルと認知しているファンはいるのだろうか。彼らはいずれもラウドな音を鳴らすバンドではあるものの、キャッチーなロックンロールをベースとしており、当時を知らない若いファンは彼らのサウンドからヘヴィメタルは連想しないだろう。しかし、当時は（少なくとも日本では）ヘヴィメタルの範疇で語られることが多かった。まだスラッシュ・メタルもデス・メタルもない時代、彼らのサウンドも充分にヘヴィでメタリックに感じられたのだ。

さて、1981年のアメリカで注目すべきは、モトリー・クルーの結成だろう。4月にシングル「Stick Your Guns / Toast Of The Town」を、11月にアルバム『Too Fast For Love』（『華麗なる激情』）をいずれも自主制作でリリースしている。アルバムは翌年リミックスが施されメジャー・レーベル

『ハイ＆ドライ』（7月）
◎デフ・レパード

デビュー作が全米51位と好評だったのを受け、本格的に全米進出を狙った2ndアルバム。“マット”ラングによるタイトで洗練されたサウンドは、彼らの個性をも確立。全米38位。

『神話』（9月）
◎MSG

コージー・パウエル（d）が参加した2ndアルバム。ロン・ネヴィソンがプロデュースしたアメリカ指向のサウンドが、一部から不評を買うことに。全英8位も全米チャート入りはならず。

『デニム・アンド・レザー』9月
◎サクソン

［モンスターズ・オブ・ロック］を歌った「アンド・ザ・バンド・プレイド・オン」、NWOBHM前夜を描いた表題曲などを収録した4作目。当時のメタル・シーンの熱さを活写している。

『悪魔の招待状』（11月）
◎AC/DC

前作〜前々作に続き、ロバート・ジョン“マット”ラングがプロデュース。タイトなリズムと鋭利なリフ＆ヴォーカルが融合するメタリックなサウンドは完成形の域。全米1位を獲得。

COLUMN 世界の1981年は……？

**さて、今回のテーマである1981年、世の中的にはどうだったのか？
ここでは同年の世間での出来事をチラッと覗いてみよう。**

前年の［モスクワ五輪］を日本を含む西側諸国が出場ボイコットしたことに象徴されるように、世界的にはまだまだ東西の冷戦が続いていた時代。

1月にはアメリカでロナルド・レーガンが大統領に就任し、大胆な経済政策を打ち出して注目を集めた。そんななか、3月には路上で銃撃されるというショッキングな事件も起きた。また、アメリカは4月にスペースシャトル・コロンビアの初の打ち上げに成功。6年ぶりの有人宇宙船の打ち上げとして大きな話題を集めた。イギリスでは7月にチャールズ皇太子とダイアナ妃が結婚。聡明な妃の誕生に世界が沸き、日本でも大きな注目を集めた。

そんな日本では、101人の被爆者が出た"日本原電敦賀発電所放射能漏れ事故"、通行人6人を殺傷した犯人が、女性を人質にとり7時間あまりも立てこもった"深川通り魔殺人事件"といった悲惨な事件が起きている。

スポーツ・文化面に目を移すと、大相撲では大関・貴ノ花、横綱・輪島が相次いで引退する一方で、千代の富士が横綱に昇進。世代交代を印象づけた。プロ野球では読売ジャイアンツが日本一に輝く。映画は『レイダース 失われたアーク＜聖櫃＞』や『スーパーマンⅡ』、『007 ユア・アイズ・オンリー』などが世界的に大ヒット。もちろん日本でも話題を集めた。

最後に音楽シーンに目を向けると、1980年末にリリースされ、ジョン・レノンの遺作となった『ダブル・ファンタジー』が世界的に大ヒット。

『ダブル・ファンタジー』
◎ジョン・レノン

『ルビーの指環』
◎寺尾聡

ほかにも米国ではREOスピードワゴン、スティクス、クリストファー・クロスらのアルバムが好セールスを記録。英国ではソフト・セル、アダム＆ジ・アンツ、ウルトラヴォックスなど、ニューロマンティック勢力が健闘している。

日本では寺尾聡の「ルビーの指環」が160万枚の大ヒットを記録。ほか、竜鉄也「奥飛騨慕情」、近藤真彦「スニーカーぶる～す」などがチャートを賑わす一方、70年代後半を席巻したピンク・レディーの解散や、貸しレコード店が台頭するといった出来事も起きている。

数年後には、米メタルの新たなブームを作り、そのアイコンともなるモトリー・クルーもこの年に結成された。

から改めてリリースされており、このことから、のちのメタル・ムーブメントの原点を1981年と言っていいのかもしれない。また、前述のデフ・レパードを始め、アメリカ市場を狙った英国勢のアルバムも、オジー全米16位、ジューダス39位など、なかなかの健闘を見せる。さらにAC/DCは前年リリースした『バック・イン・ブラック』の勢いを受け継いで、11月には『悪魔の招待状』をリリース。バンドにとって初めての全米1位を獲得していたのだった。

このように、ヘヴィメタル夜明け前だったアメリカでも潜在的にハードな音楽への需要は高まっていたことがうかがえ、やはり1981年は以降のブームの下地を作った1年だったという印象だ。

□NWOBHMに直結するバンドが世界中で登場

では、日本の状況はどうだったのかというと、国内の洋楽市場という面でメタルはかなり盛り上がっていた。ホワイトスネイク、レインボー、MSGなどが来日公演を行ない、3月にはサクソン、5月にはアイアン・メイデンと、NWOBHM勢の初来日ツアーも実現。

今回、本稿を書くにあたりいろいろとデータをあたってみて、『キラーズ』が1stアルバムよりもセールス的には劣っていたことが意外だった。個人的には、世間では『キラーズ』のほうが盛り上がっていたような気が

『ダイアリー・オブ・ア・マッドマン』（11月）
◎オジー・オズボーン

オジーの2作目。禍々しいヴォーカルとランディ・ローズの流麗なギター・プレイが相まった、独特なヘヴィ・サウンドを鳴らす。本作発表後、ランディは急逝。全英14位、全米16位。

『Too Fast For Love（華麗なる激情）』（11月）
◎モトリー・クルー

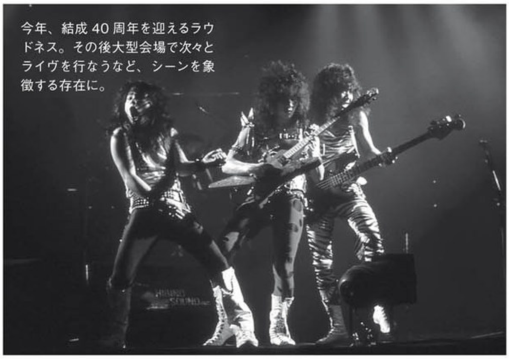
自主制作による1stアルバム。翌年、ロイ・トーマス・ベイカーがリミックスし、一部音源を差替えてメジャーからリリースされた。「スティック・トゥ・ユア・ガンズ」は本作のみ収録。

『THE BIRTHDAY EVE ～誕生前夜～』（11月）
◎ラウドネス

元レイジーの高崎晃（g）を中心とする4人組のデビュー作。テクニカルかつアグレッシブなサウンドは、日本にも本格派メタルの時代が到来したことを高らかに告げるかのようだった。

『ウェルカム・トゥ・ヘル』（12月）
◎ヴェノム

"粗野系メタル"の発展に大きく寄与した1stアルバム。スピードを伴ったノイジィで荒くれたサウンドと吐き捨てるヴォーカルが世界に衝撃を与え、のちのスラッシュ・メタルの雛形に。


今年、結成40周年を迎えるラウドネス。その後大型会場で次々とライヴを行なうなど、シーンを象徴する存在に。

していたからだ。これはおそらく来日公演があったために、雑誌などへの露出が増えたからだったのだろう。当時はインターネットやSNSのない時代。音楽雑誌は大きな情報源だった。そこにはメイデンを始め、メタル系のバンドがたびたび取り上げられていたし、洋楽系のラジオ番組でもレインボーの「アイ・サレンダー」や、グラハム・ボネットの「孤独のナイト・ゲームス」などが頻繁にオンエアされていた覚えがある。

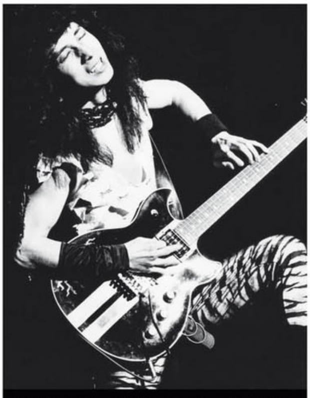
さらに、アメリカ同様、数年後にはいわゆる“ジャパメタ”ブームが到来するが、その先駆けとなったのが1981年。11月には日本初の本格派メタル・バンドとしてラウドネスがデビューし、大きな注目を集めた。その前の4月には、70年代から活動を続けていたバウワウがメタル回帰作『ハード・ドッグ』をリリース。国産ハードロック・バンドとしてデビューした彼らは、70年代後半からポップなニューミュージック路線にシフトしていたが、ここではNWOBHMに直結する疾走感溢れるサウンドを展開しており、欧米では彼らのことをNWOBHMバンドのひとつと捉えるマニアが多いのも納得の音を鳴らしている。この後、バウワウ、ラウドネスに続いて続々とメタル・バンドが登場することになる。

アメリカ、日本と同様にNWOBHMに呼応する動きはヨーロッパでも見受けられ、ドイツのアクセプトは、NWOBHMを彷彿させるアルバム『ブレイカー〜戦慄の掟』をリリースし、フランスからはATTENTANT ROCKやWARNING、スペインからバロン・ロッホ、スウェーデンではEF BANDなどがデビュー・アルバムをリリース。それぞれにやはりNWOBHMの影響をうかがわせるサウンドを聴かせている。

†

1981年のイギリス国内では、NWOBHMはムーブメントとしての勢いを失いつつあったが、デフ・レパード、ジューダス・プリースト、オジー・オズボーンらがいち早くアメリカ市場へと活路を求め、積極的なアプローチを取ったことで、アメリカにも新たなるヘヴィメタルが生まれる下地を構築。クワイエット・ライオットやラット、ドッケンなど、翌年以降に続々とデビューを果たすことにつながり、80年代中盤からはヘヴィメタルがアメリカ音楽市場のメイン・ストリームとなった。

また、NWOBHMの持つ過激さに感化されたキッズたちが、やがてスラッシュ・メタルを生み出し、そちらも80年代後半にはアメリカはもちろん世界的な潮流へと成長していった。同様の動きはヨーロッパや日本でも見られ、1982年以降、各国でヘヴィメタル・バンドが台頭。1981年にアイアン・メイデンの来日公演に沸いた日本では、80年代中盤にジャパニーズ・ヘヴィメタルが大きな盛り上がりを見せた。


山本恭司率いるバウワウ。テクニックとメロディを兼ね備えた彼のプレイは、メタルだけではなく、ジャンルを超え多くのギタリストに影響を与えた。

このように、NWOBHMの熱気が世界各地にも伝わり、それがのちのメタル・ムーブメントにつながっていく。1981年は世界各地にヘヴィメタルが伝播し、今に続くメタル・シーンの発端を作った年と言えるのかもしれない。

...and more!

『キラーズ』(2月)
◎アイアン・メイデン

『ムーヴィング・ピクチャーズ』(2月)
◎ラッシュ

『黄金のスペクトル』(2月)
◎ジューダス・プリースト

『フューチャー・ショック』(3月)
◎ギラン

『ヒット・アンド・ラン』(4月)
◎ガールスクール

『ハード・ドッグ』(4月)
◎バウワウ

『The World's Insane』(4月)
◎ VARDIS

『スタンド・ユア・グラウンド』(5月)
◎ワイルド・ホーシズ

『ショック・タクティクス』(5月)
◎サムソン

『魔夜(ディーモン・ナイト)』(6月)
◎ディーモン

『アースシェイカー』(6月)
◎ Y&T

『ブレイキング・ザ・チェインズ』(9月/欧州)
◎ドッケン

『ロック・アンティル・ユー・ドロップ』(10月)
◎レイヴン

『Nightflight』(10月)
◎バッジー

『孤独のナイト・ゲームス』(11月)
◎グラハム・ボネット

『悪魔の掟』(11月)
◎ブラック・サバス

『反逆者』(12月)
◎シン・リジィ

『クレイジー・ナイツ』(12月)
◎タイガース・オブ・パンタン

METAL HAMMER JAPAN

STARS' WORDS
トミー・モーリー　シュザイの復習
EPISODE-5

トミー・モーリー
音楽専門誌にて、通訳／ライターとして活動。移動の足はもっぱらクロスバイクで高い機動力を発揮してきたが、昨今6年目にしてタイヤが破断。弦交換を10年しないベーシストに近いのか？と思いながら、タイヤを新調。走りやすさアップに感激し、定期メンテの重要性を再確認。

Almost like prog, because a lot of his arrangements are really unusual.

——彼のアレンジの多くはかなり風変わりで、ほぼプログレみたいなんだ。

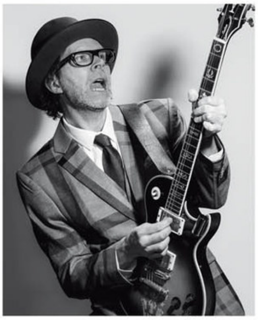
By Paul Gilbert

当コラムでは、本誌通訳の私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、英会話としても使える言い回しをピックアップ！　今回は《ヘヴィの流儀（P.90 ～）》に登場してくれたポール・ギルバートの《STARS' WORDS》です。

Webインタビューでもギターを抱えて登場し、名前を挙げてくれたアーティストや楽曲はほぼすべて弾いてくれまして、その様子を誌面でお伝えできないのが残念……。氏が弾き歌うラウドネスの「Crazy Doctor」、ジャクソン５の「ABC」、ビートルズの「ジョンとヨーコのバラード」などは、ファンでもある私にとっては感涙ものでした（役得！）。

近年の彼は、これまで以上にメロディやアレンジへの探求心が高まっており、アメリカン・ポップスの名作曲家、バート・バカラックへのリスペクトが止まないようです。そんな珠玉の名曲たちを分析した際に出た言葉、[unusual] をピックアップしましょう。

読み方からしてわかりづらい単語ですが、“アンユージュアル”と発音し、＜稀な／並はずれた／独特な＞を意味します。筆者の経験上、これらを転じて“それってヘンだよね！”という意味で普段の会話のなかで使うことも多いですね。



そもそも [un（否定）＋usual] という構成の形容詞ですが、この [un＋形容詞] による単語はけっこうあるもので、[unnatural（不自然な）]、[unfair（不公平な）]、[unlucky（不運な）] など、もはや日本語でも常習的に使われています。

応用篇としては [-ly] という接尾語をつけることで、[unusually] という副詞になります。エネルギーがみなぎるライヴ会場で [The stage was unusually hot!（ステージはいつになくアツかった！）]、[The guitar was unusually loud!（ギターが異常なほどラウドだった！）] と語り合える日々が早く戻ってきてほしいものです。

“He's So Unusual!” なポールですが、ただうまいだけではなく、探求心や発想力も [unusual] だからこそ、今でも第一線で活躍し続けられるのでしょうね。

ではまた次の号でお目にかかりましょう！

[unusual]　＜形容詞＞

【意味】稀な／並はずれた／独特な

【語源】《un-》（接頭語：否定）＋《usual》（形容詞：普通の）

例文

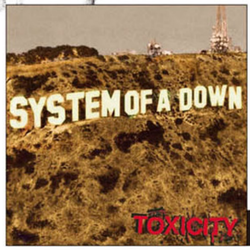
You've had Sushi for a breakfast? Very unusual!
（朝メシに寿司を食ったって？　かなり変わっているね！）

This is very unusual for him not listening to heavy rock.
（アイツがヘヴィロックを聴かないなんて、かなり珍しいな）

グレイテスト・ソングスTOP100
《2000年以降篇》

80年代、90年代の名曲はパッと思いつくけど、2000年以降となるとなかなか思い当たらない……
という人も多いのでは？　そこで今回は、英『METAL HAMMER』が公開した“2000年以降の
グレイテスト・ソングTOP100”をドドンと紹介！　1バンド1曲でセレクトされたチャートになっており、
リアルタイムでの“世界的盛り上がりソング”を知るヒントになるかもしれません。
またサブスクにて各楽曲が手軽に楽しめる今だからこそ、聴きそびれていた曲があった際には、
ぜひその場でチェックしてみてください。実は好みにピッタリの曲があるかもしれませんよ！

翻訳:トミー・モーリー



1 CHOP SUEY!

SYSTEM OF A DOWN

Toxicity ／ 2001

9.11直後、“ツイン・タワーへのテロ攻撃を想起させるから”という理由で放送禁止にすべき楽曲のリストが全米1100のラジオ局に配布された。本曲の[I don't think you trustin my self-righteous suicide/I cry when angels deserve to die（俺のひとりよがりな自殺をお前は信じやしまい／天使が死ぬに値するとき、俺は泣く）]の一行がアメリカ市民を刺激するとの理由からリストに登録され、一部の放送局で放送禁止にされていった。リストにはドラウニング・プールの「ボディーズ」、AC/DCの「ショット・ダウン・イン・フレイムス」、そしてレイジ・アゲンスト・ザ・マシーンのすべての楽曲が並べられていた（アラニス・モリセットの「アイロニック」までもが加えられていることには驚かずにはいられないが）。そしてここに取り上げる、システム・オブ・ア・ダウンの「チョップ・スイ！」もそこに名を連ねている。

これについて、ダロン・マラキアン(g)は次のように話す。*“多くのグレイトなバンドたちが放送禁止になったよ。むしろ、そうならなければクールなバンドじゃないってことだろ？　このことで「チョップ・スイ！」はかえって人気になったんだ”*。

モダン・メタルの名曲はバンドが1stアルバムに伴うツアーの際、ツアー車のなかで書かれたという。*“休憩のために立ち寄った高速道路の停車場で、俺は最後尾の座席でいつも持ち歩いていたアコギを弾いて作ったんだ”*。

この曲のアイディアは、『毒性』の候補曲としてバンド・メンバーやプロデューサーのリック・ルービンに披露するまで、ほかの楽曲となんら変わることなく長い間彼のなかで温められていた。ダロンによるオリジナルの歌詞は当初は明快でわかりやいものだったが、最終的には鮮烈さと曖昧さが共存する、バンドの多くの楽曲と同じく理解しやいものにはならなかった。

*“俺らが他人の死に対して、どういった判断をしているかを歌っている。例えばもし誰かが交通事故で死んだなら「なんてかわいそうなことだ……」と思うだろうが、酔っぱらった状態だったと知ったら考え方は大きく変わるだろ？”*とダロンは続ける。

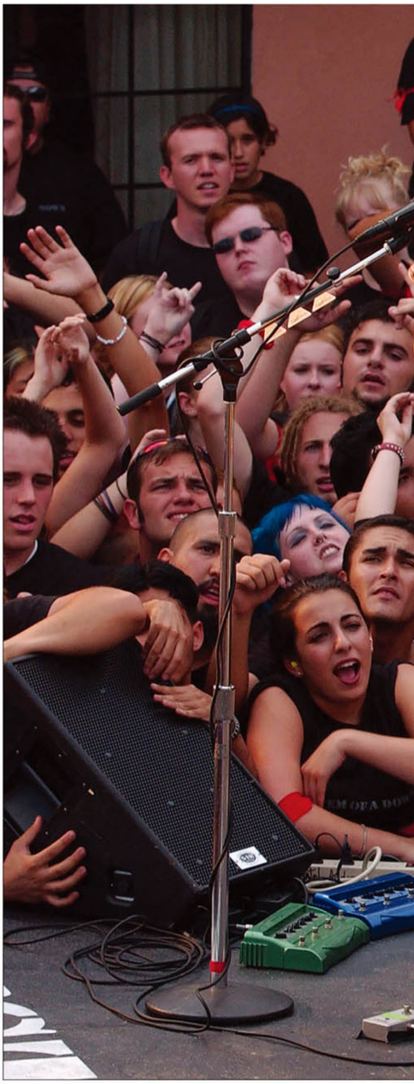
バンドはプロデューサーのリック・ルービンとともに、ハリウッドのチェロ・スタジオでアルバム制作に取りかかった。*“セッションは深夜に及ぶことが多くてね。俺はまだ若くていろいろな《ブツ》を試していたが……それについては触れないでおこうか”*。

リード・シングルには満場一致で本曲が選ばれたが、当初の仮タイトル「Suicide（自殺）」については変更を検討することとなった。あまりにも挑発的で論争を巻き起こしかねないタイトルの変更について、ファンは“レーベルから強く反対を受けたから”なのではないかと推察するだろう。しかしこのことについて、次のように明かしてくれた。

“誰からもプレッシャーを受けなかったし、むしろ「アルバムからのリード・シングルだ。ラジオでかけられないくらいにして話題作りでもしてやるか？」って感じだったさ”。

しかしダロンは「チョップ・スイ！」というタイトルを用意していた。[Sui-]の部分をそのまま残しておこうという言葉遊び的発想があり、幼少期に観たギャングたちの抗争を描いた映画からのセリフ“お前をチョップ・スイにしてやる”（※ズタズタにしてやる、というニュアンス。そもそもチョップ・スイはアメリカ風中華料理で、八宝菜のようなもの）からの拝借で、死と結びつける意味合いをタイトルに込めたのだった。

ビデオは、サンセット・ストリップにあったみすぼらしいホテルの中庭で撮影された。この場所はかつてダロンとベーシストのシャヴォ・オダジアンが売春婦や薬物常習者たちとたむろしていた場所で、曲のムードと一致



していた。本曲とそのビデオはニュー・メタルのスピリットを提唱したが、KORNやリンプ・ビズキットの驚異的な成功によって大量生産された“ウォレット・チェーンをぶら下げたゴロツキの集団”で溢れかえるものとも異なっていた。*“ビデオがリリースされたとき、俺らはツアーに出ていた。街を歩くと「一緒に写真を撮ってもいいか？」と声をかけられるようになって驚いたのを覚えているよ”*。

彼らは『毒性』で多くのバンドと異なるアプローチを取り、「チョップ・スイ！」はその口火となった。このヒットにより『毒性』はリリースから一週間でアメリカ国内だけで20万枚を売り上げたが、同日にアルカイダが世界貿易

センター・ビルに2機の飛行機を突撃させ、本曲のキーワード[Suicide（自殺）]が取り沙汰されて放送禁止となっていった。

“ファンたちは「このバンドは予言者だ」と言い始めたんだ。[Self-righteous suicide（ひとりよがりな自殺）]や[Aerialsinthe sky（空には航空機）]（同アルバム収録「エリアルズ」より）のことを指してね。「むしろ、そう捉えてもらえてクールだね。俺らが予言したと信じさせておこう！」となったよ。それに当時ラジオでかかっていた曲にはない実験的なところがあったし、それでいてメロディックなところもあったから人々の興味を惹いたんだろう”。

本曲によってシステム・オブ・ア・ダウンはスーパー・スター・バンドとなり、アルバムは全米1位を記録。それ以来、アリーナ級のバンドとして活躍し続けている。そしてオンライン配信の時代になってもその勢いは失われず、YouTubeで10億回再生、Spotifyで6億2千万回再生を記録している。YouTubeの再生回数でこの曲を上回ったメタル・ソングはリンキン・パークの「イン・ジ・エンド」のみである。また、Spotifyでの再生数はメタリカのどの曲をも凌駕しており、スリップノットのトップ2楽曲を合算しても到達できない驚異的な数字でもある。

本曲は昨今のロックダウン期間中にUSメタルコア・バンド、オーガスト・バーンズ・レッドにカバーされた。*“この曲は「リヴィン・オン・ア・プレイヤー」や「ドント・ストップ・ビリーヴィン」みたいなものなんだ。誰もが知っている、世代を超える名曲だ。俺にとってこの曲はロック・ミュージックのひとつの時代を定義している”*と、オーガストのギタリスト、JB・ブルベイカーは語る。

*“俺らが今でも通用していることを誇りに思うし、多くの人たちが俺らとつながってくれている。俺があのツアー車のなかで書いたちょっとした曲が、多くの人々の人生を変えたって思うと興味深いし、これって俺にとって特別なものなんだ”*とダロンは結ぶ。

2 Duality

SLIPKNOT

Vol.3: (The Subliminal Verses) ／ 2004

1999年に発表されたセルフ・タイトルのデビュー・アルバム、そしてさらにエクストリームとなった『アイオワ』(2001年)の2枚には、信じ難いほど大きな憎悪と残忍性が込められ、これらは彼らをメタル界のスーパー・スターへとたらしめた。しかし、その地位を維持するためには、次作にて自分たちが本物のバンドであることを証明するアンセムが必要だった。

コリー・テイラーが囁く冒頭のパートから、バンドはリスナーを自らの世界に惹き込んでいく。スロー、ダーク、それでいてメロディアスであり、水面下に何かを潜ませているさまは、それまでとは大きく異なるビーストのようなものだっだ。

*“俺がこの曲を初めて聴いたのは高校生になる直前。友人にビデオを観せられたんだ”*と、当曲に影響を受けた多くのバンドのひとつであるLoatheのフロントマン、カディーム・フランスは振り返る。*“ヘヴィさだけじゃなくて、メロディックさも好きなんだ。この曲で俺は初めてヘヴィな音楽にハマっていった。このジャンルへの入り口のような楽曲なんだ”*。

「デュアリティ」でバンドはソングライターとしてのレベルを上げ、ミュージック・ビジネスとしての成功を目指していることも明らかにした。さらにギタリストのミック・トムソンは2008年のインタビューで*“コリーはそれまで書いてきた「露骨でドギツイ歌詞」から離れ、もっと新しい何かにトライすることを決意した”*と語っていた。

本曲はリリース後すぐさま人気となり、UKシングル・チャート15位というバンド史上最高位を記録し、40万枚以上を売り上げることになる。リリースから5年後の[ダウンロード・フェス]でトリを務めた際、8万人ものオーディエンスがこの曲の冒頭の歌詞を口にしていた光景を思い返すと、今でも鳥肌が立ってしまう。

3 Change (In The House Of Flies)

DEFTONES

White Pony ／ 2000

もしデフトーンズが『アドレナリン』(1995年）でハードに、『アラウンド・ザ・ファー』(1997年)で若干メロウになっていたとするなら、2000年の『ホワイト・ポニー』は新たなテクスチャーやエモーションを表現するスペースを作るために一歩引いてみたアルバムだったと言えるだろう。このアルバムを代表する本曲について、チノ・モレノは次のように話す。*“俺たちのキャリアを通じて、恐らく最もヒットした曲のひとつだろう。俺とステフ(ステファン・カーペンター)が一緒にギターを弾き、アイディアを出し合ってね。ふたりとも「これだ！」と胸を張れるようなものができたとき、俺は「自分たちにもこういうことって起こるんだな！」と驚いたよ”*。

そして本曲のサウンドの核は、ターンテーブルを操るフランク・デルガドがバック・グラウンドで作り出す“死にゆく動物や霊的な存在を彷彿させる、恐怖を煽るような呻き声”にある。当時の彼はシンセサイザーを所有しておらず、レコード盤からのサンプリングをステファンのエフェクト・ペダルで加工してからピッチのベンドを行なっていた。こういったアンビエントなサウンドスケープはこれまでやってこなかったものだったが、それがむしろこの曲に特別な何かをもたらせたのだ。

リリースに際して彼らは、この曲をアルバムからの1stシングルにすべきだと主張。*“この曲を1stシングルにするために、レコード会社とバチバチやらなくちゃならなかった。彼らはもっとアグレッシブなものを一発目に持ってきたかったが、俺は「世の中にはベストな曲から聴いてもらわなくちゃ絶対にダメだ」と一切譲らなかった。そしてこの曲はアルバム中のベスト・ソングだと今でも心から思っているよ“*。

4 Square Hammer

GHOST

Popestar ／ 2016

ゴーストの代表曲をひとつだけ選ぶのは非常に困難だ。2010年に発表されたデビュー・アルバム『オーパス・エポニモウス』はバンド史上最もヘヴィなアルバムとして挙げられることも多く、同作収録曲から選ぶのなら、ロック・ファンならスクリームするであろう「スタンド・バイ・ヒム」や壮大な楽曲「リチュアル」も捨てがたい。

しかし彼らは、2016年発表の『Popestar』でその答えを出した。彼らはこのEPで、80年代ポップスを代表するユーリズミックスや、EDMインディ界のデュオ、シミアン・モバイル・ディスコといった意外な面々のカバー曲をフィーチャーしている。その一方でオープニング・トラックである本曲には、爆発力のあるリフ、強烈でキャッチーなフック、歌いやすいサビなど多彩な要素が重なり合い、一聴すればリスナーの頭脳には少なくとも1年間は刻み込まれ続けることだろう。

*"この曲はリフをもとにして生まれたんだ。実は自分が昔書いた曲からパクっていてさ！　そこから先はすぐにできあがったよ"*とトビアスは話す。*"もともとライヴのオープニングを意識して作った曲なんだ。『Meliora』に伴う一連の活動の中盤で、「悪夢の最終兵器（絶滅2分前）」みたいなストレートなロック・ソングがオープニングに必要だと気がついて。その時点ですでにできていたから、実際にライヴでプレイしてみたら盛り上がってね。今ではこの曲でライヴを終わらせてもイイ感じになっている"*。

「Square Hammer」はスマッシュ・ヒットとなり各国のチャートを徐々に昇り詰め、スウェーデンのバンドとしては初めてビルボード《メインストリーム・ロック・チャート》の1位を記録した。ゴーストにとって最も視聴されたMVであり、配信シングルとしても最大の再生回数を誇っている。

5 Pull Harder On The Strings Of Your Martyr

TRIVIUM

Ascendancy ／ 2005

本曲は、トリヴィアムを地球上で最もホットなバンドにした。そしてこのリリースから3ヵ月後、フロリダの若者たちはその年の[ダウンロード・フェス]のメイン・ステージにて記憶に残るパフォーマンスを披露したのだった。

*"この曲のリフを書いたのは僕がまだ17歳、実家に住んでいた頃だった"*とマシュー・ヒーフィーは振り返る。*"独裁者について歌っているんだけど、これって人生や社会で起こるさまざまなことに当てはまるんだ。しかも現在に限らず遥か昔に起こったことにもね。独裁者によって苦しめられる第三者の視点で書いていて……それは軍隊、ギャング、特定のグループであってもいい。さらに現代人が抱える苦しみにも触れていて、こういう人たちって多くの他者に対してどうしようもない行動をとるものだから"*。

この曲は、いろいろなバンドに興味を持つ若いロック・ファンと、オールドスクールなロックを愛するメタル・ヘッズを融和させていった。その要因について、*"僕らはメタル、メタルコア、エモ、パンク、メロディック・デス・メタルの名曲を吸収していた年頃だったんだ。この曲にはメロディックなヴォーカル、セパルトゥラやマシーン・ヘッドが得意とする開放弦を絡めたルーツを感じさせるようなリフなんかが少しずつ混ざっているよね"*と続ける。

現在はさらにレベルアップした彼らだが、瞬間的な勢いで言えば、いまだに『アセンダンシー』の頃には敵わないといった印象だ。そしてその時期は、実はメタル界においても重要な時代でもある。例えばAs Lionsのオースティン・ディッキンソンのように、当時彼らを目撃したことで次世代の担い手となったメタル・バンドをいくつも誕生させている。

6 Blood And Thunder

MASTODON

Leviathan
／2004

マストドンは、“伝説の白鯨“モビー・ディックを巡る数奇な長編小説を題材にした見事なプログレッシブ・アルバムを作った。*“この曲のリフはキャッチーで、ドラムがバンド・インするとスイッチが入るんだ”*と、大もとのシンプルなリフを持ってきたブラン・デイラーは振り返り、ビル・ケリハーは自身のギターを*“まるで「メリーさんの羊」くらいにキャッチーだ”*と表現する。

そしてトロイ・サンダースによる雷鳴のようなヴォーカルに対し、ゲスト参加のニール・ファロン（クラッチ）も負けじとブリッジで対抗する。しかし当初ブランは、ニールにオファーすることをためらっていたという。*“第二のキャラクターであるアハブ船長をトロイが演じるのはヘンだった。歌詞を書いていたとき、俺らはクラッチとツアーをしていて「ニールに歌ってもらうのはどうかな？」となったんだが、断られるのがとても怖くてね”*。しかしニューロシスのスコット・ケリーが同アルバムの「アクア・ディメンシア」に参加することが決まり、ブランが勇気を出してニールに声をかけたところ参加が実現した。

そしてシングルとしてリリースされた際に制作されたビデオでは、ブランの長年切望してきたアイディアが実現されている。文学的で海洋をテーマにした曲ではあるが、なんとたくさんのピエロを登場させ、自身たちも同様の衣装に身を包んでいる。その結果、このビデオとともにアルバムを代表する曲となり、アトランタ出身の奇抜なバンドの新たなファンの獲得に大きく貢献した。

*“この曲に特別なものを感じていたけど、ここまで人気になるとは思わなかったよ。この曲への感謝の気持ちを忘れることはないね”*とブランは謝辞を送る。演奏シーンでドラム・キットの背景にあったピエロの大きな顔のオブジェは、現在彼の家の廊下に置いてあるそうだ。

7 Redneck

LAMB OF GOD

Sacrament
／2006

*“ラム・オブ・ゴッドみたいなバンドがシングルを出すことに意味があるのか、本当によくわからないんだ。しかしこの曲によってエアプレイを勝ち取ったし、それ自体はエキサイティングなことだったね”*とマーク・モートンは言う。

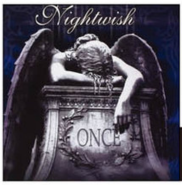
確かに毎回のサビで“fuck”がくり返されるシングル曲など、想像しづらいだろう。しかしダイムバッグ・ダレルにも劣らないグルーヴに満ちたリフ、そしてクリス・アドラーによるシンプルながらもドライブしまくるドラム・ワークは実に見事である。

そしてバンド史上最も辛辣で沸騰するような歌詞もポイントで、［So goddamn easy to write this, you make it spill on the page!／この歌詞を書くのはなんて簡単なんだ！　ページにぶちまけてやる！］というランディ・ブライズによる咆哮は、バンドにとって今でも最も歌いやすい一行だ。これには、同アルバム収録曲「ディセンディング」の制作では疑問点も出たという背景があり、それによってマークは*“もっといいものを作ってやる！”*と火が点いたという。

最凶にヘヴィでグルーヴィなメタルでありながら、新たなレベルのキャッチーさを手にしたこの曲は、彼らを代表する1曲となった。*“俺はビデオ制作が好きじゃないんだが、あの台本はクールで楽しかったね。確かクリスが昔「ルーン」（『アズ・ザ・パレス・バーン』収録）で思いついたものなんだけど、合わなかったんだ。でもこの曲はもっと遊び心があってバッチリだったな”*とマークが話す本曲のクリップは、子供たちの誕生日会に駆けつけてライヴを開催するというカオスのような光景で、2000年代中盤を代表するメタルのビデオとなった。

8 Nemo

NIGHTWISH



Once ／ 2004

*“初めてこの曲を聴いたとき、美しくてキャッチーなメロディがスッと入ってきたわ。直観的にシングルにするべきだと感じたけど、そういう曲って録音する際に緊張するものなの。でも大切なのは最良のテイクを録り、曲を最大限に素晴らしいものにさせることよ”*とバンドの前シンガー、ターヤ・トゥルネンが振り返る。

しかし制作は非常に難航し、納得する歌詞やメロディができるまで何ヵ月もアレンジに費やしていった。もともとは今よりも2分ほど長くテンポも速かったのに対し、“このパートは馬鹿げている。取り除いて10bpmほどスローにさせよう”というエンジニアの意見で大きく進展したそうだ。

雪が降る山頂で撮影されたビデオはドラマチックかつダークなゴシック調に仕上がり、リリース後の彼らはいたるところで”ゴシックを感じさせる花”をあしらわれるようになった。しかし各所でヒットを記録しても、当初はMTVから“雪を見せたくない”との理由で放送拒否を突きつけられていた。しかし*“どうして年中ビーチの映像ばかり見せなくちゃいけないの？　雪が降っていたっていいじゃないの！”*と憤慨するターヤの怒りをよそに、この曲を通じてバンドは広く知られていくこととなる。

リリースから17年経過した現在でも、本曲はシンフォニック・メタル最大のアンセムとして君臨している。彼らのキャッチーなポップ・メタルを作り出す能力は高く評価され、欧州メタル・シーンでのリーダー的地位を築いた。

9 Stranded

GOJIRA

Magma ／ 2016

デュプランティエ兄弟は母の死を乗り越え、最もヘヴィなアルバムを作ることを決意。本曲は暗闇のなかでの叫びであり、自暴自棄と死への恐怖を生々しく描いている。メロウになったかと思ったら激しい苦悶に襲われたり、突然のオフ・ビートで世界が狂った方向に向かおうとしていることも表現する。フランスが生み出した4人組はモダンなメタルに新たな基準をもたらし、『Magma』は本誌2016年の人気投票で首位を獲得した。

10 Sonne

RAMMSTEIN

Mutter ／ 2001

歌詞の趣旨とまったく違うストーリーで表現されたミュージック・ビデオが印象的な本曲。従来の白雪姫のイメージを逆手に取り、前衛的な観点で創作したところからは、ラムシュタインの大胆さとクレイジーな一面がより際立っている。特に曲の締めとなる10カウントの最後、白雪姫が復活したあとの[aus]（アウト＝おしまい）での“ストーリーの続きでもあり、おわりでもある”という、曖昧な解釈のできる部分がまた魅力的だ。

11 Doomsday

ARCHITECTS

Holy Hell ／ 2018

ギタリストでソングライターだったトム・サールの死にメタル界は衝撃を受けた。バンドはそのひと月後にツアーに出たが、のちに極秘に制作された「Doomsday」にて、深い悲しみを描くことは自然な流れだろう。傷ついた姿も見られたが[souls don't break, they bend ／魂は壊れない、曲がるのみ]の一節が示すとおり前を向いていた。輝かしさだけでなく物悲しさも混じる、世界中のファンとの絆を再認識した復帰作なのだ。

12 The Wicker Man

IRON MAIDEN

Brave New World ／ 2000

ブレイズ・ベイリー期を経て、アイアン・メイデンはブルース・ディッキンソンとエイドリアン・スミス（3ギター体制を組むことにもなった）を迎え、驚異的なアルバム『ブレイヴ・ニュー・ワールド』を発表した。この曲は「撃墜王の孤独」以来のメイデン史上最高のアルバム・オープニング・トラックだろう。以降も彼らはソングライティングの質を磨き上げていったが、ヘヴィメタル・アンセムという点でこの曲は現在もトップに君臨している。

13 Heaven's A Lie

LACUNA COIL

Comalies ／ 2002

イタリアが生み出したこのバンドは、この時点で2枚のアルバムをリリースしていたが、『Comalies』はそれらを超越している。本リード・シングルは心温まるバラードだ。ゴシックな世界観への憧憬に満ち、また同様にゴシックを意識したエヴァネッセンスがメインストリームへと駆け上がる1年前にリリースされたことも興味深い。本曲は彼女たちを評価する際の基準となり、人気も高くライヴで最もプレイされる曲となった。

14 Papercut

MUSICIAN'S PICKUP

LINKIN PARK

Hybrid Theory ／ 2000

リンキン・パークの『ハイブリッド・セオリー』はグレイトなアルバムのひとつで、彼らは多くのバンドに影響を与えたよね。俺がこの曲のビデオを初めて見たときは、あまりのワイルドさに驚いたもんだよ。特に好きなパートは真ん中の“the sun goes dowwwwwn!” ってところで、初めて耳にしたときから巨大なフックとしてずっと頭のなかにこびりついているんだ。

（サム・カーター／ ARCHITECTS）

15 Nightmare

AVENGED SEVENFOLD

Nightmare ／ 2010

M.シャドウの“Nightmaaaaaaaare!”という痛々しい叫びは、ザ・レヴを失った悲しみから立ち直ろうとするバンドの心の叫びを代弁している。彼は*“このピュアなエネルギーこそアルバムのオープニングに持ってくるべきだと感じた”*と語る。冒頭のシャウトについては、*“あのバカみたいなヤツを何度もくり返し歌ったんだ”*と笑いながら振り返った。彼らのスタイルを追求する礎となったのだから、その価値はあっただろう。

16 My Last Serenade

MUSICIAN'S PICKUP

KILLSWITCH ENGAGE

Alive Or Just Breathing ／ 2002

俺はBLEED FROM WITHINを始めた15歳の頃に、このクリーン・ヴォーカルでサビを歌うエクストリームな音楽を初めて聴いたんだ。彼らはまさに俺が求めていた最もヘヴィな音楽だった。リフはヘッドバンギングを誘うし、気づいたらキャッチーなサビを口ずさんでいるんだ。このアルバムは俺のメタルへの接し方を変えてくれたし、今でも愛しているよ。

（スコット・ケネディ／ BLEED FROM WITHIN）

17 Executioner's Tax

POWER TRIP

Nightmare Logic ／ 2017

彼らほどスラッシュ・メタルを現代にマッチさせたバンドはいないだろう。フロントマンのライリー・ゲイルは、このジャンルの最も大切な次世代のシンガーとして認知されていた。自らの代表曲について、*“勢いのあるキャッチーな曲に聴こえるかもしれないけど、死と心地よさの関係を追求していて。ドラッグやギャンブルに酒と、資本主義社会では死の恐怖から遠ざけてくれるものに金を払っているんだ”*と彼は語っていた。

18 Last Resort

PAPA ROACH

Infest ／ 2000

本曲はトビン・エスペランスが地元で音楽仲間と住んでいたとき、耳に残るリフをピアノで弾いたことから始まる。バンドでアレンジした際、壁越しに聴きつけたマネージャーが“もう一度プレイするんだ！　これはスゴいぞ！”と興奮していたという。リリース後にヘヴィ・ローテーションされ、ヨーロッパではトップ10入りを果たす。現在でも力強さを保ち、TikTokのスターに見出され10代を中心に再び注目が寄せられている。

19 Halo

MACHINE HEAD

The Blackening ／ 2007

1stアルバム『バーン・マイ・アイズ』で一躍モダン・メタル・シーンの最前線に躍り出たロブ・フリン率いるマシーン・ヘッドだったが、この『ザ・ブラッケニング』にてヘヴィメタル界での不動の地位を手に入れたと言えるだろう。大きな緩急とグルーヴをあわせ持つ「ヘイロウ」は、合唱させるコーラスで何度でもオーディエンスを沸かせるのだ。捨て曲ナシの同作品の楽曲は、どれもそうなのだが。

20 Krigsgaldr

HEILUNG

Ofnir ／ 2015

高貴な雰囲気、兵士に武器を取らせる合図、霊的な儀式、底なしの穴に落ちていく演出……そのすべてが存在する、何世紀にも及ぶ眠りからの覚醒を歌った彼らの代表曲だ。羊水のなかで聴こえる拍動をドローンによって表現し、剣をリズミカルに叩きつけるようなサウンドは、まるで鉄器時代の音楽のよう。この9分間に渡る風景の描写が、世界中にカルトなフォロワーを産み出した。

21 Electric Worry

CLUTCH

From Beale Street To Oblivion ／ 2007

クラッチはこのアルバムでピークを迎えようとしていた。ストーナー、ブルース、ヘヴィメタルといった音楽性に裏打ちされた、同世代のバンドにはないヘヴィでグルーヴィなロックンロールを展開している。アルバムのハイライトでもある本曲の濃厚なジャムには、マディ・ウォーターズ、ジョン・リー・フッカー、ミシシッピ・フレッド・マクダウェルといったレジェンドからの影響も刻み込まれ、現在でも最もファンから愛される一曲となっている。

22 Schism

MUSICIAN'S PICKUP

TOOL

Lateralus ／ 2001

既成概念を壊す唯一無二のサウンドであり、俺にとっての彼らの代表曲だよ。驚異的なビデオ、複雑なリズム、意味深で比喩的な歌詞……これらのすべては俺のヘヴィ・ミュージックへの見方を変え、アーティスティックな方向性にも影響を与えてくれたな。だからグラミーで《ベスト・メタル・パフォーマンス》を受賞したのだって驚きじゃないよ。この曲はモダンなメタルのあり方を変えたんだ。　　　（ダニエル・トンプキンズ／テッセラクト）

23 Through The Fire And Flames

DRAGONFORCE

Inhuman Rampage ／ 2005

本曲はハーマン・リが長年希望してきた、パワー・メタルとTVゲームを融合させた楽曲だ。"ほかのバンドがやったことのないことをやる"をコンセプトに、ハーマンが"ずっと曲中で使う機会をうかがってきた"と話す『パックマン』風のレトロなTVゲームのノイズを織り交ぜている。メタルらしい速さと派手さを失った一方で、ギターやドラムによってハッピーなハードコア・ソングに仕上げられている。

24 Shadow Moses

BRING ME THE HORIZON

Sempiternal ／ 2013

彼らは髪型や勢いだけが売りではないことを、この曲で証明した。もともとアルバムのタイトル曲となるはずだった「Shadow Moses」は、オリ・サイクスのクリーンと歪んだ声にジョーダン・フィッシュのキーボードを混ぜ、サビでエモーションを爆発させている。前作『ゼア・イズ・ア・ヘル、ゼア・イズ・ア・ヘヴン』よりもさらにレベルアップした熱量により、その後急上昇をしていくこととなったのだ。

25 Wings Of A Butterfly

HIM

Dark Light ／ 2005

このアルバムの制作プロセスについて、ヴィレ・ヴァロは***"異なる材料を使って同じことをくり返すようなものだった"***と振り返る。彼らが"サバス味のあるリフをロマンティックでゴシックなサウンドスケープに混ぜ込む"という方程式から逸れることは滅多にない。しかし『ダーク・ライト』はこの法則から踏み出たのみならず、最大のシングルである本曲を生み出した。この曲で彼らは認知度を高め、スタジアム級のバンドとなった。

26 Vice Grip

PARKWAY DRIVE

Ire ／ 2015

"これは単に新しいアルバムってだけじゃないんだ"と、ウィンストン・マッコールは『Ire』リリース直前に語ってくれた。言葉のとおり、当5枚目のスタジオ・アルバムにて彼らは惜しげもなくヘヴィメタルの側面を押し出し、リード・シングルである「Vice Grip」にて突き抜けるまでのキャッチーさや陽気さを実現している。各レビューで"ライヴで凄まじいことになるだろう"と書かれ、すぐさま定番曲となった。

27 Rollin'

LIMP BIZKIT

Chocolate Starfish... And The Hot Dog Flavored Water ／ 2000

20年が経過した現在でも輝きを放つ本曲は、メインストリームを侵略したニュー・メタル・チューンとして最も大きな功績を果たしたと言える。バカバカしいまでにキャッチーで、イギリスではチャート1位のスマッシュ・ヒットを記録し、バンドとしてもポップ・カルチャーの新たなアンチ・ヒーローという地位を築くことに。なお、この曲は[レッスルマニア19]でのジ・アンダーテイカーの入場曲としてプレイもされた。

28 Nobody

SKINDRED

MUSICIAN'S PICKUP

Babylon ／ 2002

シングル『Warning』リリース後にこの曲を聴きました。僕らはスキンドレッドのツアー・サポートをしていて毎晩聴いていましたが、自分にとって初のレゲエ・コアでとても新鮮でした。ニュー・メタルとも違いグルーヴィなドラムに強烈なヴォーカルのフックがあり、それでいてギター・リフはほんの数個あるだけ。とてもシンプルにリフレインするんです。メンバーはファンを踊らせるためのグルーヴの作り方がわかっているので、ライヴではとても力強く聴こえます。　（KOIE ／ CROSSFAITH）

29 Road Of Resistance

BABYMETAL

Metal Resistance ／ 2016

ヘヴィ・サウンドとポップ・メロディを掛け合わせた『BABYMETAL』で、それまでの常識を打ち破る音楽を提示したBABYMETALが、より高次元でのマッシュアップを持って生み出したのが『METAL RESISTANCE』であり、このオープニング・ナンバーである。シリアスな楽曲構成を持った高速チューンは瞬く間に欧州を駆け巡り、彼女たちが紛うことなきメタルであることの刻印を打った。　（※UK誌ではUK盤に収録のある『BABYMETAL』として紹介）

30 Here To Stay

KOЯN

Untouchables ／ 2002

4thアルバム『イシューズ』はファンの間で意見が割れたが、大ヒットとなった続作品『アンタッチャブルズ』からの1stシングルはマンキーとヘッドのツイン・ギターが強烈にドライブし、精神的苦痛を題材にダンス・フロアを沸き立たせるナンバーへと昇華させる、彼らのスキルを顕著に示す楽曲となった。2003年にグラミーの《ベスト・メタル・パフォーマンス》を受賞し、ディジー・ラスカルのシングル「サイレンズ」にインスパイアを与えた。

31 Milk Lizard

MUSICIAN'S PICKUP

THE DILLINGER ESCAPE PLAN

Ire Works ／ 2007

彼らの2017年の解散UKツアーの前座を務めたとき、この曲を聴いたんだ。純粋な怒りを込めてアグレッシブにスクリームして歌いあげる一方で、音程をパーフェクトに維持したままにメロディックな憂いや優雅さも感じさせる歌唱には畏敬の念を覚えるよ。この曲からは、たくさんいるほかのリード・シンガーたちが持っていない多彩さを感じさせられるんだよね。

（イェティ・ボーンズ／ホラー）

32 Disciple

SLAYER

God Hates Us All ／ 2001

90年代後半、移り変わろうとするシーンに対して、スレイヤーは自分たちの居場所を見つけるべくもがき苦しんでいた。*“リンプ・ビズキットといったバンドたちにうんざりだったし、何もピンとこなかったね。むしろ一旦立ち止まり、自分らしくあることの大切さを考えさせてくれた。この曲は俺ららしさを再発見させてくれたんだ”*とケリー・キングは振り返る。

この曲は“God hates us all!”のシャウトが耳に突き刺さるバンド史上最もキャッチーな曲だが、彼らの持ち味である殴りかかるようなエネルギーを維持している。これについて*“LAで交通渋滞に巻き込まれたとき「God loves you all」と書かれた看板を目にし、そこから《God hates us all》という歌詞が生まれたんだ。トム（アラヤ）がヴォーカルを入れたとき、「これこそ俺が聴きたかったものだ！」と笑みがこぼれたね”*とケリーは教えてくれた。

一方、トムはカトリック教徒であるため、このような楽曲を歌うことに抵抗はなかったのだろうか？そのことについて彼はこう答える。*“ケリーは最凶な曲を書いてくれた。いい曲なら「自分の信教に反するから歌えない」なんてことは言わないさ”*。

*“俺らの曲には珍しく、普段やらないようなビッグなチャントが入っている。フェスなんかじゃ、こういったフックやグルーヴがある曲が求められているのもわかっているんだ”*とケリーが話す本曲は、グラミーにて《ベスト・メタル・パフォーマンス》にノミネートされ、トゥールの「スキズム」に受賞を阻まれたものの、歴史に残る名曲となった。

33 Moth Into Flame

METALLICA

Hardwired...To Self-Destruct ／ 2016

80年代の、90年代の、そして2000年代の彼らはどれも別の顔をしたバンドであり、しかしそれでおなひとつの大きなサウンドに貫かれ、唯一無二のメタリカを形成している。大きな縦ノリで突撃してくるこの曲をアリーナ聴けば、どれだけ広大な音楽の渦が作られているか気づけるはず。2000年代の彼らは実質的な速度ではなく、曲の躍動でスピード感を演出しているということだ。もちろん、明らかなスラッシュ・チューンもいいのだが。

34 Malfeitor

MUSICIAN'S PICKUP

WATAIN

Lawless Darkness ／ 2010

この曲はヴァーテインのベスト・ソングのひとつであり、ここ10年のブラック／ダーク／デス・メタル・シーンの最高峰だと思う。アグレッシブさ、ダークネス、神秘主義、メロディを持ち合わせていて、俺のハートに残り続けるんだ。誰もがこれらのフィーリングをメタルに求め、そしてこの曲にはそれらがベストな形で詰まっている。俺は何度もこの曲をライヴで体験してきたから、その尊さを知っているのさ。　（サキス・トリス／ロッティング・クライスト）

35 Tears Don't Fall

BULLET FOR MY VALENTINE

The Poison ／ 2005

『ザ・ポイズン』により、彼らはクールな雰囲気のバンドとして人々に広く知られるようになったのかもしれない。しかしこのアルバムが佳曲だらけの良作であることも忘れてはならない。「Tears Don't Fall」はエモとメタルがぶつかり合った最上の曲と言えるだろう。メタル・ファンはベース・ラインやビッグなリフに心をつかまれ、エモを愛する者たちは悲壮感の漂うサビで理性を失ってしまうのだ。

36 Only For The Weak

IN FLAMES

Clayman ／ 2000

*"この曲をゴッセンバーグでプレイしたとき、地震警報が鳴ったんだよ"*と、昨年アンダース・フリーデンは語ってくれた。「オンリー・フォー・ザ・ウィーク」は最大のメロデス・ソングのみならず、永遠のメタル・アンセムであり、イン・フレイムスをメタル界の重要ポストへと押し上げた曲でもある。*"この曲は団結させてくれる。ヘヴィなサウンドではあるが、誰もが好きにならずにはいられないんだ"*と、彼は謙遜しながらもつけ加えた。

37 Ari Ari

BLOODYWOOD

Single ／ 2018

「Ari Ari」でインド発のメタル・バンドがネット界にセンセーションを巻き起こし、"こんな曲は聴いたことがない"という多くの声で溢れた。本曲はインドで有名なフォークのカバーであり、本家同様に縦笛が大々的にフィーチャーされている。そして"すべての物事はつながっていて、我々は違わない存在だ"と訴える。*"自分たちのルーツを保ちつつも、普遍的なメッセージを発していきたい"*とギタリストのカラン・カティヤーは語る。

38 Bleeding In The Blur

MUSICIAN'S PICKUP

CODE ORANGE

Forever ／ 2017

エクストリーム・バンドがキャッチーな曲を作った例？　教えてやろう、この曲だ！　ヤツらは天才だよ。この曲は彼らしくアルバムに花を添えている。バンドが何に影響を受けたか言い当てることもできるだろうけど、ここにはオンリー・ワンなコード・オレンジらしさがある。俺はこんなにも才能があって民主主義的にうまくやれているバンドを見たことがないね。とてもインスパイアされてしまうよ。　（コリィ・テイラー）

39 Chlorine & Wine

BARONESS

Purple ／ 2015

本曲はバンド生命を終わらせかねなかったバス事故ののちに書かれた、バロネスの名盤『Purple』の代表曲だ。7分にも及ぶ本曲のメロディは強く胸を打ち、メランコリーな気分にさせてくれる。生命と壊滅に触れるユニークな歌詞を綴ったジョン・ベイズリーの世界観が、頭にこびりついて離れないリフとともに、聴く者の心に響いていくのだ。今もこのバンドが存続してくれることに感謝したい。

40 Concubine

MUSICIAN'S PICKUP

CONVERGE

Jane Doe ／ 2001

この曲は謎深いよね。詩的に感情を綴った歌詞は、ジェイコブ・バノンの怒りの叫びを示唆していて、1分19秒というコンパクトさのなかにさまざまなアイディアやアプローチが詰め込まれているんだ。ミドル・テンポのハーモニックなパートでブラスト・ビートが見せ場を譲るところや、エンディングでルーズにブレイクして一旦スローになっていくところがなんかが俺のお気に入りだな。　（スティーヴ・フォン・ティル／ニューロシス）

41 I Miss The Misery

HALESTORM

The Strange Case Of... ／ 2012

「ラヴ・バイツ」はバンドを世界レベルに押し上げた曲かもしれないが、本曲はリジー・ヘイルが同世代のなかで最高のロック・ヴォーカリストのひとりであることの証となった。聴く者を興奮させるロックンロールの鼓動を持った賛歌と呼ぶべき「アイ・ミス・ザ・ミザリー」は、"名曲があってこその名シンガー"であることも教えてくれている。彼女らが大きなステージで活躍すべきバンドであることを示し、それは実現された。

42 K.I.N.G.

SATYRICON

Now, Diabolical ／ 2006

キャリアを決定づけ、15年もの間輝き続ける曲を持つバンドはそうそういない。オーソドックスなブラック・メタル・バンドであった彼らにとって、「K.I.N.G.」はスタッカートを混ぜたカミソリのように強烈なリフ、足を踏みつけたくなるようなグルーヴといった新たなサウンドへのシフトを予告するものでもあった。サティアーとフロストは魅力的なアンセムをシーンに投じ、深く頭脳に刷り込まれていく1曲を作りあげたのだ。

43 One Armed Scissor

AT THE DRIVE-IN

Relationship Of Command ／ 2000

2000年、かつてニルヴァーナがグランジを盛り上げたように、彼らがポスト・ハードコアに火をつける存在になると想像した人もいるだろう。残念ながらそうはならなかったのだが、本曲は聴く者に狂乱や眩暈を与える新たな火つけ役となった。フガジが打ち立てた怒りのパンク精神、フランク・ザッパのシャーマン的要素やサイケさ、アレン・ギンズバーグの抽象的なジャズ・ポエトリーなどの後継者となり、唯一無二の芸術性を放っている。

44 Still Counting

VOLBEAT

Guitar Gangsters & Cadillac Blood ／ 2008

ヴォルビートは、メタル・シーンにおいて唯一無二の存在であり続けている。威勢のいいロックンロールとメタリックなギター・サウンドは、彼らをヨーロッパの大物バンドへと押し上げ、2008年発表の本佳曲では抑えきれない独自のスタイルを見せつけてくれた。ときにホーダウン(※南部の伝統的なダンス)的で、ときにメタリカ的な強烈なスラッシュを織り交ぜることで、最高に愉快な曲となったのだ。ファンにも愛され、今もってライヴの定番でもある。

45 More than Meets The Eye

TESTAMENT

The Formation Of Damnation ／ 2008

『ザ・フォーメーション・オブ・ダムネイション』は約10年振りのフル・アルバムであり、チャック・ビリーのガン闘病後の復帰作でもある。彼らは下馬評を覆すキラー・チューンのリリースを目指し、それはアルバムに先行する形で見事に実現された。そして本曲はバンドを代表するナンバーとなり、スラッシュ・メタルの破壊王がシーンに"第二の黄金期"として戻ってきたことを印象づけた。

46 The Bleeding

FIVE FINGER DEATH PUNCH

The Way Of The Fist ／ 2007

あまり知られていない事実だが、ラスベガスのこの5人組は、繊細で上質なバラードを書くこともできる。キャリア初となったこのシングルでアイヴァン・ムーディーは叙情的な言葉を紡ぎ、サビにてすべての感情をさらけ出し、悪化していく恋人との関係による痛みを歌っている。現在でも本曲はライヴのハイライトであり、何千人ものファンがライターを灯し彼とともに合唱している。

47 Angels

WITHIN TEMPTATION

The Silent Force ／ 2004

彼らはこの20年間、あらゆる意味で変化をしてきたが、初期の過剰なまでにシンフォニックな頃の印象を強く持っている読者も多いことだろう。しかし、パワーを削ぎ落とした「Ice Queen」や「Mother Earth」といった曲と同様に、純粋にキャッチーさを追求した「Angels」は、バンドにとって初のヒット・ソングとなった。シンフォニック・メタルの地位拡大に貢献したうえに、今聴いても壮大なサウンドの1曲である。

48 The Sickness

MUSICIAN'S PICKUP

DISTURBED

The Sickness ／ 2000

俺は13歳のときにこの曲を聴き、その瞬間にお気に入りの1曲となったよ。病みつきになるグルーヴがあって、ギターやドラムが作り出すリズムとヴォーカルが補い合ってドライブさせていくんだ。聴いているとサイコーな気分になるし、みんなにもぜひ楽しんでほしいね！

（ダイアモンド・ロウ／ TETRARCH）

49 Lightning Strike

JUDAS PRIEST

Firepower ／ 2018

『エンジェル・オブ・レトリビューション』以降、コンスタントな活動を維持してきたプリーストだが、『ファイアーパワー』のエネルギーを迎えるための準備ができていたリスナーはひとりとしていなかったはず。彼らにとってここ30年間での最高のアルバムであり、リード・シングルとなった本曲で完璧なヘヴィメタルを見せつけた。緊迫感と活気を添えるアンディー・スニープのプロダクションは、この楽曲を現代にマッチしたサウンドに仕上げている。

50 Helvegen

WARDRUNA

Runaljod – Yggdrasil ／ 2013

カラスの鳴き声と重厚なビート、低いヴォーカルで始まるこの楽曲は、神々しさと畏敬の念を抱かせるだろう。フロントマンのエイナー・セルヴィックによると、*“何年もかかる曲がある一方、一瞬でできあがる曲もある。この曲は濃密な3日間の作曲とレコーディングで完成した”*とのこと。タイトルは“地下世界への道筋”を意味し、バイキングたちの多神教的な観点では死後の世界について明確な答えがないことを歌っている。

51 Bleed

MESHUGGAH

Obzen ／ 2008

メシュガーは初期のスラッシュ・スタイルからどんどんと変態し、ついには現代的メタルの主要ジャンルである“ジェント”を生み出した。では彼らがあえて複雑さを狙っているのかと言えばそれは否であり、フロアを上に下にとする本曲でそのことがわかるはず。マシンのようなリフとキックによる波状攻撃は、決して多くの展開も持つものではないが、その音圧によって我々は酩酊した状態へと引き込まれていく……。

52 Of Mind - Nocturne

TESSERACT

Altered State ／ 2013

テッセラクトは『One』という素晴らしいデビュー・アルバムを作り、それに続く作品を作るためプレッシャーにさらされていた。さらにシンガーの脱退を受け入れなくてもいけなかった。だがバンドはアッシュ・オハラの力を借りて本曲を制作。人間が持つ感情のすべてを5分間で表現し、簡潔ながらも今世紀最高のプログレッシブ・チューンに数えられる1曲を生み出したのだった。

53 Devil Is Fine

ZEAL & ARDOR

Devil Is Fine ／ 2017

この曲はアンダーグラウンド・シーンを驚かせた。ブラック・メタルとブルースをマッシュアップさせたスタイルは、それまで誰も聴いたことのない音楽であり、しかもマニュエル・ガグノーがこの世代の最もユニークな声の持ち主であることも示したのだった。チェイン・ギャングたちによるチャントとブラック・メタル的リフの組み合わせもエモーショナルで耳に残り、最高にイーヴィルである。

54 Turbo Killer

CARPENTER BRUT

EP Ⅲ ／ 2015

「Turbo Killer」によって、バンドのシンセ導入による革命が5段目のギアに入ったと言えるだろう。そのサウンドはまるで1985年から3085年へと光速移動するようで、すぐにダンス・フロアのクラシックとなり、レイヴやメタルのファンたちから受け入れられることとなった。そんな速く緊迫した本シングル曲では、ここ数年で最も網膜を焦がすようなMVも作られている。

55 Nymphetamine (Fix)

CRADLE OF FILTH

Nymphetamine
／2004

クレイドル・オブ・フィルスは、堅調なチャート・アクションや[オズフェスト]での大トリを務めるなど、ソニー時代に商業的成功を手にしていた。その後ロードランナーと契約することになるが、そこにはレーベル側からのさらなる期待が存在していた。

もともと「Nymphetamine（Fix）」は長く複雑な曲で、速いブラック・メタルやスロウで壮大なゴシック・パートなど、いくつもの特徴的な見せ場を持ち、とりわけ本曲のスロウなパッセージはリード・シングルとしてのポテンシャルを有していた。*“レーベルは中間セクションを取り出してシングルにさせたがっていた。そして俺はその結果に満足している”*とダニは言う。

本曲には、悪夢の子守歌と呼ぶべきさまざまな要素が詰め込まれている。ダニの悪魔的な唸り声は、ゲストとして招かれたシンフォニック・メタルのスター、リヴ・クリスティン（元リーヴズ・アイズ）の霊的なヴォーカルと見事な対比を作り出す。*“ビデオについて監督と議論して出たのは、リヴをブランコに乗せ、俺が大きなコートを着るっていうアイディアだった。何度もプリプロダクションを行ない、[ロンドン・ダンジョン（※同地にある恐怖の歴史の博物館）]でダークなフィーリングを撮影したんだ”*。

この曲はバンドにとっての最大のヒットとなり、ビデオはYouTube上で6400万回以上再生されている。またこの曲はMTVの人気司会者バム・マージェラの目に留まり、彼らはアメリカに招待されて人気リアリティ番組『Viva La Bam』に出演することとなるのだった。

56 All Shall Fall

IMMORTAL

MUSICIAN'S PICKUP

All Shall Fall ／2009

イモータルは凍てつくノルディック・ブラック・メタル界における、強烈な輝きを放つ星のひとつだ。アバスが参加した最後のアルバムのタイトル曲には、悪魔のような叫び、戦場を想起させるリフ、止むことのないブラスト・ビート、アコースティック・ギターによる台風の目のような静けさ……といった、俺の愛するすべてが組み合わさっている。この凍えるような鎮魂歌を聴けば、永遠に“Blashyrkh”の住人でいたいと思うことだろう。税金が安くなるという理由以外でもな！　（エルレンド・イェルヴィック／HJELVIK）

57 Through Glass

STONE SOUR

Come What (ever) May ／2006

考え抜かれて作られた本曲は、コリィ・テイラーのもうひとつのバンドによるクラシック・ロックのラジオ向きなバラードだ。ドラマチックなサビとヴォーカルの熱量（これはまさに我々がコリィに望むものである）により、葬送歌にはなっていない。富、音楽産業、表面的な名声といったものについて触れていて、マスクを被ったこの男が持つまた別の顔を示している。

58 Weight

ISIS

Oceanic ／2002

もし『オーシャニック』が物憂げで遊牧民的なポスト・ロックの新たな波を大々的に取り入れていたとするなら、この曲は最もその変化を感じさせるナンバーだと言える。約11分にも及ぶ音の旅は聴く者を陶酔させ、デリケートな音色は心を解放させてくれるだろう。この曲はほかのどんなものよりも漂流する船を灯すかがり火となり、進むべき方向を示してくれるはずだ。

59 Hammer Of The North

MUSICIAN'S PICKUP

GRAND MAGUS

Hammer Of The North ／ 2010

グランド・メイガスは俺のフェイバリット・バンドのひとつで、この曲は確実に彼らのトップ5と呼べるものだろう。[Gimmeradio.com]でやっている俺のラジオ番組のタイトルは、実はこの曲からいただいたものでさ。彼らと何度かツアーをしたことがあって、バンドがこの曲で出番を終えてもシンガロングはずっと続いていて、本当にアメイジングだった。俺はそれを見ていつも鳥肌が立っていたよ。 (ヨハン・ヘッグ／アモン・アマース)

60 In The Stream Of Commerce

CAVE IN

Jupiter ／ 2000

世紀が変わろうとしていた頃、ハードコアの世界は水面下でいくつもの驚くべき変革を迎えていおり、ケイヴ・インは輝かしいプログレッシブの領域への飛躍的な変容を遂げていた。本曲は『ジュピター』のなかでも特に白眉で、この強烈なリフはまるで放たれた爆弾のように炸裂し、高揚感に満ちたエモーショナルさをサウンドのキャンバス全体にもたらしている。

61 A Skin For Dancing In

AKERCOCKE

The Goat Of Mendes ／ 2001

アンダー・カルチャー界、そして当時盛んだったイギリスのアンダーグラウンド・シーンの救世主として出てきたバンドだ。彼らはロンドンの明るく愛想のいい悪魔崇拝主義者たちで、凶暴さと貴族主義的な世界観とともに、先人たちが作りあげてきたものに敬意を表しながら、ブラック／デスが入り混じる扇情的なサウンドを創作している。エクストリーム・メタルの世界に彼らがもたらしたものは計り知れない。

62 Ghost Of Perdition

MUSICIAN'S PICKUP

OPETH

Ghost Reveries ／ 2005

オーペスはとてもユニークなバンドで、彼らは"アーティストとしての音楽的な魅力"で催眠術をかけることにかけてはピカイチなの。この曲に飽きることはないし、私の心を惹きつけ続けているから。ミカエル・オーカーフェルトのクリーンな歌唱は素晴らしく、さらにガテラルの高いクオリティも持っている。これからもずっと私の好きな楽曲のひとつね。 (シモーネ・シモンズ／エピカ)

63 Bring Me To Life

EVANESCENCE

Fallen ／ 2003

エヴァネッセンスはロック界最後のスーパー・スター・バンドのひとつであり、「ブリング・ミー・トゥ・ライフ」はエイミー・リーをフロント・ウーマンの新たなアイコンとして世に送り出した曲である。アーム・ソックスを身につけたゴス系キッズ世代全員の共通曲であり、キャッチーなラップのヴァースによってバギー・ジーンズを脱ぎたがらないニュー・メタラーたちの心もつかんだのだった。

64 Empire Falls

PRIMORDIAL

To The Nameless Dead ／ 2007

何世紀にも及ぶ歴史に大きく背き、そして数十年のメタルの歴史をも破り捨て、大きな火傷を喰らわせるような熱量とともに彼らはシーンにやってきた。アイルランドのPRIMORDIALはブラック・メタルというジャンルを[Where is the fighting man? / Am I He?]というひと節だけで超越し、世界中のフェスティバルでコール＆レスポンスを繰り広げてオーディエンスを扇動するのである。

65 Trollhammaren

FINNTROLL

Trollhammaren ／ 2004

2000年代、フォーク・メタルの波がまだ小さかった頃、フィントロールがやってきて名曲を生み出した。おとぎ話のようなイントロにオープニングの喊声、そしてサビの"Trollhammaren!"というチャントは、まるでブレーキが壊れたレーシング・カーのような勢い。それは甲高いブリッジで一瞬止まるに過ぎない。ラウドで滑稽な、まるで大型のビール・ジョッキを持ち上げて声を荒げているような気分にさせてくれる1曲だ。

66 Death To All But Metal

STEEL PANTHER

Feel The Steel ／ 2009

ヘア・スプレーで固めた長髪を携えサンセット・ストッリップを闊歩していたロサンゼルスのカバー・バンド、スティール・パンサーは、次第に我々が想像もしていなかったほどのパロディ的なバンドになっていった。80年代のシーンの揶揄や若干の女性蔑視を織り交ぜながらも、パーティの雰囲気を携えた本曲は、周囲の想定を裏切りヒット・チューンとなっていく。

67 Am Kreuz

MUSICIAN'S PICKUP

AMENRA

Mass Ⅲ ／ 2005

この曲は、彼らが得意とするスローなリズムとダイナミクスのコントラストを用いたグレイトな代表曲よ。催眠術のようなテクスチャーから始まり、徐々に壮大なエンディングに向かっていくんだけど、クライマックスでコリン・H・ヴァン・エックフートのヘヴィなヴォーカルとデリケートなメロディが芸術的に寄り添い合い、美しさとカタルシスを作り出していくの。それは『Mass Ⅲ』のフェイバリットな瞬間となっているわ。　（A.A. ウィリアムズ）

68 Two-Way Mirror

LOATHE

I Let It In And It Took Everything ／ 2020

彼らリヴァプールの4人組は、そのドラマチックなライヴや強烈なエネルギーで、テクニカル・メタル～プログレ・シーンでのひとつのブームを起こしている。しかしこの曲は、そういったサウンドとは別ものでもある。アンビエントなサウンドスケープの導入はデフトーンズを想起させ、新たな世界感を見せつける。チノ・モレノ自身も、この曲に納得しているようだ。

69 Needled 24/7

CHILDREN OF BODOM

Hate Crew Deathroll ／ 2003

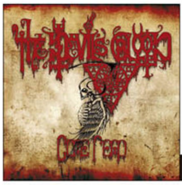
我々がアレキシ・ライホを失ったとき、神はあまりにも早く彼を天に連れ去ったと感じたが、彼のスピリットはその音楽に宿り続けている。ボドムの4枚目のアルバムでも抜きん出た本曲は、まるでギターが熔解するほどのキラー・チューンであり、バンドの最凶な“ファック・ユー”アティテュードを感じさせてくれる。まさに、我々のワイルド・チャイルドが遺してくれた遺産なのだ。

70 The New Black

EVERY TIME I DIE

Gutter Phenomenon ／ 2005

多くのメタルコア・バンドがイン・フレイムスの昔のアルバムをコピーしている一方で、エヴリタイム・アイ・ダイはメタリックなハードコアとして新たなフレイバーをもたらそうとしていた。その大ブレイクのきっかけとなった『Gutter Phenomenon』は、彼らの代名詞である荒々しくアシッドなパンク・ロックをフィーチャーするが、究極的なまでにダンサブルな本曲も収録。グルーヴィなリフによる「The New Black」は、“2000年代最もクールだったバンドのひとつ“による“最もクールな曲のひとつ“として今日も輝きを放っている。



71 River Of Gold

THE DEVIL'S BLOOD

Come Reap ／ 2008

The Devil's Bloodの、非の打ちどころのないデビューEPから放たれる本曲には、悪魔的な世界観が詰め込まれており、その世界を巡りたいという欲求に駆り立てられる。心臓を踊らせるベース・ラインから鮮烈なギター・リフまで、それらのすべてが60年代後半のロックの系譜にあり、バンドはこの音楽で新たなカルトの波を起こそうとしていた。

72 Wolf Totem

MUSICIAN'S PICKUP

THE HU

The Gereg ／ 2019

この曲は、モンゴルの広大な自然を思い起こさせてくれました。喉歌は荒々しさとパワーのレイヤーを作りだし、そこに加わるトラディショナルな楽器は、馬や鳥が生み出すノイズをも想起させるんです。まさに、モンゴルの大地が歌っているかのようですよね！　（midori ／ LOVEBITES）

73 The Final Episode (Let's Change The Channel)

ASKING ALEXANDRIA

Stand Up And Scream ／ 2009

この曲はベン(g)が初めてバンドのために書いた曲のひとつだった。*“サビのコード進行は以前のバンドで作ったもので、ジェイムズ(d)とダニー（vo)とアイディアを重ねていってさ”*とベン。本シングルをリリースしたのちバンドは大ブレイクを果たし、*“この曲は俺らのキャリアから消えることはないだろう”*と続ける。アリーナ級バンドに成長した今も、「The Final Episode ～」は昔からのファンにとってはずせない楽曲となっている。

74 Pisces

JINJER

King Of Everything ／ 2016

アンダー・グラウンド・シーン期待の星であったウクライナ出身のジンジャーは、激震するジェント感溢れる最高にへヴィなこの曲でメタルの梯子を勢いよく駆け上がり、シーンの未来を担うホープになっていった。叙情性と強烈なデス・ヴォイス、高度な演奏テクニックが共存するこの楽曲は、Spotifyにて自らが持つ楽曲の3倍以上のストリーミング数を誇ってもいる。

75 In Between

BEARTOOTH

Disgusting ／ 2014

精神的な病によるトラブルを原因にATTACK ATTACK!と袂を分かったカレブ・ショモは、音楽界と距離を取りながらも、このことについてのたくさんの曲を書き溜めていた。ハードロック、ニュー・メタル、ポップ・パンクなどの間に位置する「In Between」は、鬱病にフォーカスした楽曲ではあるものの、そこには希望へのメッセージも込められているのだ。

76 Ghost Division

SABATON

The Art Of War ／ 2008

キーボードのリフによってドライブするこのパワー・メタルのアンセムは、まるで90年代のキザなテクノ・クラブで作られたかのようでもある。ビッグなフック、シリアスなエネルギー、そしてたっぷりのクサさといったさまざまな要素が完璧に混ざり合い、彼らをグレイトなバンドへと誘った。そう、「ゴースト・ディヴィジョン」はサバトンをメタルの表舞台に送り込んだ曲なのだ。

77 I Will Be Heard

HATEBREED

Perseverance ／ 2002

ラウドでスラッシィなヘイトブリードのリフと、ジェイミー・ジャスタによる反抗的で胸を突く好戦的な歌詞がくり広げられる楽曲を聴けば、リスナーたちは目の前のテーブルをひっくり返したくなるのだ。ピットを掻き回すこの楽曲はヘイトブリードの絶対的なアンセムであり、それは20年が経過した現在でも変わらない。冒頭のひと節を聴いても怒鳴り声を上げないように注意してほしい……できるものならね。

78 Death Reflects Us

BEASTMILK

Climax ／ 2013

残響とともに刻み込まれるオープニング・リフは、警告を鳴らすクラクションであり、気分をアゲてくれる目覚めのコールでもある。彼らは「Death Reflects Us」を引っ提げて2010年代にデビューし、その後バンドを広く知らしめるための土台を作った。滅亡の日を告げるこのアンセムは我々に神の啓示を伝え、アンダーグラウンドで今日も沸き起こり続けるポストパンクの巨大な波を解き放つ。

79 Head Crusher

MEGADETH

Endgame ／ 2009

メガデスは『エンドゲーム』にて、当時におけるベストなアルバムを作ったのみならず、ここ20年間を見渡しても最高のスラッシュ・アルバムと言える1枚を生み出したのだ。リード・シングル「ヘッド・クラッシャー」はデイヴ・ムステインの強烈なギター、混沌、王者の風格を見せつけ、ムステインとそのバンドに第二の黄金期をもたらせた。

80 Funeral

MYRKUR

Mareridt ／ 2017

ミルクルは『Mareridt』によって、自身がノルウェーのブラック・メタルにおけるエクストリーム・クイーンであることを示し、同時に絶世のドリーム・ポップとトラディショナルなフォーク音楽をも持ち込んだ。チェルシー・ウルフとのコラボレーションによるこの楽曲はアルバムでの最高潮であり、記憶に突き刺さる氷のような冷たさを持ったドゥーミィな聖歌となったのだった。

81 Banshee (Ghost Fame)

LETLIVE

The Blackest Beautiful ／ 2013

この曲を聴いた瞬間、LETLIVEが同世代最大のバンドのように思えてくることだろう。このエモーショナルで強烈な本シングルは、パンク・ロックの獰猛さとフラメンコのビートをマッシュアップさせ、ジェイソン・アーロン・バトラーによる優雅なヴォーカルが加わり、2013年を代表する名曲のひとつとなった。名誉のためにつけ加えると、彼らは以降も素晴らしい仕事をやり続けている。

82 Ţesarul De Lumini

NEGURĂ BUNGET

Om ／ 2006

NEGURĂのホームであるトランシルバニア（ルーマニア中央部から北西部）の民族文化に迫る「Ţesarul De Lumini」は、ブラック・メタル・シーン全体およびバンドの両者の目を覚ます曲となった。眩い異次元の領域へのアクセスを可能とさせる、鼓動の高まりが止むことのない13分間は、トレモロ・ピッキングのリフレインと永遠に続くようなエコーによって官能的なクライマックスを迎える。

83 Bounded By Allegiance

MUSICIAN'S PICKUP

ENSLAVED

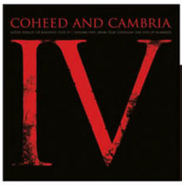
Isa ／ 2004

『Isa』は俺が初めて聴いたエンスレイヴドのアルバムで、この曲を大学の寮でくり返し何度も聴いたのを覚えているよ。サイコーなナンバーで、何度もケイケイな瞬間が思い浮かんでくるんだ。まさに"Feasting 'til the end of time!／最期までパーティする（※歌詞からの引用）"って感じだね。

（ベンジャミン・ハッチャーソン／KHEMMIS）

84 Welcome Home

COHEED AND CAMBRIA



Good Apollo I'm Burning Star IV... ／ 2005

この曲をフロントマンのクラウディオ・サンチェスが実家のベッドルームで書いたとき、彼はまだ別の仕事をしながらバンド活動をしていた。*“リフが思いつき、コード進行が浮かんだとき、俺はあまりにも興奮していた。しかし母さんが洗濯物を取りに部屋に入ってきてさ！”*と、当時のことを振り返る。

本曲はプログレ、メタル、エモ系リスナーの心に訴え、彼らが同世代のバンドのなかでも抜きん出た存在であることを示した。*“俺らを表わす曲だと直感的に感じたし、この曲はこれまで何度も特別な瞬間を生んできてくれた”*と続ける。

そのとおり、バンドを代表するシングル曲となり、Spotifyでの“7000万回再生超え”は時代を超越するアンセムになったことを証明している。*“この曲は、当時俺がつき合っていた女性との終わろうとしていた関係を歌ったものだった。いいときも悪いときもたくさんあって、この曲は彼女への複雑なラブレターだったんだ”*と告白するクラウディオであるが、その女性がのちに彼の妻となったことも補足しておこう。

85 Cochise

AUDIOSLAVE

Audioslave ／ 2002

レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンのフロントマン、ザック・デ・ラ・ロチャを除くメンバー全員をフィーチャーしていながらも、オーディオスレイヴはまったく別のビーストである。政治的扇動を一旦やめ、サウンドガーデンのクリス・コーネルとチームを組み、ときを超えたロック・アンセムたちを収めた3枚のアルバムを作り出した。「Cochise」は彼ら自身が世界にその存在をアナウンスした壮大な楽曲だ。

86 Love?

STRAPPING YOUNG LAD

Alien ／ 2005

彼らのデビュー・アルバムが示唆していたように、ストラッピング・ヤング・ラッドは、まごうことなきヘヴィなバンドだった。しかし「ラヴ？」も、奇妙なまでに心に響く曲でもある。イエスの「シティ・オブ・ラヴ」からアイディアを拝借したのが明白なサビでは、デヴィン・タウンゼンドのオペラのようなヴォーカルが突風のようなブラスト・ビートに乗って頂点まで上昇し、クライシスのようなサウンドはカタルシスと美しささえ感じさせる。

87 Abysmal Agony

VENOM PRISON

Animus ／ 2016

“Sane Duali-teeeeeeeeh!”巨大でゴロゴロと鳴るグルーヴとリフは、まるでチェーンソーによって生み出されたものだと錯覚するほどだ。VENOM PRISONはこの衝撃的なシングルとともにシーンに現われ、UKのデス・メタル・シーンをスクリームしながら掻き乱し、輝かしい未来へとバンドを蹴り飛ばして“メタル勢力図”にて存在感を放つこととなった。

88 Battle Metal

MUSICIAN'S PICKUP

TURISAS

Battle Metal ／ 2004

シーンに登場してきたばかりのバンドが、ジャンルを定義づけたりスタイルを確定させることは滅多にできない。しかしチュリサスは『バトル・メタル』でそれをやってのけたんだ。トランペットに導かれる壮大なイントロ、そこに続く群衆による喊声のサビは、何かにチャレンジするときに自分を鼓舞するための、パーフェクトなサウンドトラックとなるだろうさ。

（フレディー・リム／ソニック）

89 Halo

SOIL

Scars ／ 2001

もし、ある1曲で絶対的な存在になれたのならば、その後はいくらでも適当やることができたはず。彼らは「Halo」にて、パンテラ級のグルーヴをニュー・メタルのテンプレートに取り込み"喝"を入れることで、クラブにおける殿堂入り的ロック・アンセムを生み出したのだった。もちろんバンドはその後も強烈な楽曲を発し続けているのだが。

90 Cry Of The Black Birds

AMON AMARTH

With Oden On Our Side ／ 2006

2008年のアルバム『トワイライト・オブ・ザ・サンダー・ゴッド』は、アモン・アマースが疑う余地のないバイキング・メタルの王者であることを示したかもしれない。しかし『ウィズ・オーディン・オン・アワ・サイド』によって、彼らはメタル界での認知度をさらに高め、急速に進む抑えきれないモンスターであることを知らしめることになる。まるで斧を振り下ろすかのような衝撃的な1枚だった。

91 We Will Rise

ARCH ENEMY

Anthems Of Rebellion ／ 2003

ヨハン・リーヴァの脱退を受けたアンジェラ・ゴソウの加入は、彼らをメタル界のさらなる高みへ連れていった。*"アンジェラと制作した『ウェイジズ・オブ・シン』は大きなインパクトだけでなく、俺らにも変化をもたらしてくれたよ。その結果迎えたのはキャリア初のツアー地獄で、マネージメントから「新アルバムを考えろ」と言われたときはある意味ショックだった。それでもツアーの合間に曲を書き、そこで「ウィ・ウィル・ライズ」が生まれたんだ"*とマイケルは振り返る。

『ウェイジズ・オブ・シン』に続く作品として、彼らには次章を切り開く強力な楽曲が必要だった。作曲の過程について、マイケルはつけ加える。*"ライヴ映えするアンセムが必要だったんだ。クリスはいくつかのリフとメインのテーマを持ってきてくれて、俺はちょっとしたアイディアを加えてアレンジをしていった。そしてツアーによって自信をつけ、アンジェラは特に見違えるほどだったよ。新しいことにチャレンジすることに興奮していて、「ウィ・ウィル・ライズ」はまさにそんな曲だったね"*。

レーベルはこの曲がヒットすると確信し、『アンセムズ・オブ・リベリオン』からのリード・シングルにした。ビデオ・クリップは大きなインパクトを生み、『MTV』や『Kerrang! TV』といった主要な番組で度重なるエアプレイを獲得し、復活した人気番組『ヘッドバンガーズ・ボール』でもフィーチャーされる。本曲により『アンセムズ〜』は彼らの代表作となり、バンドは新たな次元での成功を手にすることとなった。*"このアルバムを作って以降、ライヴでこの曲をプレイしなかったことはないと思う。それは今後も変わらないだろうな"*とマイケルは言う。

92 Progenies Of The Great Apocalypse

MUSICIAN'S PICKUP

DIMMU BORGIR

Death Cult Armageddon／2003

稲妻のようなリフによるマッドネスが、オーケストラ・サウンドとシャグラットによる独特なヴォーカルと混ざり合い、聴く者の意識を即座に惹きつけるんだ。当時彼らはシンフォニック・デスの未来を作り、それは現在も続いているよ。ほかにもMVでは映画の撮影技法を導入し、それは後続バンドに影響を与えたよね。"Once and for aaaall!"のクレイジーなエンディングは真のクラシックだ！　(マウリツィオ・イアコノ／カタクリズム)

93 Blodtørst

KVELERTAK

Kvelertak／2010

トリプル・ギター編成を武器にした彼らならではの疾走感ある演奏が特に際立つ楽曲だ。例えノルウェー語を知らなくても、オーディエンスが"Blod！Tørst!"と叫び一団となる様子が思い浮かぶことだろう。ロック、パンク、メタルをブレンドした無二の異色的爆音は、確実にファンを集めている､昨年リリースしたアルバムでは初めて英語の歌詞も披露するなど、要チェックなバンドであることは間違いない。

94 No Lives Matter

BODY COUNT

Bloodlust／2017

アイス・Tによる情熱的な語りで始まる「No Lives Matter」は、人種差別、警察による暴力、市民の不安といった社会問題に対する鋭い見解を披露している。もちろんその歌詞は、モンスターのようなリフ群に支えられながら、ボディ・カウントがラップ・メタル界の上位に君臨することの証明でもあるだろう。

95 Bland Street Bloom

SIKTH

Death Of A Dead Day／2006

もしシクスが2006年ではなく2016年に『デス・オブ・ザ・デッド・デイ』をリリースしていたら、どれほどビッグなバンドになっていただろうか？　その答えはわからないが、21世紀のUKメタルのなかで最も影響力のある彼らは、無差別で熱狂的かつジャンルを超越したこのアルバムでのみならず、常に陽の当たる場所にい続けてきた。今日でも巨大なサウンドは健在である。

96 Sex Magick

TWIN TEMPLE

Twin Temple(Bring You Their...)／2018

「Sex Magick」は、ここ10年間における稀に見る優れたアルバムの中心的かつ抗し難い魅力に満ちた楽曲のひとつである。アレクサンドラ・ジェイムズの催眠術のようなヴォーカルにはどことなく破滅的で、なおかつ幻想的なポップさが感じられる、悪魔はこのアルバムで極上の楽曲をそろえて、ドゥー・ワップがメタルと同じくらい最高であることを証明した。

97 The Hand That Feeds

NINE INCH NAILS

With Teeth ／ 2005

トレント・レズナーはリハビリを抜け出して、ディスコに行ったのだろうか？　デリケートかつ歪んだアルバム『ザ・フラジャイル』以降、最初に届けられた新たな音楽は、リスナーにとってサプライズとなったかもしれない。しかしこのアップビートでシンセ・ソロを擁しダンス・フロアをオーディエンスで埋め尽くす楽曲は、彼の最大のヒット・シングルとなり、その後のキャリア第二章へと突入していく大きなきっかけとなった。

98 Funeralopolis

ELECTRIC WIZARD

MUSICIAN'S PICKUP

Dopethrone ／ 2000

この曲は徐々に力を集め、嵐のように巨大化していき、自暴自棄なフィーリングは怒りや破壊へと変化していくんだ。ニヒリズムの観点から多くの意味を与え、俺の社会に対して感じているダークなフィーリングを正確に反映してくれてもいて。クライマックスはエンディングで、核弾頭が発射される際に発生するような電磁波的サウンドがバンドの音に混ざって聴こえるところだよ。（ジュン・ヒズ／オランシ・パズズ）

99 Ótta

SÓLSTAFIR

Ótta ／ 2014

「Ótta」を始めとした『Ótta』での眩い閃光のようなギターは、ときに荒涼としたサウンドを生み、また満ち欠けを表現するリフはまるで自分が遠き昔に置き去られたような孤独感をも感じさせてくれる。これら楽曲は、2014年の最もマジカルで変化に満ちた経験を作り出し、聴く者の心の奥深いところに刻み込まれたことだろう。ブラック・メタルの幅を広げる作品とも解釈できる。

100 Bleeding Mascara

ATREYU

The Curse ／ 2004

ダン＆トラヴィスの咆哮するギターとアレックス・ヴァルカッツァスの“Gooooooooooooooooooo!”という怒号によって始まるこの曲は、まさに愛と憎悪の瞬間を捉えている。当時（2000年代前中盤）のUSメタルコアは、イギリスを侵略しニュー・メタルを猛追中だった。このオレンジ・カウンティ出身のバンドはそのシーンにて、馴染みやすいメロディックなサビとともにゴシックな歌詞の世界を見事に表現していた。

グレイテスト・ソングスTOP100《2000年以降篇》

THE 100 GREATEST SONGS OF THE CENTURY (ER... SO FAR)

英『METAL HAMMER』が発表した「グレイテスト・ソングスTOP100《2000年以降篇》」、いかがでしたでしょうか？本誌『Vol.5（2021年3月発売号）』での“2020年ベスト・アルバム”企画同様、興味深いランキング＆選曲だったとも言えそうですね。

やはり日本市場的感覚で見ると“この順位の根拠は！？”、“なぜこの曲なんだ？”、“そもそもこれはメタル認識していなかった……”というものもありそうですが（笑）、ある意味では視野の広い欧米ファンの嗜好を理解し、現在進行形で人気のある1曲を知るヒントになったかと思います。

そして何より、改めてお気に入りの曲を見つけるきっかけになれば幸いです。どのバンドにも、見逃していた名曲はまだまだあるはずだから！

▲2020年発売のアルバムをランクづけした「THE BEST ALBUMS OF 2020から考察する日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点」（『METAL HAMMER JAPAN Vol.5』掲載）。日本側識者による比較・考察によって、日英の違いを知ることもできるぞ。

METAL HAMMER JAPAN

Text by Takahide"THUNDER"Okami
Translation by Tommy Morly

ヘヴィの流儀 #3

Paul Gilbert

ポール・ギルバート

その卓越したプレイにて、1980 〜 90 年代を代表するギター・ヒーローとなったポール・ギルバートだが、ソロ名義での作品ではテクニックもさることながら各楽器のメロディがハミングし合う楽曲を作り続けており、発表したばかりのインスト作『ウェアウルヴズ・オブ・ポートランド』でも、歌心溢れるギターを響かせている。ただし、彼の芯にはレーサー X 〜 MR.BIG で轟かせたヘヴィなギター愛が溢れていることも忘れてはいけない。今回はそんなポールに、自身が考えるヘヴィなサウンドについて語ってもらおう。実に多様な音楽からインスパイアを受けてきたからこそ、ハードなプレイからメロディアスなフレーズまで、自由自在に生み出せるということがわかるだろう。

Guitar players may have some expectations like "OK, can you still play fast?". But I've been really fortunate to try so many things in my style and people have accepted them.

僕が作る音楽は、少なからずギタリストたちに"昔と同じぐらい速く弾けるのか？"と期待されていると思う。でも僕は幸運なことに今までさまざまなスタイルにチャレンジしていて、それを受け入れられてきた。

誰しも子供のときに聴いていたものから何かしら拝借するものさ（笑）。

――『ウェアウルヴズ・オブ・ポートランド』でも聴けるように、現在はとてもハッピーなギター・ミュージックを届けてくれるポールですが、10 代の頃は、やはり"人よりもハードに、人よりもエクストリームに"という気持ちを持っていたのでは？

　少しはあったと思うな。特にスネアの爆発する感じとか、ギターがヘヴィに刻む 80 年代のサウンドが大好きだったね。でもビートルズみたいにハーモニーに溢れた音楽も好きだったから、僕の耳はもっとメロディックなものに向いていたかも。メタリカはグレイトなメロディもあるけど、彼らが出てきてから 1 コードものが頻出してきた。で

スピード感ゆえの興奮が得られるし、速さにはエキサイティングなエネルギーが宿っている。

もそれを悪いことと思わないし、ああいうスタイルには合っていたと思う。バート・バカラック（※作曲家／ピアニスト）の曲をメタリカみたいにアレンジするのはさすがに無理だからね（笑）。

——ハハハ、確かに。

そう、だから半音ずつズラして不協和音を作るような、リフ重視のサウンドっていうのは僕には向いていなかった。スラッシュやデス、ブラックといったメタルはクリエイティブでヘヴィなテクスチャーはあるけど、ハーモニーという観点では僕が好きな類ではなかったんだ。それは僕がピアニストによって作曲された70年代のポップ・ソングを聴いて育ってきたからというのもあるだろうね。

——今挙がったバート・バカラックやビートルズ、そしてジミ・ヘンドリックスやクラシック音楽といった幅広いルーツを持っているあなたですから、当時、周辺のメタル・プレイヤーたちと比べ“自分はより広いバックグラウンドを持っているんだな”と感じることも？

それはなかったかな。例えばトニー・マカパインの初期のアルバムを聴いてみると、彼はハーモニーに関して明らかに僕より多くのことを知っていたのがわかるよ。そもそも彼はクラシック・ピアノをプレイしていたからね。レーサーXの「イントゥ・ザ・ナイト」（『ストリート・リーサル』1986年）のブリッジにはアルペジオ・パートがあるけど、これはもともとチープ・トリックの「永遠のラヴ・ソング」のBメロから頂戴しているし、MR.BIGの「トゥ・ビー・ウィズ・ユー」なんて同曲のサビをかなり意識しているよね。「ファイアー・オブ・ロック」（レーサーX『テクニカル・ディフィカルティーズ』1999年）のヴァースなんてトッド・ラングレンの「友達でいさせて」からコードをもらっている。誰しも子供のときに聴いていたものから何かしら拝借するものさ（笑）。

——GIT在学時代など、この音はすごいと思っていたハード／メタル系バンドは？

ラウドネスは特に好きだったね。『Disillusion ～撃剣霊化～』（1984年）と『Devil Soldier ～戦慄の奇跡～』（1982年）はたまらなく好きなアルバムだったし、シングルの「Road Racer」も素晴らしかったね。「Crazy Doctor」は当然はずせないし、昔のアルバムには僕の好きなものが詰まっていたよ。

——あなたのラウドネス好きは有名ですね。

ほかにはアクセプトもカッコよかったな。「レストレス・アンド・ワイルド」のリフなんて最強にパワフルだし、「ファスト・アズ・ア・シャーク」のツーバスには頭が吹っ飛ぶような気分になったさ。イングヴェイが出てきたとき、彼のあの速いピッキングには興奮させられたね。クイーンズライチの『オペレーション：マインドクライム』なんかもクールだったよね。

——そういった先人の作品があるなかで、どのような音を作れば個性が出せると考えていましたか？

自分がユニークであることにはこだわらなかったよ（笑）。そういうのって結果としてついてくるものだからさ。より上手くなることだけを考えていたな。

——なるほど。

当時の僕にとっては、曲を書くことが大きな課題だった。まだコツをつかんでいなくて、思うように曲が書けなかった気がするよ。今ならある程度技術が身についていて、メロディからスタートすることでかなり簡単に曲が作れるようになった気がするね。歌詞やメロディを出発点とするトラディショナルなやり方って、実は軽んじることのできない優れた方法だと思う。レーサーXなんか特にそうだけど、複雑に入り組んだギター・リフにヴォーカルを詰め込むみたいなやり方だと、シンガーにはかなり難しい要求をすることになってしまう。そのため一曲に2ヵ月かけたこともあって、あまりお薦めできないし、僕はこのことに気づくまで長い年月がかかってしまったから（笑）。

——当時のあなたを始め、テクニカルかつファストなギター・プレイでスリリングさや衝撃性を実現する人がいる一方、ブラック・サバスや90年代のメタリカのように、スロー～ミドル・テンポなグルーヴやダイナミクスでヘヴィなサウンドを作るバンドもいます。スピード・プレイとヘヴィさとの関係性について、あなたの考えを聞かせてください。

もちろんスローな曲のほうが、かなりヘヴィなものになり得るよね。メタリカの音楽を聴くと、僕は自然とエア・ドラムを叩いてしまうな。彼らのドラム・パターンってときにシンプルだったりするけど、スペースを作り出すことでビッグなサウンドを生み出している。ピンク・フロイドの音楽はアリーナ・クラスの会場でプレイすることを前提としていて、基本的にスローなんだけどバス・ドラムがとてつもなくデカく聴こえてくる。そう聴かせるだけのスペースがあるんだよ。

——その音を聴かせる空間が重要になってくるワケですね。

そう。これがひたすらツーバスを踏むような曲だと、どうしてもサウンドが小さくなってしまう。スローであるほどギターやドラムのテクスチャーを自由自在に作り込むことができて、それが巨大なサウンドにつながっていく。スネアで爆発するようなサウンドを作りたかったら、爆発音を最後まで聴かせるような時間が必要ってことだね。速い曲はサウンドをタイトにさせる必要があって、それにともない何かを失ってしまうこともあるから。

——逆に、速い曲ならではの激しさもありますよね。

そのスピード感ゆえの興奮が得られるし、速さにはエキサイティングなエネルギーが宿っている。ヘヴィネスは失うかもしれないけど、その代わりエネルギーを得ているという表現が正しいのかもしれないね。

ミック・マーズのプレイは本当にグレイトでどうして僕にはあの音が出せないんだろう、と。

——MR.BIG時代からあなたのギター・サウンドは明瞭で、歪み成分もさほど強くはありません。歪み量とメタル的迫力ということでは？

楽器が作り出すフィーリングは、歪みによって快適な方向に変化することが多いと思うな。僕だって何種類ものディストーションを使っているし、片や明瞭なトーンもも

最近はメロディやグルーヴに焦点が移っていて、それは高音が聴き取れなくなったことに起因しているのかも。

ちろん好きさ。ただ僕は長年の音楽活動から聴力の多くを失っているので、どっちがいいのか答えがわからなくなっているのも事実だ。実際、1kHz を超えるとほとんど聴こえなくて（苦笑）。

――ある意味、職業病とも言えますよね……。

一般的な人に比べて、ミッド・レンジ以下のところが相対的に強く聴こえてしまうんだ。僕が聴こえない周波帯で何が起きているのか興味があるけど、僕にはもうそれを感じることができない。そういった意味で、サウンドによって得られるフィーリングがみんなと異なっている可能性も否定はできなくてね。

――それでも、楽曲そのものの良さは変わらないと思います。MR.BIG はなによりも曲の良さを追求したバンドでしたが、音質面で参考にしたバンドはいましたか？

モトリー・クルーに嫉妬していたのを覚えている（笑）。『ドクター・フィールグッド』（1989 年）を聴いて“うわ、ドラムが信じられないくらい強烈だ！”と思ったよ。モトリー・クルーって複雑なことができるタイプじゃなかったけど、僕はミック・マーズが好きだった。ライヴで観た彼のプレイは本当にグレイトで、どうして僕にはあの音が出せないんだろうと思ったものさ。今でも彼のサウンドは出せないし、どうしたら近付けるのか謎のままだよ（笑）。

――「アディクテッド・トゥ・ザット・ラッシュ」、「ダディ、ブラザー、ラヴァー、リトル・ボーイ」、「コロラド・ブルドッグ」などは、スピーディさによる激しさとキャッチーな曲調という両立を誇った楽曲とも言えます。こういった雰囲気には、やはり無用な低音感は加えづらくもありますよね。

あの頃のアルバムをミキシングしてくれたケビン・エルソンには、みんなで違うことばかり求めてしまい悪いことをしたよ……ビリーはベースを、僕はギターを、エリックはヴォーカルを欲しがってさ。パットといえば理性的な人だったから、全体の収まりが良ければそれでいいという感じだったけど（笑）。最終的には僕らもケビンを信頼して、彼がベストだと思う仕事をしてくれた。10 代の僕だったらもっとテクスチャーやイコライジングにこだわっていただろうけど、最近の僕はメロディやコード、グルーヴといったものに焦点が移っていて、それはハイエンドが聴き取れなくなったことに起因しているかもしれない。だからサウンドに関しては、何かしらの音が聴こえていればそれでハッピーくらいにハードルが下がってきているよね。

――大きくは明るい印象の楽曲が多いですが、ヘヴィさ、ダークさを意図的に狙って曲を書いたことはありますか？　例えば「トラップド・イン・トイランド」などがそうだったり？

僕も第一に思い浮かんだ曲だね。そもそもエリックは R&B やブルース、ポップス、ソウルをバックグラウンドとしていて、それをヘヴィでダークなものと結びつけるのは難しいんだ。エリックの声に合うものとなるとジャクソン５やオーティス・レディング、モータウンのようなサウンドで、彼はそういった洗練されたリズムの世界から来た人だから。

ツアーにはギタリストを招き僕がドラムを叩くというアイディアも生まれたくらい。

――さて、新作『ウェアウルヴズ・オブ・ポートランド』も、あなたらしいファットなメロディと技巧の両方が楽しめる作品になりましたね。

このアルバムを聴けば、僕がこの１年間どういった状態だったのかがわかってもらえるはずだ（笑）。特に一連の長いメロディを作れたことは自信になったよ。「アーギュメント・アバウト・パイ」はとても長いメロディでできていて、ビーチ・ボーイズの「神のみぞ知る」みたいな曲への憧れを形にできたくらいに思っている。あの曲ってどこまで続くんだ？と思うくらい長くて、それでいてアメイジングなメロディがポイントだよね。僕がメタルにどっぷりと浸かっていた頃なんて、例えば「イントゥ・ザ・ナイト」のメロディなんて、“Into the Night ～♪”ってだけじゃない（笑）。

――イヤイヤ、あの曲のメロディもいいですよ（笑）。本作はコロナの影響により、バンドでのレコーディングではなく、ほとんどをひとりで演奏したとのこと。現代はデータのやりとりなど、同一の場所にいずにしてレコーディングを行なうこともできますが、なぜ今回のような方法を採用したのでしょう？

どういう形にしたいのか、完全に把握できていたからね。誰に頼んだとしても、少なからず“それは僕がやりたかったのとちょっと違うんだけどなぁ……”と思うところが発生しただろうし、そうなるとプロセスが停滞して勢いを失っていたとも思うんだ。でも自分でやってしまえばそういっ

たことは避けられるので、かなりサクサクと作業が進められたよ。クリックに合わせてドラムを叩き、ギターを弾き、ベースを重ねたり、キーボードが必要だったら奥さんに頼むこともできたからさ。

――マルチ・プレイヤーとしての本領発揮の場でもあったという。

僕自身、ドラムを叩くのが好きだっていうのもあったよね。ずっとロック・ダウンだと運動不足にもなるけど、ドラムを叩くと程よいエクササイズになるんだ。あまりにも楽しかったから、ツアーに出ることがあったらギタリストを招き、僕はドラムを叩くなんていうアイディアも生まれたくらいだよ。

――このアルバムはギタリストだけの音楽ではなく、ジャンルレスに楽しめるものだと感じます。これまでの作品もそうですが、やはり“こういったファンに聴いてほしい”という想定は持たなかった？

僕が作る音楽って、少なからずギタリストたちに“さて、コイツはまだ昔と同じぐらい速く弾けるのか？”っていう期待を持って聴かれていると思う（笑）。そういったことに対する意識は少しくらい持っているかな。でも僕は幸運なことに今までさまざまなスタイルにチャレンジしていて、それを受け入れられてきた。その一方でシュレッド系のギタリストたちからは“今はスライドをプレイしているんだって？　一体何が起きたんだ？　ブルージィ過ぎるだろう！”と思われていることだろうね。

――そういう意見もあるとは思います。

すべての人を満足させるのって本当に難しいと思う。僕が大切にしているのは自分の頭のなかでメロディを創出させること、そしてそれを丁寧に取り出し曲として作り変えていくことで、リスナーたちは僕の頭のなかにあったものを聴いているんだ。これって僕ができる最大限におもしろくて誠実なことで、一度吐き出したメロディに対して何ができるか考えながらさまざまな楽器を使って整形していく。もちろんメロディが持つキャラクターに導かれていくこともあるけど、メタルとなるとヴォーカルがひたすらシャウトしていて、それはハミングするメロディとはちょっと別の次元のものかな。

――本アルバムはインスト作ですが、全篇でギターが歌っているように感じます。このギターが人間のハイ・トーンであれば、非常にメタルと言えるのかも（笑）。表題曲の中間部なんて、まるでディオのような中域～高域に味のある歌い上げげです。

それは絶対あるだろうね。だって僕はロニー・ジェイムス・ディオを愛しているから。先日はレインボーの「ロング・リブ・ロックン・ロール」を弾いていたんだけど、彼のメロディからはグッドなブルースを感じたよ。実際ギターで彼の歌うラインを弾いてみたら、どんどんブルースのリックが生まれてきたんだ。そういったことを頻繁にやっていて、ヴォーカルって実はクールなフレーズの宝庫だったりするんだよね。

――そういった解釈もあるんですね。ぜひ、そのプレイを生で聴きたいところです。コロナ禍が収まり万全の状態になった際には、新曲を含め、迫力のあるギター・サウンドを聴かせてください！

その日まで、このアルバムが間をつないでくれると嬉しいよ。僕の頭のなかを覗いてみるいい機会だと思ってほしいな！

◎16枚目となるソロ作は、ほとんどのパートをポールが演奏するインスト・アルバム！

『ウェアウルヴズ・オブ・ポートランド』
ソニー／ SICX-165

Text by Rich Hobson
Photo by Travis Shinn
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』347

LIFE LESSONS

RANDY BLYTHE

ラム・オブ・ゴッド ランディ・ブライズ

**2000年代以降の米ヘヴィメタル・シーンを切り開いてきた
ラム・オブ・ゴッドのフロントマンが、バンドの先頭に立つ心得、
アルコールとのつき合い方、芸術家として重要な感性について論じる。**

ヴァージニア州リッチモンドにて、パンク・ロックを愛するキッズのひとりとして90年代を過ごし、"ニュー・ウェイブ・オブ・アメリカン・ヘヴィ・メタル"ムーブメントの最前線にて新世紀を迎えたランディ・ブライズは、常に敵をコーナーに追い詰めてきた。ライヴ盤『Live In Richmond, Va』をリリースしたばかりであり、ラム・オブ・ゴッドとして四半世紀以上の歴史を経た現在、燃え盛るようなエネルギーと金言を持つこのフロントマンに、彼が過ごしてきた最も暗い時間についてたずねてみた。

フロントマンたちは作られるものではない、生まれるものだ。

人々はこの考えが好きじゃないかもしれないが、これは本当のことだと思っているぜ！　フロントマンは生まれ持った素質だけでやるもんじゃなく、俺は今だってオーディエンスとの関わり合いや歌うことについて、もっと鍛錬を重ねていかなくちゃならないと思っているからさ。

グレイトなフロントマンになるために必要なことって、グループの先頭に立ちたいと思う気持ちがどれだけあるかってこと、そして、どれだけバカになれるかってところなんだ。だから、それらが得意になるまで何度もくり返しやり続けてみな！

もちろんそういった性格かどうかってのも重要で、俺はバカになるのは任せろって感じだし、まわりの人間も"コイツはそういうことをやるヤツだ"っていう目で見てきたしさ。

ショウの規模が大きくなったからといって、それがイイものになったかどうかは別問題。

俺が初めて行った大きなコンサートは、ハンプトン・コロシアムで観たZZトップさ。かなりいいショウで、しかもバイク野郎たちは外で大麻を吸っていた。俺はそういうのをやったことがなくて、7年生（※中学1年生に相当）のガキにとってはかなりワイルドな経験だったね！

あの日のコンサートはまさにビッグなアリーナ・ロック・ショウという感じだったけど、もっとパンク・ロックにのめり込んでいくようになってからは、ZZトップの何倍も……とは言わないまでも、たった5ドルあればほかにもエキサイティングなショウが観られるってことに気づいたんだ。

若い頃の俺がインパクトを受けたライヴというと、サークル・ジャークスと7セカンズ、アグノスティック・フロントとザ・ヴァンダルス、バッド・ブレインズとリーウェイとC.O.Cで、これらを超えるライヴはまだ観たことがないね。どれも300人キャパくらいのハコだったけど、そこに行くってのは、ショウを観ること以上にあの頃興っていた完全にヤバいヤツらのコミュニティに入っていくってことだった。俺は完全にそういうヤツらの一員だったから！

音楽ってのはそれだけで恵みさ。

俺らが注目を集めてファンベースを獲得し始めると、若いバンドたちがフォローしてくるようになった。俺らがまだまだ下っ端だった頃、先輩バンドについていったみたいにね。練習場所の確保について“どうやったの？”みたいなことも聞かれたし、ツアーの組み方なんかの相談も受けるようになった。

まだまだ全然カネにならないツアーをしていた頃は、バンドがやれるってだけではしゃいでいたよ。ただ現代事情ともなると、大き過ぎて達成不可能……もはやバカみたいな目標が設定されることが多々あるようで、“バンドを組もうと思っているんだけど、音楽ビジネスで成功するためにアドバイスをくれないか？”みたいな質問を受けるようにもなった。俺としては“冗談でも言っているか⁉”という感じだったよ。そんなことをゴールにすべきじゃない。

誤解してほしくないんだけど、音楽を作ることでクレジットの請求が払えたり、バンドの連中と世界中を周れるのはとてもナイスなことだけど、俺らがバンドをやっているのは、音楽を作るというプロセスを愛しているからなんだ。それこそ本当の経験ってヤツだね。

俺らの古い曲には、たくさんのダークな面がある。

15～20年前に書いた歌詞を目にして、それが自分自身に向けたメッセージだったってことに気づくことがある。20年前の俺も問題を抱えながら暗闇をさまよっていて、それについて語っていたんだ。

最近『アッシズ・オヴ・ザ・ウェイク』(2004年)をまるごとプレイするチャンスがあって、ライヴで演奏したことのなかった曲を覚えるため、復習がてらに歌詞に目をとおしてさ。すると、歌詞を書いていた当時の気持ちがスッとよみがえってきたよ。

別に今になって賢くなったり、仏教におけるニルヴァーナの境地みたいなものに達したわけじゃないけど、最近だとネガティブな歌詞を書きつつも、ポジティブなことも意図的に入れてバランスを取ろうとしている。それってまさしく俺がそうやって人生を歩もうとしているってことなんだよ。

酒を断っていなかったら、今頃死んでいただろう。

かつての俺がヒドいアルコール中毒だったことは知られているけど、かれこれ10年以上一滴も呑んじゃいないんだ。

残念ながら、俺と同じような選択肢が取れず死んじまった連中もたくさん知っている。俺のなかに何が芽生えたのかはわからない。強い意思を持って選択できたからって自分が特別だと言っているわけじゃないし、誰よりもモラル的に強くなったわけでもないさ。だけど俺は本当にラッキーだったと思っているよ。俺を突き動かしてくれたのは“もし酒を止めなければ、死んでしまうだろう”という考えだったから。

ただし、ひと晩でできることじゃなかった。

俺は本当に長い間アルコール中毒と戦ってきて、完全に断ち切るまで４年半もかかった。

ツアー中のオーストラリアでのある朝、とても気分が悪く虚しく感じられたことがあってね。あの頃の俺はかなりグッドな状況で、俺らはメタリカとのツアーをしていた。これ以上ないくらいにサイコーで、銀行には充分金があったし個人的な生活面でもそんなに荒れるようなことはなかった。表面的にはすべてが順調に見えていたけど、どことなく恐ろしくて虚無な気持ちになったんだよ。そして、何か違うことにトライしなくちゃならない

“ON THE OUTSIDE EVERYTHING LOOKED GOOD, BUT THERE WAS THIS HORRIFIC VOID”

――表面的にはすべてが順調に見えていたが、
どことなく恐ろしくて虚無な気持ちになっていたんだ。

と気づいたんだ。

酒を呑むこと自体が悪いとはまったく思わないけど、俺の場合は何か問題があったと思うし、特に呑み方には見直すべきところがあったんだな。

人生は単なる二択の連続ってわけじゃないぜ。

最近のアメリカの状況を見るとわかるだろうけど、何もかもが分断されていて、妥結されることがほぼなくなってきているよね。人々はほかの視点からの意見に耳を傾けず、ソーシャル・メディアによって形成されたものをベースに考えようとしている。“YESかNOか”、“民主党か共和党か”、“青か赤か”といった二極分化のシステムに追いやられていて、議論したり意見を言うということがどんな次元からも失われている気がするよ。

もし、そういった論戦のリングで敵意むき出しの相手にコーナーまで追いつめられたら、ソイツはさらに極端な手段に出てくるだろうし、そうなったら最後、しっかりとした議論はできなくなる。

ただ、歳を重ねることで妥協することを学ぶこともあって、ラム・オブ・ゴッドもウマい形でやれるようになってきた。俺らは5人のまったく異なる野郎どもの集団だから、それは特に大切なことだったんだろうさ。

“俺ら”や“アイツら”ってのはあるべきじゃない。

旅をしていて身につけられる最も大事なことはモノの見方で、人間らしさに潜む普遍的なものに気がつくようになる。

俺は冷戦の時代に生まれた。それがどういうことかわかるか？　俺は子供ながらに“ソビエト連邦が放射能を浴びせてくる”と確信していたが、この漠然とした“他者”という概念を意識すると、今度はソイツらを人として考えなくなり、同じ人間であることさえ忘れてしまう。

ラム・オブ・ゴッドを始めるはるか前の俺はかなり手慣れた旅人で、一文無しの貧乏旅行者だった。自分自身を異なる文化にさらせるから旅行者になることが好きだったし、旅先で出会う人たちは着る服や肌の質感、食べ物だって異なっているけど、核の部分としてはみんな同じなんだ。それに今の自分の人生を生きられていることが、どれだけラッキーなことなのかを気づかせてくれたよ。

インターネットで目にするものではなく、自分が持っているものを楽しめ。

特にデジタルの世界で言えることだけど、モノによってステータスを表わすっていうのが、どうやら常に最終目的地になっているようなんだ。しかし実際に良き人生を送ったり具体的な体験をするためには、実在する人々と関係を作り、自分のなかにしっかりとしたモラル的指針を作って生きることが必要だ。

常にデジタルのフィルターをかけた見識で現実を見続けるべきじゃないし、そこで見えている間違った行き先を目指すべきじゃない。それって本物じゃないんだからさ。

だからリアリティとのつながりを保ち続けろ。俺は今まで現実にハッピーじゃなかったことが何度もあったけど、それらと向き合ってきた。何か違うことが起こるのを求め続けるのではなく、ありのままを受け入れていたんだ。

ライヴ配信はヘンだが、音楽産業におけるほかのことに比べたらヘンじゃない。

“ライヴ配信はヘンじゃなかった？”なんて聞いてくる人がけっこういる。もちろんオーディエンスがいないところで演奏するのはちょっとヘンだが、何ヵ月も一緒にプレイしていなかった俺らは、マーク（モートン／g）の家で数週間リハーサルをしてから臨んだんだ。

俺ら5人で部屋に入り、音楽を作ってほかの誰にも向けずにプレイしたけど、そこでのアメイジングなフィーリングは何事にも代えがたい経験だったね。単に“俺は今、ガレージで再び仲間と一緒に音楽を作っているんだ”とだけ考えていて、それはスゲェことでもあったんだ。

ただ、誤解しないでほしいんだけど……俺はオーディエンスの前に立つ準備もできているんだぜ！

新しいことにトライし続けろ。

歳を重ねて第二の人生ってヤツを歩み始めれば、そりゃリスクを取らないっていう選択をするほうが楽さ。でも俺は自分自身を研ぎ澄ますために、アーティストとしての捌け口になるモノを大切にしている。

俺はフォトグラファーとして、なかなかに危険な場所へも行くことがある。去年の夏には、催涙ガスが充満していたり、ゴム弾が飛び交っているようなところにも行ってきた。これってサーフィンと似ているところがあって、経験を重ねていけば成長していき、最終的には大きな波にだって乗れるようになるんだ。

そして、そういったところでは“その瞬間に何が起きているか”に敏感でいることが重要になってくる。芸術家として物事に対して興味を持ち続けることが大切で、サーフィンみたいなことを実際にやることで、俺は生存本能を維持できるんだ。

『Live In Richmond, Va』

スタジオ最新作『Lomb Of God』のツアーが中止になったことを受け、配信ライヴとして行なわれたショウをパッケージした音源作品だ。DVDには貴重なリハ風景も収録。

取材：岡見高秀
35周年アーティスト写真
撮影：堀内亮（CABRAW）
デザイン：土屋英俊（SOIL DESIGN WORKS）
黒ミサ写真：山田晋也

THE MON RHYTHM BATTLE!

STER'S TALK

聖飢魔II

ロック／メタル・シーンにはさまざまなリズム・セクションがあれど、これほど独創的かつ強力な一体感を持ったコンビがあるだろうか。ゼノン石川和尚とライデン湯澤殿下だ。実に30余年のタッグ・チームである両名は、ハードなサウンドを骨子とする聖飢魔IIの音楽のなかで、実にグルーヴィかつバラエティ豊かに楽曲を彩る。地球デビュー36年目を迎えさらなる活動が期待される両悪魔に、自身のプレイ・スタイルと聖飢魔IIサウンドとの関係性について、そしてそのコンビネーションについて語ってもらった。

入った当初はけっこう苦労したというか、
“オレ、メタルわかってないな”って
感じがつきまとっていた。

ライデン湯澤殿下

やっぱりリズム・セクションって
車で言えばエンジンだもんね。　（ゼノン）

――今回は聖飢魔Ⅱのリズム・コンビネーションについて、ご両名にじっくり話を聞きたいと思います。ギターが花形になりやすいメタル・バンドにおいて、リズム体のキャラクターが際立っていることは、聖飢魔Ⅱの大きな個性につながっていると思うんです。

ゼノン　言われてみればそうかもしれないけど、"個性出すぞ"とやっていたわけではなくて。体が自然に反応していったんだろうなと思うね。

ライデン　曲調がかなりバラエティのあるバンドだったんで、演奏スタイルを強引に寄せていったということはあまりないかな。ものすごい初期の頃は"ツーバスにしたら"と言われたこともあったけど、それだけは譲れんと。

――共通してカッコいいと思うコンビ、目標になったコンビはありましたか？

ゼノン　もうね、いろんなリズム・セクションがカッコいいと思っていたよ。やっぱりバンドのなかで"ドラムとベースでひとつの楽器"みたいなリズム・セクションがいいんだよね。もちろんレッド・ツェッペリンは最高みたいな。フュージョンだったらスティーヴ・ガッドとウィル・リーも大好きだし。山下達郎さんとこの青山（純）さんと（伊藤）広規さんのリズム・セクションもいいし、ポンタ（村上秀一）さんと岡沢（章）さん、髙水（健司）さんと山木（秀夫）さん……憧れのリズム・セクションがそこら中に溢れていたね。ドラムとベースの組み合わせでいろんなスタイルができあがっていくという意味では、リズム・セクションって"時代"なんだよな。

ライデン　ゼノンとは世を忍ぶ仮の年代も近いので、聴いて育った音楽が似ている。70年代のハードロックと同時にフュージョンも全盛だった頃に楽器をやっているので。ライブもけっこう一緒に行ったよね。

ゼノン　そっくりそのまま聖飢魔Ⅱに当てはめることはできないけど、その美しさというか、持っているエネルギーを我々も出したいなと。もちろん単体でカッコいいベーシストのプレイも参考にしつつ、でもやっぱりリズム・セクションっていうのが重要というか、車で言えばエンジンだもんね。

ライデン　曲がまずあって、その曲をこのバンドで１番ヴォルテージの高い転がり方で出せればいいというのがあったよね。

――ゼノンさんから"リズム・セクションは時代"という言葉が出ましたが、70年代から現在までを見回して、コンビの在り方というものは変わってきたと思いますか？

ゼノン　ロックにもいろんな要素が入ってきて、今のミュージシャンはたくさんのものを吸収しているよね。昔は"ロックといえば８ビート"という固定概念があったけど、今はリズム的にも８ビートや16ビートだけではないもんね。

ライデン　今の若手が楽器を始めた幼少期にはいろいろなものが当たり前のように手に入るので、我々の世代が考えられないようなミックスの仕方を持っているよね。そこら辺はスゴいなと思う。ドラムで言えば、メタルとフュージョンなんかくっついちゃっているようなもんで。テクニック的な部分では、特に動画でいろいろと探れてしまうから、最初から答えが観れちゃうと逆に大変なんじゃないかなとも。自分らの頃はバスドラの細かい踏み方ひとつでも、本に書いてあるだけなんでよくわからなかったじゃない。だからいい意味でも悪い意味でも自己流っていう。そこら辺が逆に今の人たちは大変なんじゃないかな。

――それは、より自分だけのものを生む難しさっていうところですよね。

ゼノン　答えを先に観ちゃっているから、最初から頭でわかったような気になっちゃうんだけど、でもやってみると現実はなかなか厳しかったり。そういうところでめげずに興味を持ち続けていくことが大事なのかな。

自分のことは自分で決めていたから
あんまり影響を受けることもなかった。
（ライデン）

――ではライデンさんに、改めてドラマーとしての歩みをおうかがいします。アマチュア時代に培ってきたドラム・スタイルは、デビュー直前～直後の聖飢魔Ⅱにはどれくらいマッチしていたものでしょうか？

ライデン　学生時代にいろいろなバンドをやってはいたものの、意外とゴリゴリのメタルはやっていなかったんだよね。入った当初はやはりダミアン浜田殿下（当時）の曲が大元だったので、けっこう苦労したというか、"オレ、メタルわかってないな"っていう感じが常につきまとっていたかな。

――楽曲に向けて、意識的に自分のスタイルをメタル・シフトさせなければいけない部分があったと。

ライデン　そうだね。自分のスタイルだけだとヤバいんじゃないかっていうのがあって。試行錯誤は初期の頃はけっこう多かった。だからと言ってゴリゴリのツーバス・ドラマーになろうとはまったく思っていなくて。ニール・パート、ジョン・ボーナム、コージー・パウエルあたりのスタイルをミックスして自分流でいけたらなと。

――例えば初期２枚では、「地獄の皇太子」や「The End of the Century」はスピード・メタルやスラッシュといった、当時のメタルのトレンドを取り入れやすい楽曲とも言えますが、そのなかでもワンバスとフロアでスピード感を出していくというのが、ライデン流個性に結びついていきましたよね。

ライデン　そうだね。ラウドネスの樋口（宗孝）さんがいてくれたおかげっていうのはあるかもしれない。そういう先輩がいると"ツーバスにする必要はないんだ"って思えるし、自分でも何とかなるんじゃないかって。

――ちなみに、その"ツーバスには絶対にしない"という強いこだわりはどのあたりから培われたのでしょう？

ライデン　そう言われると明確な答えはないんだけど（笑）。東原力哉さんが好きで、あの人が『ドラム・マガジン』かなんかで"両足を使う前に、片足でやることいっぱいあるやろ"とも言っていて。ワンバスでまだまだ掘り下げるところがあるんだなっていう意識のほうが強かったのかな。

――そういった探究心は大切ですよね。その頃、同世代のハードロック／メタル系ドラマーのことはどう見ていましたか？

ライデン　アースシェイカーは同じ事務所だったので、工藤（義弘）さんにいろいろ教えをもらったよね。あとフラットバッカーとかアンセムはほぼ同世代なんで、本間（大嗣）さんとも仲が良かったな。だからと言って自分のことは常に自分で決めていたから、あんまり影響を受けるということもなかったと思う。

――それこそ、ドラム・セットもどんどん多彩になってくる時代ですが、やはり自分は自分である、と。

ライデン　思い返してみると、少しはその時代に乗っかっていた部分もあるけどね

(笑)。セットが徐々に派手になっていって、魔暦紀元前(B.D.)10年〜9年(1989〜90年)あたりはけっこういろいろ付けていたから。そこから先はやっぱり自分だけの音というのが欲しくて、当時エンドースしていたパール・ドラムに特注のドラム・セットを作ってもらったりして。やっぱり人がやっていないことをやりたかった。
――シングル・ヘッドにしても、"この界隈では俺だけだ"みたいな。もちろん、それを実践するためにはさらなる練習が必要になるとは思いますが。
ライデン 習うより慣れるしかないしね。多少見切り発進でもミサをひたすらやっていると、イヤでも乗りこなせるようになる。ときにはPAさんと話をして"このバスドラじゃ音が作れないよ"なんて話も出たけど、ツアーを何本かやって"じゃあバスドラだけ変えよう"とか、常にそういう実験を本番でしていたという感じかな。
――ゼノンさんは『地獄より愛をこめて』(1986年)からの加入となりますが、それまではロックやファンクのスタイルがベースにあったという感じですよね。となると、ライデンさん以上に"聖飢魔IIシフト"が必要だったのかなとも。
ゼノン 僕のなかでメタルというのは未経験ゾーンだったんだよ。僕たちがデビューする前からラウドネスを筆頭にジャパメタが盛んだった時期で、そこでのベースっていうのは、今のロック・シーンにおけるベースよりも縁の下の力持ち的な存在だったので、メタルのベース・スタイルってなかったんだよね。
――ギターの1オクターブ下でユニゾンというのが主要パターンではありますよね。
ゼノン 聖飢魔IIもメタルをベースにしたロックから、だんだんとバラードもやるようになってポップになったしね。そういう風にバンドが徐々に展開するんで、"石川さんにベースをお願いできませんか?"っていうのが、当時のマネージャーからの最初の誘い文句で。だったらおもしろそうだしやってみようかなっていう。
――ジェイル大橋さんが多くの曲を書く『地獄より〜』で、よりスタイルの幅は広がりましたから、そこにゼノンさんのプレイがマッチするだろうという。
ゼノン デカい音のメタルって、とにかくギタリストとドラマーにかかってくる。ドラマーだったらパワー・ヒッターじゃないと務まらないと思っていて、太いグルーヴ、重いビートが出せるのはライデンのおかげなんだよ。僕はそれに乗ってベースを弾いていれば聖飢魔IIというバンドのなかでアンサンブルになれると思っていたので、あまりメタル・ベースというものを意識したことはないかな。
――前任のゾット星島さんはピック弾きでしたが、同じ楽曲をプレイする場合、指弾きでニュアンスを近づけようとは思っていましたか?
ゼノン ピッキングもその人の個性なんだよね。ジェームス・ジェマーソンは人差指しか使わないし、ウェス・モンゴメリーはギタリストだけど親指しか使わない。それがひとつの個性になって、説得力のあるプレイに通じていくんだなって。僕は指弾きにそこまでの強い意志はなかったけど、やっぱり直感的というか、当時のメタル系ベーシストたちはピック弾きだったんで、天邪鬼なのかもしれないけど、リズムの捉えやすさも含めて、結局それが1番しっくりきたので。
――ライデンさんはベースがゼノンさんに変わったことで、ご自身のプレイに変化はありましたか?
ライデン すごい楽になったというか……そう言っちゃうとゾットに失礼なんだけど、意識しなくても完璧に合わせてくれる感じ。ゼノンは一歩引いたところでギターとドラムのビートを見てくれるので、オレが意識的にベースを聴こうとしなくても結果的に合わせてくれているの。なのでゼノンが入ってからは、オレはギターに集中するようになったかな。
ゼノン 僕もライデンのロック・ビートがあるから、普通にエイトを弾いてもロックになるんです。ほかの現場では8ビートに16分音符を混ぜて弾いたりもするけど、聖飢魔IIだとそれは邪魔になっちゃうので、そういうときは男らしく全部8ビートできっちりと弾いて、極端な話コードの変わり目に経過音を入れないみたいな。そのスタイルがカッコいいんだなって、ライデンのビートに自然に反応すればそれで聖飢魔IIのロック・サウンドになるっていう。

自分たちのやっていることになかなか太鼓判が押せないというか。 (ゼノン)

――4枚目の大教典『BIG TIME CHANGES』(1987年)あたりから、ベースとドラムの自由度がより広がった印象があります。
ゼノン そうだね。ルーク(篁参謀)が入って、わりとゆったりとした雰囲気でバンド・サウンドを構築していけた時期で。プロデューサーを立てる前で、それぞれ曲を作ってきた者がイニシアチブをとって出来のいい曲をレコードにしたという感じじゃないかな。
ライデン そうだったね。良くも悪くもつき合いが長くなってくると、徐々にお任せになっちゃう部分があるから、ドラムに関しては作曲者からの注文も少なめで、『BIG TIME CHANGES』以降はかなり好き勝手にやらせてもらったという印象かな。
――同作収録の「Earth Eater」はそれまでのイメージから"お!"っと思ったリスナーも少なくはなかったと思います。この時期のこのリズム体だから演出できた曲なんじゃないかなと。
ライデン あれはね、ゼノンがスラップも得意だっていうのを表に出そうよって……誰が言い出したんだっけ? (デーモン)閣下かな。
ゼノン うん。で、けっこうエース長官がノビノビと曲を作ったんだよね。なので"こんな曲、聖飢魔IIじゃちょっと無理かも"みたいなテイストの曲でしょ。曲調がああだったから僕たちもやりやすかったというか、いろんなアプローチができたという。
――それこそメタル一辺倒ではない聖飢魔IIの懐の深さが、多くのメタル・リスナーに届いたんじゃないかなと感じます。最近はやっていませんが……。
ゼノン やってないね。エース長官の個性が強い曲で、あのフワっとした分数コードとかの色は、今の構成員だと出しにくいかな。やってやれないことはないだろうけど、別物になるとは思う。
――ルークさんは、『THE OUTER MISSION』(1988年)でいよいよ自由な作曲に開眼したと語ってくれましたが、リズム体としてはどうでしたか?
ゼノン 土橋(安騎夫)さんがプロデューサーで参加して4ビートの曲が出てきたりして、プロデューサー的にはリズム体にもいろいろさせたかったんだろうなと思う。土橋さんはポピュラー・ミュージックの人だから、いろんなところからいろんなエッセンスを持ってきて、聖飢魔IIにいろんな香りづけをしたかったんじゃないかな。最

ドラムとベースでスタイルができあがる
という意味では、リズム・セクションって
時代なんだよな。

ゼノン石川和尚

ライデンのビートに乗って弾いていれば聖飢魔IIのアンサンブルになれる。─ゼノン

近、土橋さんとバンドをやっているんだけど、『THE OUTER MISSIION』は自分のなかですごく納得のいく作品だったと言っていたよね。
ライデン　オレも『THE OUTER MISSION』はすごく楽しかった。ドラム的にも初めてプロのチューナーさんを紹介してもらって、音がものすごく良くなったのも印象に残っているし。その後『恐怖のレストラン』(B.D.7年／1992年)でまた過激な方向にいくんだけど、『THE OUTER MISSION』はすごくアナログっぽい柔らかな音で、今でもとても好きな1枚だよね。
──ゼノンさんの言う4ビートの曲とは「Ratsbane」ですよね。あの曲調をガッと変えるシーンを観て“こんな演奏もできるのか！”と驚いた人も多かったと思います。
ゼノン　“ルークの感じとエースの感じ”を極端に表現したのがあの形なんだろうな。要するにギター・バトルで、シャッフルから4ビートにチェンジするのがカッコいいよねって感じで挑戦してしまった、ゴメンナサイって感じ（笑）。
──ハハハ。演奏中はロック調／ジャズ調と、フィーリングを切り替えていた感じはあるんですか？
ライデン　頭を切り替えたから4ビートがウマくなるわけではないし、本当もう、なんちゃって4ビートでゴメンナサイって感じなんだけど（笑）。
ゼノン　当時は、どうしても自分たちのやっていることになかなか太鼓判が押せないというか。要するに正解はいっぱいあるんだなって、最近わかってきたんだけど。

普段の活動がロックなんで、それを押し通していろいろやりたい。（ライデン）

──機材面として、ドラム・キットも基礎の部分はあまり変わっていない印象を受けます。
ライデン　そうだね、2本のギターに負けない芯の太い音が出せればOK、みたいなところでいろいろ試していたので。
──そのなかで、チャレンジングだったセットはありましたか？
ライデン　やっぱり中期の、「白い奇蹟」とかその後の『有害』(B.D.9年／1990年)や『恐怖のレストラン』で使っていた焦げ茶色のシングル・ヘッドは、やっぱり振り切りすぎちゃったってくらい変な音だったよね。「白い奇蹟」とか「赤い玉の伝説」とかもすごいタムの音しているんだけど、嫌いじゃない。ただそれ以降、曲の幅がさらに広がっていくなかで、ツブしがきかない極端な音だったので、だんだんと使うのをやめたという感じかな。
──ゼノンさんは、それこそ初期からずっとジャズベ・タイプで。
ゼノン　そうね。プレシジョンもときどき引っ張り出して弾くとイイんだけど、聖飢魔IIはジャズベ・サウンドで馴染んでいるから、プレベに変えただけでボトムがガラッと変わっちゃう。こんなにボトムが変わっちゃったらマズイなって、それでやっぱりジャズベに戻して。最初からプレベだったら、ずっとプレベでやっていたんだろうけど。
──曲によって変えるという選択肢はなかった？
ゼノン　アルバムとしてトータルで聴くと、ボトムがコロコロ変わるとベーシストが変わったみたいに感じちゃうんだよ。だから変えるにしても同じような音のベースを、例えばチューニングが違うとか物理的な理由でチェンジするくらいで。
──では、いよいよ戦闘服に合わせてトゲトゲしいベースを選ぶなんて……。
ゼノン　ないね（笑）。
──戦闘服という点で、ドラムは特に四肢の動きが大きい分、叩きづらかったものはなかったですか？
ライデン　デザインがどんなにカッコよくても、まず叩きやすさありきなんで。上に付いているデカイのはアタマの2～3曲ですぐ脱いじゃうし（笑）。
──足下も変わらず？
ライデン　ずっとカンフー・シューズだね。アマチュア時代から聖飢魔II入ってすぐは裸足だったんだけど、冬のツアーに出たらペダルが冷たくて。それで、やっぱり『ドラム・マガジン』じゃなかったかな……スティーヴ・ガッドが一番裸足に近いカンフー・シューズを履いていると書いてあって。それでデビューした年の冬からカンフー・シューズ以外でミサをやったことは、少なくとも現役時代はないかな。
──また、両名での課外活動としてRX

ヴォルテージ・コントロールを実は全部ゼノンがやっている。―ライデン

があります。そこでは聖飢魔Ⅱとは切り離した演奏を聴かせようと考えていましたか？

ゼノン　聖飢魔Ⅱではやらないような楽曲ということで、ああいうプログレ／フュージョン的な硬派なインストになったけど、中身は一緒だね。コードとかスケールとかは全然違ってくるので、どうしてもその辺はフュージョン寄りになるけど、リズム体的なボトム感は変わらないと思う。聖飢魔Ⅱの太さ、ロック・ビートに乗っかってのアプローチというニュアンスは変わらない。

ライデン　世仮の高校の頃フュージョンも好きで聴いていたけど、根本的にオレのなかにはフュージョン・ドラムの引き出しはないのね。だからRXの1枚目（『CHEMICAL REACTION』B.D.8年／1991年）を録ったときは、わざと聖飢魔Ⅱで使っていたシングル・ヘッドのセットのままアルバムを作ってみようかなって。

――あえて、同じにしたという。

ライデン　急にフュージョン・ドラマーになれるわけじゃないし、普段の活動がロックなんで、それを押し通していろいろな曲をやりたいなと。

ゼノン　当時はまだ聖飢魔Ⅱ以外の仕事はしていなかったので、ベースの場合だとフュージョン的なアプローチは仕事になるレベルじゃなかった。RX以降はセッションとかもするようになっていったので、ちゃんと仕事に持っていけるきっかけになったのがRX。

――聖飢魔Ⅱが地球デビューして36年、現在の構成員体制も10年以上となります。お互いのプレイヤー的印象に変わりはないですか？

ライデン　長年やり続けているんで、空気みたいな存在なんだよね。さっきも言ったように、ゼノンのベースはリズム的に舞台上で全員をコントロールしてくれるのがスゴい。ドラムがハシった場合もうしろに引き戻すんじゃなしに、お客さんには気持ちよくヴォルテージが上がったような感じで届くようにしてくれる。バンド全体のヴォルテージ・コントロールを、実は全部ゼノンがやってくれているの。これ、現役時代は気づかなかったんだけど。

ゼノン　ライデンはやっぱりブレない悪魔なんだよね。ワンバスもそうだし、芯がすごくしっかりしている。“こうくるな、こういう感じになるな”っていうのがわかるので、一緒にやっていて安心できる。ライデンのリズムがあったから、僕が適当にベースを弾いていてもロックになったんだなって。

ライデン　やっぱり現役時代にゼノンとやらせてもらったおかげで、もともとあったオレのフィーリングがさらに固まったっていう感じなのかな。

――ちなみに両名から観た、各ギター・チームの印象の違いは？

ライデン　正直よくわからない。自分も現役時代からどんどん変わっていくじゃない。今の段階でエース＆ルークのパッケージ、ルーク＆ジェイルのパッケージと同時に演奏すればいろいろ感じるだろうけど。現役時代に感じていたエース＆ルークと、ここ10年くらいやっているジェイル＆ルークとは比べようがないというか。

ゼノン　三者三様だよね。全然タイプが違っていて、曲のアプローチも違うし作る曲もまったく違うでしょ。エース長官はどちらかというと構築していくタイプ。例えばデモ・テープを作ってくると、もう“これをレコーディングすればいいじゃん”くらいのレベルなのよ。ただ、そのベース・ラインを崩して弾いても怒らない。長官にとってはデモ・テープも作品なんだろうけど、それは“そのときに作ったもの”っていう感覚なんだろうね。

――なるほど。

ゼノン　ルークはどちらかというと、リハーサルをやりながら構築していくタイプ。ギター・リフやメロディ、コード進行とかこだわりはすごく感じるけど、ベースとドラムはお任せみたいな、意外と注文はない。で、ジェイルは頭のなかにある音がこっちに伝わっていないだけで、全部構築しているの。例えばデモ・テープでも、自分で弾いているベース・ラインが曲の一部になっていて崩せない。彼のなかでは全部が成立していて、メロディやバッキングもそうだし、ドラム・パターンもベース・ラインも含めてロックみたいな。

ライデン　ジェイルが一番こだわりが強いね。だからイメージからはずれると注文も多くなるけど、あいつはすごく音楽を知っているから、自分のなかで消化できていなくても、言われたとおりにやってみると腑に落ちたりして。けっこう勉強になることが多いんだよ。

――きっと近い将来、ルークさんやジェイルさんの個性が出たメタル・ナンバーが聴けるのではと楽しみにしております！

ゼノン　そうね、多分そういう個性は変わらないと思うので、それぞれの曲の感じは昔のまんまだよ。

ライデン　どんなものができるかはまだわからないけど、楽しんで作れればいいかな。

――では最後に、そんな新作、そして黒ミサを楽しみにしている信者／メタル・ファンにメッセージをお願いします。

ゼノン　いつも応援してもらって、本当に感謝の言葉しかないよ。こういう状況で思うようなハジけ方ができず、こちらも非常に歯がゆい思いをしているんだけど、楽しみに待っていてくれ！

ライデン　この先の状況も全然見えなくて、まったく同じという状態には戻れないかもしれないけど、そのときにやれることをみんなの前に提示していければ。

――本当にコロナはゼウスの妨害ですよね。ぜひ魔力で吹き飛ばしていただきたい！

ライデン　それができれば早いんだけどな（笑）！

ゼノン　ハハハ！

A Previous Issue

ルーク篁参謀、ジェイル大橋代官による対談《From Hell with Love to GITARS!》は、『METAL HAMMER JAPAN Vol.5』に掲載！　ギタリストとしてのルーツからプレイや作曲についての信念まで、両悪魔がロック／メタル・ギターの魅力を存分に語る！

The latest article from UK

Text by Dave Everley
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』347

SYSTEM OF A DOWN
SERJ TANKIAN

システム・オブ・ア・ダウン　サージ・タンキアン

システム・オブ・ア・ダウンの カリスマ・フロントマンのドキュメント 戦争、アメリカでの生活、音楽ビジネス、 そして政治活動における真実

彼らが1998年にリリースしたデビュー作以降、ヘヴィ・サウンドのトレンドは大きく変わったと言える。2005年の『ヒプノタイズ』を最後に本格的な新作は発表されていないが、今もって世界のヘヴィ・ミュージック界で強烈な存在感を放つシステム・オブ・ア・ダウン……その中心的存在であるフロントマン、サージ・タンキアンについて、あなたはどれくらい知っているだろうか？　レバノンで生まれ、戦争を経験しアメリカへ移住、数々の仕事を経てバンドを始動させ、政治的活動にも力を注ぐ。昨年公開のドキュメンタリー映画『Truth To Power』にも収められた、目を見張るような人生のストーリーを語ってくれた。

“HOW AM I GOING TO EXPLAIN WAR TO A SIX-YEAR-OLD?”

──どうやって6歳児に戦争を説明すりゃいいんだ?

サージ・タンキアンが、自身が“突然のひらめき”と呼ぶものを得たのは、雨が降りしきる深夜だった。当時サージは20代中盤で、大学を卒業後に叔父が営む宝石ビジネスに携わりながら音楽をプレイしていた。しかし彼は人生を楽しんではおらず、法律家を目指して勉強することを決めていた。

ロサンゼルスのダウンタウンからロング・ビーチの夜間学校まで長距離ドライブをしていたとき、潜在的な意識が湧いてきた。ブレーキを強く踏み込み車を路肩に停め、ダッシュボードを叩きつけながら“俺は音楽がヤリてぇんだ、こんなことヤッてられるか!”と怒鳴った。

“法律家になるっていうのは、とてもネガティブなことだった”と現在のサージは話す。“俺は法律家ってヤツを嫌ってきた。でも自分という人間を奮い立たせて自己をしっかりと実現させるためには、「本来自分がなるべきじゃない極端なことにチャレンジしなければならない」と常々言っていたんだ”。

車中での自我の崩壊は転換点だった。彼は数ヵ月後には若いアルメニア系アメリカ人のメタル・バンド、ソイル(SOIL)に加入し、次第にこのバンドはシステム・オブ・ア・ダウンへと変異していく。それから四半世紀以上が経過し53歳となった現在、彼はモダン・メタルにおける最大のカリスマとなり、シンガー/アーティスト/活動家としてマルチに活躍している。彼のキャリアは政治的な論争や、システム・オブ・ア・ダウンのメンバーとの間で沸き起こるドラマで溢れていた。

“これは俺が音楽の世界での活動家として学んできたことなんだけど……”と自分の人生を振り返りながら続ける。“大衆の意見が自分の味方をしているときに正直に振舞うのは容易なことだよ。でもそうじゃないときっていうのは逆に難しくなるよね……”。

──あなたは1967年、レバノンはベイルートで生まれました。最も古い記憶について教えてください。

一番古い思い出は祖父母の家でのことで、それは俺が住んでいた家の前の通りを進んだところにあってね。どの家庭でもそうであるように、彼らは俺の面倒をよくみてくれていたんだ。階段を昇れば通りや海岸に出られて、初めてビーチに行ったのもその頃だったね。

──1975年、レバノンでは内戦が起こり、落とされる爆弾の音を聴いていたと話していました。幼いながら、どのような気持ちで過ごしていたんでしょう?

当時、心のなかで処理することはとても難しかったよ。理解できるようになったのは大人になってからだから。今の俺には6歳の息子がいて、彼はオモチャの小さな飛行機や戦闘機で遊んでいる。彼は“どうしてジェット・ファイター(※戦闘機)と呼ばれているの? ほかの飛行機と何が違うの?”と聞いてくるんだ。俺が“戦争で使われるからだよ”と答えると、次は“戦争って何?”と聞き返してくる。これには本当にまいったね。6歳の子供にどうやって戦争を説明すりゃいいんだ? 戦争はあまりにも非理論的なものだよ。

──あなたの家族はその直後にベイルートを離れ、アメリカにやってきました。アメリカでの最初の記憶とは?

ハハハッ! アメリカ製のチーズがあまりにも黄色かったことかな。それとベルボトムのジーンズ……だって1975年のことだから。レバノンのベイルートからカリフォルニアのハリウッドに来るっていうのは、そりゃカルチャー・ショックがあったさ。使っている言葉だって完全に異なるもので、俺は英語が少ししか話せなかったこともあって、周囲に追いつくまでに1~2年ほどかかったよ。

──これまでで最も最低だった仕事とは?

俺はたくさんの仕事をしてきたよ。親父と一緒に靴を製作し販売するビジネスをやったことがあれば、叔父と宝石ビジネスをやったこともあり、ソフトウェアの会社を所有したこともある。靴の販売が最高だったとは言えないけど、10代のときにキレイなおネエちゃんがたくさんいる小さなモールで働けてたのはマアマアかな。

ただし、もし俺が過去に戻れるとしても、何ら変えることはないだろうね。すべての経験が今の俺を作ってくれている。どうしたら後悔できるんだ?ってことだよ。

──あなたはフォーエヴァー・ヤング(FOREVER YOUNG)というバンドのキーボード・プレイヤーとしてキャリアをスタートしましたが、その驚くほどクレイジーなシンガーとしての才能にはいつ気づいたんですか?

システム・オブ・ア・ダウンのはるか前、ソイルの頃に気づいたんだと思う。かなりクレイジーでヘヴィ、そしてプログレッシブな音楽で、表現という意味で自分のなかの何かを解き放ってくれた。

ただ俺は、全然グレイトなシンガーじゃなかったのさ。俺は自分を表現していただけで、半分くらいはスクリームし、残り半分で歌っていたような感じだった。何を伝えようとしていたのか自分でも理解していなかったけど、いつの間にかそれも芽生えてきたんだよね。

──システム・オブ・ア・ダウンを軌道に乗せるまでの道のりとは?

なかなかにハードワークだったよ。多くのレーベルが俺らとサインすることに及び腰で、“いったい誰がこんな音楽をラジオでかけてくれるんだ?”って感じ。でも俺らは、そもそもラジオのことなんて考えたこともなかったよ。単に自分たちから生まれる音楽を作っていただけで、それこそアーティストがすることだから。

最初の一年はエンドレスにツアーをしていて家にいた記憶なんてないけど、俺はツアーに出ているほうがはるかに楽しかったな。自分の思い描くヴィジョンに向けた仕事が適切な場所、タイミングで行なわれているのなら楽しめるものさ。だってそういうとき、世界は自分たちについてきてくれるものだろ?

──バンドは早い段階からリック・ルービンを味方につけましたね。彼と1stアルバム(『システム・オブ・ア・ダウン』

1998年）を作っていたときのことを教えてください。

“お前らはサウンドとダイナミクスといった点で、ステージ上で最高にクレイジーだ。俺は可能な限り、それをそのまま録音したい”というのがリックの思い描いていたアイディアだったと記憶している。1stアルバムっていうのは、自分がライヴ・ショウにいるように感じられるものさ。

そして、当時まだ俺らのエンジニアだったシルヴィア・マッシー（※トゥールのプロデューサー）とも作業を行なった。俺らはスター・チームと組んでいたんだ。俺らはアメイジングな人たちの手によってあと押しされていたんだよ。

――2ndアルバム（『毒性』2001年）をリリースする前日、ハリウッドの駐車場で行なうはずだった無料ライヴは、暴動となり終わってしまいました。あのときの状況とは？

あれには相当苛立たせられたよ。こちらは3000～4000人の来場を想定していたんだけど、実際には15000～20000人も来たんだ。俺らは通りを挟んだところにあったクラブで準備をしていたんだけど、スタッフがやって来て“バリケードが破壊されたことで、消防局がショウの開催許可を取り消した。ショウをやめさせるつもりだ”と。

聴衆を落ち着かせるために、ほんの数曲でもいいからプレイさせてもらえるよう、俺らは警察を説得した。でも彼らからの答えは“絶対にダメ”で、バンドの誰かがステージに上がるようなら逮捕すると脅してきた。でも俺はメンバーを集めて“ファックだぜ、やっちまおう。俺らを逮捕してみろってんだ。おかまいなしだ！”って感じだったね。

しかし俺の弁護士が俺をつかんで、“ここはロサンゼルスだ。アイツらはお前を訴えてバンド活動ができないようにしてくるだろうし、お前から根こそぎ持っていくぞ”と言ってきた。俺は“自分は音楽をヤッているだけで、こんなことになるべきじゃない”と考えていた。なんていうか、俺らは何もしなかったのに、気づかずロサンゼルス暴動を起こしていたんだな。

──『毒性』は、9.11 が起こったときにナンバー1を記録していました。あなたはその数日後にバンドのウェブ・サイトに《Understanding Oil》というエッセイを投稿し、そこであのテロ攻撃が起こった理由を述べました。それに対して"非愛国的だ"と殺害をほのめかす脅迫を受けることに。

あれは本当に恨みを買ったな。殺害予告だけじゃ済まなかったよ。『ザ・ハワード・スターン・ショウ』(※トーク番組)に出演した際に俺が言ったことに対して、あれこれ言われてね。俺の言葉や意図が間違った捉えられ方をされてしまい、それに向き合って自分を守らなくちゃならなかった。しかもツアーを開始したばかりの頃だったのに、俺らは毎日ニュースで取り上げられていた。国中のいたるところでテロリストたちに脅されていたし、それでも毎晩2万人の前でプレイをしていた。俺らは安全なのか? オーディエンスにヤバいヤツはいないのか?って感じでね。

ジョン(ドルマヤン/d)には"お前は本当は賢い男だろ? 一体何やってんだ? お前は俺らを殺したいのか?"って、本当にそう言われたよ。マジで悪いことをしちまったって感じたね。俺はバンドの連中を愛していたし、彼らと一緒にツアーをしていて"本当に申し訳ない。でもこれが現実なんだ。信じてくれ、これが現実だ"という感じだったんだ。

──不誠実さに対する感情は、いつ頃から刻み込まれましたか?

かなり若い段階で芽生えてきて、あれは10代の早い段階だったな。アメリカみたいなデモクラシーのなかに生きるってことが実現したときで、トルコはNATO(※北大西洋条約機構)の同盟国だったために、政治的都合や経済的理由で(アルメニア人の)大虐殺があったことを認めることがタブー視されていたんだ。

世の中にはたくさんの真実があるけど、このことは非道な目的のため真実も闇に葬り去られるってことを教えてくれたよ。これが俺を活動家へとたらしめたんだ。

──アルメニア人の大虐殺を認めようとしないトルコ政府の姿勢について、あなたは批判的な姿勢を取っています。ドキュメンタリー『Truth To Power』のなかで、トルコのスパイ筋によるあなたの暗殺計画があったと触れていました。これは事実?

俺らは(当時アメリカのスポークスマンだった)デニス・ハスタートの陣営と敵対していてね。俺のボディガードはFBIに何人かの友人がいたんだけど、彼らによるとトルコのスパイたちが、俺のボディガードの"クライアント"を追いかけているとのことだった。それが殺害や暗殺の脅迫だったとまでは言わないが、それが起こったことの実体だね。

あれが今ではもっとプレッシャーとなっていてさ。俺はステージ上でそれまでとは比べられないくらい動くようになったんだぜ! 2秒以上同じ位置で

"IF I WANTED TO LEAVE SYSTEM, I WOULD'VE LEFT"

——もしシステムを離れたかったら、そうしていただろうね。

ジッとしていないようにしたんだ。あのツアーではかなり痩せたよ。

でも、こう考えるようにもなった。俺にはほかにどんな選択肢があったんだ？　真実を語らないってことか？　でも、それで俺はアーティストと言えるのか？　ミュージシャンでいられるのか？　そう、だから俺にはそうするしかなかった。俺は今でも真実がすべてだと信じているナイーブな男なんだよ。

——成功をつかんだと感じた瞬間はある？

俺がやっていることはエゴを満たすためのビジネスなんだけど、それにはこれまで過ごしてきた過去が関係してくる。

８歳の頃の俺はまだ音楽をプレイしていなかったけど、それだけが夢に描いていたことでもあって。だから誰かが"君たちは最高で素晴らしい！"と言ってくれても、"あぁ、そうかい"くらいにしか考えず、有頂天になることは全然なかった。おかげでエゴイスティックな世界にいながらも、正気を保てたんだ。

——システム・オブ・ア・ダウンは2006年から一時活動を休止し、あなたもかなり歩みを止めることとなりました。"もうやり切った"という気持ちだったのでしょうか？

どんな未来が待っているのかはわからなかったけど、システムをやり切ったわけじゃないことはわかっていた。もしバンドを離れたいと思っていたなら、そうしていたことだろう。誰も俺に銃を突きつけて、無理やりやらせていたわけじゃないさ。

バンドってのは成功をつかむとマシンのようになってしまうもので、俺はそれから離れて自分のやりたいことをやるサイクルに入っていた。自分のなかから湧き出てくるものを始めとして、さまざまなことに興味が向いていたんだ。だから一旦離れてソロ・アルバムを作り、オーケストラのための楽曲を書き始めた。

その後システムに戻ってきたときには、ほかのことを経験したことでさらに自信を得たソングライターになっていたよ。バンドに対してさらなる価値をもたらすという意味でも、とても優れた方法だったんだ。

——バンドは2010年に再集結しました。その間のすべての出来事は、音楽に影響を与えましたか？

そうではないかな。逆に聞くけど、ドラマチックなことが一切ないバンドがいたら教えてほしいな。ドラマってのは常にあるもので、俺らは４人の男たちがさまざまなことに多様な感じ方をしている。しかしそれをメディアがおもしろおかしくして、俺らが14〜15年間に渡りリリースしてこなかったことを表舞台から遠ざかってきたってことにしやがったんだ。

俺らはアルツァフ共和国のために２曲リリースし（※2020年に突然の発表された「Protect The Land」と「Genocidal Humanoidz」）、これは自分たちを超越したものを作り出したという点で、バンドでやってきたことのなかで最高なもののひとつだと感じている。それが達成できたことについて、俺はメンバーのことをとても誇りに思っているよ。でも……わかっているんだ。ドラマってのは常にあるってことをね。

——"サージ・タンキアンでいること"は、かなり強烈なように感じます。ときには大音量でモトリー・クルーを聴きながらジャック・ダニエルをたっぷりとひっかけ、世界から隔離されたいと考えることはありませんか？

ハハハ、ノーだね。そういったときの対処方法は可能な限り瞑想をすることで、すべてをスローダウンさせてくれるよ。ここ数ヵ月の間、俺はずっと椎間板ヘルニアによる猛烈な腰痛と戦ってきて、つい一週間前に手術を受けたところなんだ。ひょっとしたら多くのことと向き合ってきた末のことかもしれないな。アルツァフ共和国での戦争、何人もの若者が死にゆく姿、そしてそれを助けようとする人たちを目にしてきて、もう充分だ！と体が感じ取ったのかもしれない。

音楽の世界ではあまりガツガツと真剣にやり過ぎないことが重要だというのは知っているかな？　活動家として、俺は自分自身と真剣に向き合い過ぎた気がするよ。そういった意味で、今回の痛みは何かを教えてくれた気がするね。

——好みの映画は？

ハメをはずしたような映画が好きだね。イギリスのギャングスターたちを描いたいい映画、特にガイ・リッチーの作品ならどれでも好きだ。ナンバー１のセクシー・ビーストだよ。

俺にとってああいった作品は最高にファニーな映画で、ありきたりな脚本から始まるものの、"こんなの現実にはありえないぜ！"って感じで最高にハメをはずしていくんだ。俺は基本的に平和主義者だけど、こういった映画ってかなり皮肉的なんだ。

——今までに俳優としてのオファーがきたことは？

常に俳優としてのオファーを受けている。典型的なヘヴィメタル、それも悪魔的なヤツから真面目でドラマチックな役まであるけど、そういったものに興味はないんだ。

俺の良き友人であるイルヤ・ナイシュラー（※シングル「Elasticity」の監督）に"お前は演じる必要がある"と言われたことがあって。でも"ファックなこった。俺は演じたくなんかない。俺は歌っているときじゃなきゃ、一行も覚えることなんてできやしない"って感じだったよ。

——あなたはシンガー、コンポーザー、詩人、映画制作者、そして活動家です。俳優としてならば、一体どんなことができそうですか？

子供に対して"お前は何もできない"なんて教えるものじゃないさ。

——もう何年も昔のあのとき、車を路肩に停車していなかったら、今頃どうなっていたと思う？

目も当てられない、冴えない法律家になっていただろう……たぶんね。

Interview by Shinichi Takeuchi
Photo by Takahide "THUNDER" Okami

FUTURE FOUNDATION

現役ラウド系ライヴ・アクトが考える コロナ禍でのバンド活動とこれから

当コロナ禍におけるバンドの活動状況は多くのファンの想像どおりとも言え、この期間を作品作りに充てたり、配信でパフォーマンスやメッセージを発信するなど実にさまざまだった。しかし、やはり生演奏を聴かせることこそバンドの本懐であり、肉体的音楽とも言えるラウド系バンドともなれば、ライヴなくしてその魅力を伝えきるのはなかなかに難しくもある。緊急事態宣言が再発出され、今もって目前のショウが中止になる今、そんなライヴ・アクトたちは今後のバンド活動についてどのような考えを持っているのだろうか。Crystal Lake、SHADOWS、NOISEMAKERという3バンドで結成されたFUTURE FOUNDATIONに、それぞれが思う"ライヴ・バンドが進むべき道"について聞いてみた。

□アメリカ・ツアーで、コロナに対する認識の変化を肌で感じた。(YD)

Crystal Lake、SHADOWS、NOISEMAKER……方向性は異なるものの、いずれもラウドなサウンドを鳴らし、ライヴを主戦場として活動を続けてきたバンドだ。3組は数年前の競演をきっかけに交流を持つようになり、やがて意気投合。現在では互いの音楽性はもちろん、人間性もリスペクトし合い"今では呑み友達だよ"(Kazuki)と素直に言える親密な関係性を築いている。

そんな3組が昨年、緊急合体。FUTURE FOUNDATIONと名乗り、コロナ禍で窮地に陥っているライヴハウスの救済を掲げてオリジナル曲「DAWN」を配信リリースし、大きな話題を集めた。そして彼らは今年、再び集結。5曲を収録したEP『TRINITY』をリリースするこの機に、新作の話を交えながらコロナ禍での音楽活動について聞いた。YD(Crystal Lake)、Kazuki(SHADOWS)、HIDE(NOISEMAKER)それぞれが考えるライヴ・アクトの進むべき道とは?

※

――昨年の3月くらいからコロナの感染拡大が深刻になり、ライヴ活動は自粛が求められるようになりました。その後、4月に緊急事態宣言が発令されて、当時は全面的に自粛せざるを得なくなりましたが、その段階でバンド活動についてはどのように考えていましたか?

Kazuki　SHADOWSは、最後にライヴを

『TRINITY』
FUTURE FOUNDATION ／ FF-1003
◎発売中

昨年配信リリースした「DAWN」とそのリミックスに加え、新曲3曲を収録。メタルからオルタナティブまで多彩な要素が散りばめられたサウンドは、このプロジェクトの可能性を感じさせる。

やったのが３月９日だったんですけど、そのときすでにマスクをしているお客さんが大半でした。でも、俺はそんなに大ごとだと思っていなくて、“じゃあ、俺たちもマスクしてライヴやろうか”なんて冗談を言っていたくらいで。でもそのあとは決まっていたライヴがキャンセルになり出して、ニュースを見ると“未知のウィルスで危険だ”なんていう報道ばかりで……。そんな状況になってしまって“もうこれはライヴできないよね”ってことになり。

YD　僕らは２月に日本でライヴをやり、そのままオーストラリアに１ヵ月くらい行ったんです。その段階ではまだ他人事で“中国で何か起きてるぞ”くらいの感じで、オーストラリアの人も“けっこう大変みたいだけど、天気もいいし、俺たちは大丈夫”みたいなノリでした。２月の終わりからアメリカに入ったときも“なんだか様子がおかしいぞ”っていう雰囲気だったけど、まだツアーはできたんです。10本くらい終わったときに“街がクローズする”っていう話が出始めて、そのタイミングで一気に変わりましたね。エアポートも閉鎖されだして、“お前らが日本に帰れなかったら、この国ではケアできない。できるショウをやるのか、キャンセルしてすぐに帰るか決めろ”ということになって帰ったんですけど、コロナは、あのときに自分にとってすごくリアルなものになりましたね。これはライヴだけじゃなくて、生活レベルでいろいろなことを止めないと感染が収まらないものなんだって。

HIDE　僕らはROTTENGRAFFTYと対バンだったんですけど、当日リハをやっていたら“今日、中止です”ってことになって。“そんなことになるの！？”ってめちゃくちゃ驚きました。ライヴハウスでクラスターが発生したっていうニュースが出始めた頃でもあって。ウチの場合はその後はアルバムの制作をしていたんですけど、影響があったのは夏に予定していたリリース・ツアーですね。“ツアーを発表しては延期”をくり返すことになってしまって。

――NOISEMAKERはアルバム制作という話でしたが、自粛期間中のSHADOWS、Crystal Lakeはどうしていたんですか？

Kazuki　自分は東京に住んでいるんですけど、メンバーは茨城にいるんで、あの頃はやっぱり帰りづらかった。“村八分”のようなことも起きていると聞いていて、コロナというウィルスも怖いけど、それに怯えている人間の心理も怖いなと思いましたね。で、帰れないのでリハもできない状態になってしまって。完全にストップですよね。

YD　俺らは本当ならば、170本くらいツアーがあったんです。それがなくなったのは気持ち的にもキツかったんですけど、そこは切り替えて作品作りの時間に充てようと。それで、クラウドファンディングを始めました。ライヴができないのであれば、ファンと一体になるような形で何かできないかと考えたんです。

□ライヴは全身で感じるもの。配信がすべてだと思われたくない。（Kazuki）

――有観客のライヴができなくなり、多くのバンドが無観客配信という形でライヴをやるようになりました。配信ライヴについ

Kazuki（SHADOWS）

1999年にFACTを結成。2009年にはメジャーへと活動の場を移すと同時に、海外での活動もスタートさせ高い評価を獲得。2015年の解散後、翌年からはFACTのメンバーだったHiro（vo）、Takahiro（g、vo）とともにSHADOWSを始動させ、ギターとグロウル＆シャウトを担当。同年３月にデビュー・ライヴEP『Extrance』をリリース。“CDが欲しければライヴ会場に足を運んでほしい”との思いから、2019年発表の2ndフル作『torches』を会場限定でリリースしたことも話題を集めた（現在は店頭／オンラインでも入手可能）。

てはどのように考えていましたか？

Kazuki　自分たちも何かできないものかと思って、何バンドかの配信ライヴを観たんだけど、正直、震えるものがなくて。お金をかけて、自分たちの世界観をしっかり作って、カット割りなんかもきちんと決めてやれば感動的なライヴができるとは思うけど、ライヴハウスの照明でカット割りの工夫もないままだと、けっこう難しいのかなと。安易にやって質の悪いものを観せるんだったら、やらないほうがいいかな。

YD　僕らも配信ライヴはやりたくなくて。自分自身、観ているのが飽きちゃうので。普段はダイヴが起こるエクストリームなライヴをやっているのに、それができないんだったら、無理にやらなくてもいいんじゃないかとも思うし。

HIDE　ウチは一回やりました。お客さんに対して何かアクションを起こしたくて。ただ、もしまた無観客でライヴをやるんだったら、配信じゃなくてDVDでの販売がいいですね。配信だとさ、3000～4000円払っても、手元には何も残らないんだよ。

Kazuki　確かに、DVDだったらその値段で何度でも観られるもんな。

HIDE　配信ライヴをやってみて、そう思ったんですよ。

Kazuki　サウンドの問題もデカいよ。ハコに来てガンッと喰らう音って、聴覚だけじゃなくて、全身で感じるものじゃん。それってめちゃくちゃ力のあるものだと思うんだよ。俺らなんて、全身でそれを喰らって、今までやって来ているんだし。配信ライヴを観て、それがすべてだと勘違いされたくないっていう気持ちもあるんだよね。

YD　それはあるかもしれない。今はインターネットが発達してしまって、ライヴって逆に来た人だけが体感できるものという価値観に変わったと思うんです。その鳥肌感みたいなものを大事にしていかないと。

□俺らは、FUTURE FOUNDATION にすごい救われた。（Kazuki）

――コロナ禍でバンド活動を停滞させざるを得ないなかでFUTURE FOUNDATIONを立ち上げたわけですが、そもそもはライヴハウスの救済が目的だったんですよね？

Kazuki　とある発起人の方から、この3バンドでライヴハウス救済のプロジェクトをやってほしいという話がきて。だから正直言うと、こっちから発案したものではないんです。結果として役に立てればいいなとは思ったけど。でも、俺らは、FUTURE FOUNDATIONにすごい救われた。コロナで活動が止まってしまって、何もできない状況で来た話だったからね。NOISEMAKERとCrystalとだったらぜひやりたいと思ったし、この3バンドでカッコいいものを作りたい……純粋にそういう気持ちでした。ただ、コロナ禍でのプロジェクトで、暗い世の中だったので、ポジティブな曲を作ろうよって話はしたんだよね。メジャー／マイナーで言えば、メジャー寄りのコード進行でいこうよって。

YD　この3バンドなら何かおもしろいことができそうだし、自分たちもお客さんもハッピーな気持ちになれたらいいなと。もちろん、自分たちがプレイしていたたくさんのライヴハウスがヤバい状況なので、できる

YD（Crystal Lake）

2002年に東京で結成されたCrystal Lakeでギター、作曲、デザイン、マネージメントを担当。2006年7月に1stアルバム『Dimension』を発売。2015年には海外レーベルと契約し、ワールドワイドな活動を展開。昨年は初期作品を再録したアルバム『The Voyages』を、クラウドファンディングを利用して制作したことが話題に。また、7月にはシングル「WATCH ME BURN」をリリースし、オリコン・チャート12位を記録した。今年10月8～9日には主催イベント［TRUE NORTH FESTIVAL 2021］を新木場スタジオコーストにて開催予定。

ことがあるなら助けるよっていう気持ちもありましたけど。

Kazuki　マスクをして感染対策を施してっていう状況だったけど、曲作りのために久々にみんなで集まったときは嬉しかったな。フェスやライヴのバックヤードで、みんなで呑みながら話をしている感覚というか。音楽をやる先には、話が合う仲間と一緒に過ごすっていう楽しみがあるじゃないですか。みんなで乾杯して、コロナ禍で不謹慎だと思われるかもしれないけど、"いや、これがやりたいんだよ"って思ったね。

YD　そうそう。バンドを始めた頃の感じでしたよね。曲を作っているだけで楽しくて。普段だったらそれぞれがツアーやレコーディングをしているから、きっと集まれなかったと思うんですよ。

――3バンド全員でスタジオに入って、曲作りをしたんですか？

YD　そうです。本当に有意義な時間でしたね。自分たちのバンドでやるときとは別の一体感があって違う生産方法にも気づけたし、何より楽しむことが重要なんだって改めて気づけた。原点を思い出したって言えばいいのかな。ギターを弾いて"お、カッコいいね"、"じゃあ、次は速いパートでいく？"、"えっ、やったことないッス"みたいな感じで（笑）。

HIDE　レコーディング中にヤジも飛ぶんですよ。そんなこと、自分たちのバンドではあり得ないよね（笑）。

――去年「DAWN」を配信して、約1年を経てEPをリリースということになりました。

Kazuki　このタイミングに深い意味はなくて、できたからっていう感じですね。

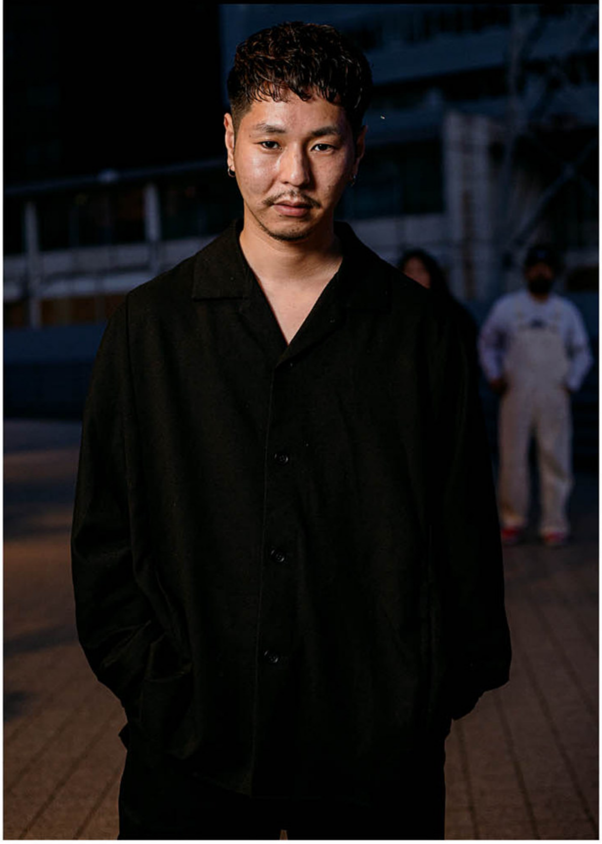
YD　「DAWN」がいい感じだったんで、もっと作りたくなったというか。どのバンドでも、何度かスタジオに入っているうちに"もう1曲作ろうよ"ってなることがあると思うんだけど……学園祭でも"もう1曲コピーしよう！"ってなったでしょ（笑）。そういう感覚の延長です。

HIDE　まあ、もったいないって思ったってことだよね。「DAWN」だけでこのバンドが終わっちゃうのがさ。

Kazuki　「DAWN」はライヴができない時期に作った曲だけど、"ここはみんなに歌わせたい"みたいな感覚があったんですよ。それで"1曲じゃライヴできないよな"っていうノリでさらに曲を作っていった。

HIDE（NOISEMAKER）

北海道出身。2003年に実弟のAG（vo）とともにNOISEMAKERを結成。バンドではギターだけでなく、ソング・ライティング、エンジニアリング、さらにはデザインも担当。2009年に1stアルバム『The 6 matters of the 6』をリリース。昨年は7月に発表したミニ・アルバム『H.U.E.』が好セールスを記録。2018年からはイベント[KITAKAZE ROCK FES]を主催。今年は5月末に札幌にて2デイズで開催予定だったが、残念ながら中止に。また、アート・プロジェクトDOTS COLLECTIVEでも活動中。



□ルールを守ってやる分には文句も言われない。そうしないと前に進めない。(HIDE)

――FUTURE FOUNDATIONでもやはりライヴに対する意識はあるんですね。現在はまだまだ制約がありますが、NOISEMAKERはすでにライヴを再開しています。

HIDE　椅子があってもマスクをしたままでもいいから観たいっていう人もいるので、じゃあやってみようかと思ったんですね。やってみたら意外と普通にできたんですよ。ライヴハウスはいろいろ言われることが多いですけど、裏を返せば、間隔をしっかり作ればやってもいいよってことだとも思うんです。スポーツもそうですよね。観客数を制限しながらやっていて、そういうルールを守ってやる分には、文句も言われないだろうし、そういう風にやっていけばいい

KAZUKI、HIDE、YD、RYO、AG、HIRO、YU-KI、TAKAHIRO、UTA ／ L to R

と思います。そうしないと、いつまで経っても前に進めないですよ。

YD　HIDEが言うように、ルールを守ればできるというのであれば、あとはタイミングってことだよね。自分たちの場合は、メンバーが抜けてしまった時期でもあったんで、今ではないっていう気持ちでもあるんです。もし、バンドの体制がしっかりしているときだったら、すぐにお客さんの前でパフォーマンスがしたいと思ったかもしれない。

HIDE　スタンスはそれぞれ違いますよね。ウチは歌モノっていう部分で椅子があっても成立したのかなと思し、YDみたいなジャンルだったらまた違うとも思うし。

Kazuki　俺らはNOISEMAKERのイベント（[KITAKAZE ROCK FES.2021] ※緊急事態宣言にともない、残念ながら中止となった）に誘ってもらったんで、そこでライヴを再開します。先行して始めたヤツらに乗っからせてもらう形だけど、俺らにとってはほんといいタイミングだと思う。ただ、もしかしたら“やっぱりこれじゃない”って思うかもしれない。ライヴ中にはフロントマンが“叫べ！”とか煽るわけですけど、それをやらないのも違うなとは思っていて。“実際に叫べよってことじゃない”ということを伝えたうえで、今までどおりにやりたいと思っています。俺らのライヴだと、そこでその言葉が入るからこそ勢いづく部分があるので。もちろん、そういう言葉に敏感になっている人もいるとは思うけどね。

HIDE　難しいですよね。

Kazuki　カッコいいと思って始めたことなんで、そこに意味なんてないんですよ。“イントロのギター・リフ、すげえカッコいい！”なんて思うのと同じで、そこには歌詞なんてないし意味なんてない。ただカッコいいだけ。俺らが発する言葉やアクションもそういうものなんです。それを捨ててしまうと、なんでやっているのかわからなくなってしまうし、自分たちではなくなってしまう。昨年、ファンの人と話す機会があったんだけど、“棒立ちのSHADOWSは観たくない。だから焦ってライヴをやってほしくない”っていう意見もけっこうあったんです。“気持ちが醒めてしまうかもしれないし、逆に盛り上がって衝動を抑えられずまわりに迷惑をかけてしまうかも”って。こちらもそれを抑えつけたくないじゃないですか。音楽ってそういう衝動を焚きつけるものでもあるんだから。

――確かに“殺っちまえ”みたいな歌詞を歌っているバンドは世界中にいるわけで、そのファンがみんな歌詞のとおりに行動するなんてことはないですからね。煽りの言葉にしても、そういうもののひとつだと。

Kazuki　そうなんですよ。そこを理解してもらって、なるべく自分たちのスタイルを崩さずにやりたいと思っています。こういう状況でも、観たいという人がいる。それくらい生きていくうえで音楽を必要としている人がいる。もちろん、それで食っている俺たちもそうだし。だから“何としてもライヴがやりたい、ライヴを観に行きたい”という気持ちになることは、悪いことだとは思わない。

YD　この状況をきっかけにライヴハウスから足が遠のいてしまう人がいるんだとしたら、もうそれはそれでいいんじゃないですかね。バンドだって、何らかの理由で続けられなくなることもあるんだし、それがこのタイミングだってこともあると思う。それでも続けていくバンドもあるわけで、よりブラッシュアップされてソリッドなものが残ると思うんですよ。リスナーもきっと同じなんだと思います。ライト・ユーザーがいなくなったところで、正直、そこに向けてやっているわけではないし。いいと思ってくれる人に対してはボーダーレス＆ノー・ジェンダーで迎え入れますけどね。

HIDE　実際、ライヴをやってみてわかったことなんですけど、“なぜライヴをやるんだ”みたいに言う人って、実はごく一部なんです。それを真に受けて、自分たちの活動が滞るのもおかしな話ですよね。俺らにだって生活があるしね。

Kazuki　もちろん、ライヴをやったことで感染してしまい、関係のない人まで巻き込んでしまったらと考えると……どう覚悟を決めるかって問題でもあるのかも。自分を大事に生きるのか、まわりを大事に生きるのか……難しいですけどね。

METAL HAMMER JAPAN

THE REVIEWS

DISC REVIEWS P.122

4月30日〜7月31日リリースの新作をピックアップ！

TATSUYA × ZOOM G6 P.127

サバプロ Tatsuya が、ズームの最新マルチをヘヴィに鳴らす！

METAL NEW GEAR P.131

メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

AKIRA TAKASAKI × MARSHALL BEER P.134

マーシャルのオフィシャル・ビールを世界の高崎晃がチェック！

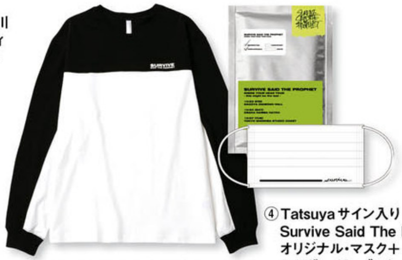
Special Presents!

メタルハマー・ジャパン・オリジナルのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［9月10日（金）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①MHJオリジナル・ベースボールTシャツ（ノーステイル・イエロー・ロゴ）
<3名様>
※S〜XXLでサイズをご指定ください

②高崎晃サイン入り ラウドネス・バンパー・ステッカー＋ツアー配布ステッカー
<3名様>

③ライデン湯澤／ゼノン石川 サイン入り聖飢魔Ⅱオフィシャル・フェイス・シールド
<各1名様>
※ライデン柄、ゼノン柄をご指定ください
※画像はイメージです



※M／L／XLでサイズをご指定ください
※画像はイメージです

④Tatsuyaサイン入り Survive Said The Prophet オリジナル・マスク＋ロング・スリーブTシャツ
<3名様>

⑤FUTURE FOUNDATION サイン色紙
<2名様>

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

『ハロウィン』
ハロウィン

ビクター／VICP-65555
6月16日発売

①アウト・フォー・ザ・グローリー／②フィア・オブ・ザ・フォールン／③ベスト・タイム／④マス・ポリューション／⑤エンジェルズ／⑥ライズ・ウィズアウト・チェインズ／⑦インディストラクティブル／⑧ロボット・キング／⑨サイアナイド／⑩ダウン・イン・ザ・ダンプス／⑪オービット／⑫スカイフォール

FOR FANS OF：どの時期であれ、一度でもハロウィンが好きになったファン全員

スペシャル作品なのに懐古主義にならないニュー・アルバムは どこを切ってもパンプキンズの美味しいところだらけ！

ここまで"正解"な新作というのも、なかなかないんじゃないか……マイケル・キスク＆カイ・ハンセンが復帰して初となるフル・アルバム『ハロウィン』は、これまでのキャリアのなかでファンを魅了してきたスタイルを、最新の顔で満遍なく刷り出した楽曲で彩られた。

当然ながら（新要素であり本家とも言える）マイケルの歌に注目が集まるわけだが、①⑩や先行シングル「スカイフォール」でもわかるように、明快疾走チューンにハイ・トーン・ヴォーカルが絡み合うという、まさに『守護神伝』様式での楽曲が惜しみなく披露されているのだ。当然アンディを主軸とするヘヴィ・リフもの④⑦⑨もあり、2000年代のハロウィンが培ってきた良さもしっかりと放出。むしろふたり（＋カイ）の合唱になることで、アンディの持ち味がより明瞭になっているようにも感じられる。

ファンが望むものを把握しながらバンドのクリエイティビティを生かし、2021年の作品としてやるべきことをやったアルバムとしかいいようがない。これは"次回作はどうなるんだ！？"と気の早いことは考えず、目の前のアルバムを十二分に堪能すればいい。（岡見高秀）

『フォーティチュード』
ゴジラ

ワーナー／WPCR-18421
発売中

FOR FANS OF：マストドン／セパルトゥラ

もはや王者の風格さえ漂う 堂々たる最高傑作

これは決定打的な一枚だ。グラミー賞にノミネートされた前作『Magma』で一躍脚光を浴び、作風的にもメロディアスな歌メロに磨きをかけた雄大な曲調で、音楽的間口を広げることにも成功。そして、全英チャート6位を記録したこの7thアルバムにおいては、従来のヘヴィネスはそのままに、キャッチーかつ強力なフックを備えた目鼻立ちの整った楽曲がずらりと並んでいる。もちろん作品トータルの完成度も過去最高レベルだ。

冒頭を飾る「ボーン・フォー・ワン・シング」から聴く者のケツを蹴り上げるメタル・アンセムを響かせ、次にいきなりアマゾンの樹海に誘うトライバル・メタル調の「アマゾニア」で迎え撃つ。かと思えば、中盤の「ニュー・ファウンド」にて歌の高揚感とうねりを上げるヘヴィ・リフで圧倒的なスケール感を提示。アリーナ規模の会場で観客をひとつに束ねる新たな唱和ソングの誕生と言いたい。とにかく、どの曲もライヴの絵が浮かんでくる曲調ゆえに早く生で体感したい。（荒金良介）

『デリリウム』
セヴンス・クリスタル

マーキー／ MICP-11624
発売中
FOR FANS OF：ヨーロッパ／HEAT／ヴォン・ジョヴィ

メロハー・ファンの心をつかめるか!?
哀愁のメロディを携えた1stアルバム

　クリアかつ起伏のあるヴォーカル・ラインを聴かせる彼らだが、結成は2019年であり本作がデビュー・アルバムなのだから驚かされる。“メロデスの本拠地”とも言えるスウェーデンはイエテボリにて始動したこのバンドは、そもそもはシンガーでありコンポーザーであるクリスティアン・フィールのソロ・プロジェクトとして始まり、次第にバンドとして形作られたようだ。

　②ほかで聴けるような、同郷の大先輩にあたるヨーロッパを彷彿するハードかつ哀愁のメロディを内包する作風には、メロディアス・ハード・ファンならば間違いなく心をつかまれることだろう。また、ときにハスキーでややブルージィさが香る部分もあり、そのあたりうまくはまった90年代後半以降のボン・ジョヴィ的バラードも持ち味と言えそうだ。

　少々プッシュの弱さを感じるところもあるが、それはこれからバンドとしての場数を増やすことで、同じ曲が見違えてくる可能性もある。そしてより独自のカラーが出れば、2nd作にも期待ができそう。（加藤保夫）

『ザ・ローニン』
ブシドー・コード

スピリチュアル・ビースト
IUCP-16342　発売中
FOR FANS OF：シックス・フィート・アンダー／ザ・ホーンテッド

武士の魂を胸中で燃やす
米ハードコア／デスラッシュがデビュー

　2017年に米ペンシルバニアにて結成された、その名も“ブシドー・コード”で、本デビュー作名が“浪人（ザ・ローニン）”という、ちょっとイロモノ系バンドか……と思いきや、その音楽性はかなり実直なデスラッシュ／エクストリーム系なのである。

　メンバーそれぞれがハードコア畑出身ということもあり、その粗暴さは堂に入ったもので、テクニカル系に走らずしっかりと屈強な音を作り出しているのがうれしい。突撃系チューンを主軸に、じっくりと刻みを聴かせる④、慟哭のインスト⑤から続く⑥と、決して広いわけではない音楽性のなかでもアルバムとしての緩急がつけられており、一枚を通して楽しめる作品にもなっている。

　曲調やメロディに脚色的なオリエンタル・フレーズはなく、そのあたりにも“表面的にならず、内なるところで魂を燃す”という武士道に通ずる心意気を感じやしないか。ぜひ作品を乱発せず、一撃必殺の楽曲を丁寧に作っていってほしい。（岡見高秀）

『ウェアウルヴス・オブ・ポートランド』
ポール・ギルバート

ソニー／ SICX-165
発売中
FOR FANS OF：イエス／エレクトリック・ライト・オーケストラ

メロディックなプログレ・ポップへ誘う
ポールの最新ギター・ミュージック

　80年代中盤、レーサーXで若さから放出される荒々しさを発揮し、多くのメタル・ファンの心をつかんだポール・ギルバート。その後MR.BIG、ソロ、各種プロジェクトとさまざまなスタイルで練磨し続けてきた現在のサウンドからは、円熟と進化の理想的なバランスが感じられる。

　今回彼が繰り広げるのは、プログレッシブにも通じるアレンジで聴かせる、心に響くメロディと重厚なオーケストレーションの数々だ。各所にて、彼が影響を受けてきたメロディメーカーたちへの憧憬とリスペクトが感じられるのだ。それでいてオンリー・ワンのテクニックも健在で、タイトル曲③や④⑧でのパワフルなプレイ（自ら叩くドラミングもポイント！）、⑤⑥でのスライドによる歌うようなメロディ……とギター・ファンたちの期待を裏切らない。

　若い頃のような、高いエネルギーを込めた歪んだギター・トーンはなくなったかもしれない。しかし進化し続けるポールの新境地がここにある。（七穂晴翔）

『ザ・ナイト・ゼイ・ケイム・ホーム』
ミスター・バングル

ビッグ・ナッシング／IPC-236CDBJ
発売中
FOR FANS OF：S.O.D.／アンスラックス

"衰え知らず"の再録作に続く 緊張と緩和を盛り込んだスタジオ・ライヴ

マイク・パットン（フェイス・ノー・モア）に加え、スコット・イアン（アンスラックス）、デイヴ・ロンバード（元スレイヤー）と豪華ゲスト・プレイヤーを迎え、10代の頃のデモ音源を再録した前作『ザ・レイジング・ラス・オブ・ジ・イースター・バニー・デモ』は傑作だった。そして、そのリリースを祝したライヴ配信イベントが、このたび音源／映像でリリースされる。これは嬉しい限り。

その中身はステージ背後に本棚が設置されたスタジオ・ライヴで、メンバーはたまにエスプレッソを飲みつつ、演奏に入れば百戦錬磨の匠たちによる激走スラッシュ・メタルが炸裂。8分超えの「メセマティクス」など、スリリングな緊張感で緩急鮮やかに聴かせる手腕はさすがだ。また、ヴァン・ヘイレンのカバー「ロス・オブ・コントロール」におけるパットンの見事な歌唱は、完全にデイヴィッド・リー・ロスが憑依している！

ジョシュ・ホーミやヘンリー・ロリンズなどがカメオ出演したコミカルな演出を挟んだ映像もいいけれど、ビシッと聴かせる音源は迫力充分。（荒金良介）

『キングズ・イン・ザ・ノース』
クラウン

マーキー／MICP-11629
6月18日発売
FOR FANS OF：アート・ネイション／ヨーロッパ

北欧メロディアス・ロックのスターが集結 注目のスーパー・バンドが日本上陸

アート・ネイション、ヒート、元プードルズ、ダイナスティ……という、スウェーデンのメロディアス・ハードロックのスターが集結したスーパー・バンド、クラウンのデビュー・アルバムがリリースされる。

全篇を通して王道かつキャッチーな曲調とヘヴィなディストーション・サウンドが楽しめる、スウェディッシュ・ロック好きは必聴の一枚と言えるだろう。そのなかでも疾走感溢れる③やワウ・ペダルを駆使したプレイが味を出す⑤など、それぞれの楽曲をより盛り上げてくれるギター・ソロは特に注目してほしいポイントだ。

さらに⑦や⑧でのシンセサイザーの音色も印象的で、特に⑧はじっくり聴きたくなるようなテクニカルなソロがその世界観をより深めている。しかも技巧だけにとどまらず、どちらもライヴ・シーンでは拳を上げて大合唱したくなるようなエモーショナルも含んでいるのがスゴい。

このほかサキス・ルーヴァスのカバー、④のアコースティック・ヴァージョンも収録。（原見理香）

『ヘゲモニー・シフト』
アグネス

キングレコード／KICP-4038
6月23日発売
FOR FANS OF：ガルネリウス／エンジェル・ヴィヴァルディ／キャメロット

メイビン・キムの圧倒的歌唱力が轟く 現代的クラシカル・パワー・メタルとは!?

ソングライティングやディレクションから、メロディアスなヴォーカルまで、ほとんどをひとりでやってのける"主人公キャラ感満載"なメイビン・キムの新プロジェクト、アグネスの1stアルバムが発表される。

馴染み深いRachel Mother Gooseのメンバーを含め、スペシャル・ゲストとしてジェフ・コールマンが④⑧にてギター・ソロで参加し、さらにミックスとマスタリングはスウェーデンの[Fascination Street]スタジオでなされたことも期待値を上げる要因となる。

アルバムを通して流れるシンフォニーは、まさにモダン・ヘヴィネスで構成されたオーケストラと言え、こういった絶妙な音色とメロディの操り方からは彼のコンポーザーとしての力量を垣間見ることができるだろう。"これぞメロディック・スピード・メタル"な②⑩はもちろん、⑨のEDM的ビートとファンクの縦ノリ感を今風のパワー・メタルに落とし込んだところに、バンドとしてのさらなる可能性を感じた。次世代メタルを語るうえで欠かせないバンドとなるか。（原田右恭）

『ヘルバウンド』
バックチェリー

ソニー／ SICX-166
6 月 23 日発売
FOR FANS OF：トラプト／パパ・ローチ／ヒンダー

名プロデューサーと再タッグ 逆境だからこそ引き出された渾身の一枚

通算アルバム・セールスは400万枚以上、グラミーのノミネート経験も持つバックチェリーが、前作『ウォーペイント』より２年ぶりとなる新作をリリース。

プロデューサーに4th作『ブラック・バタフライ』でタッグを組んだマーティ・フレデリクセンを再び迎えた結果なのだろうか、前作よりもより耳に残る曲が多くなった印象だ。例えば①②④⑥は一聴しただけで彼らだとわかる“ファンが期待するバックチェリー・ソング”そのものと言えそうで、かかった瞬間から自然と体がリズムに乗って動いてしまう。

また多様なテーマを扱う本作のなかでも、特に注目してほしいのがタイトル・トラックだ。ジュシュ・トッドが音楽に魂を捧げた瞬間を反映した一曲とも言え、渋く力強いギター・サウンドと揺るぎない歌声からは“俺らのこれからを見とけよ！”という主張が聴こえるようだ。“逆境だからこそ最高を生み出せる”という、バックチェリー流ロックンロール魂をぶち込んだ、この状況下だからこそ聴きたいアルバムなのである。　（王彦蓉）

『ジ・エニグマ・バーズ』
ティモ・トルキズ・アヴァロン

マーキー／ MICP-11632
6 月 25 日発売
FOR FANS OF：クイーンズライク／ロイヤル・ハント

自身の理想を具現化した メタル・オペラ・プロジェクト作品

約2年振りに、ティモ・トルキのソロ・プロジェクト“ティモ・トルキズ・アヴァロン”の新作が発表される。ストラトヴァリウス期から定評のあるアルバム・タイトルのネーミング・センスも光る、通算4枚目のアルバムだ。前作までと同様コンセプトを持った作品で、ギタリストとしてのプレイもさることながら、ティモの安定した作曲センスが遺憾なく発揮されている一枚と言えるだろう。

多彩なゲストの起用も恒例で、今作ではベテラン勢に加え新顔ヴォーカリストも多数参加しており、各曲で存在感と彩りを発揮している点に注目したい。当然ながらギタリストとしての⑦におけるタメのあるソロ・ワークも秀逸で、より円熟味を増したプレイも聴きどころと言えよう。作曲者自身がギタリストの場合、良くも悪くもギター・サウンド中心のミックスになりがちだが、彼の楽曲はヴォーカルを含め各楽器がバランス良く仕上げられているので、歌詞を含む世界観が漏れなく伝わってくるのも好感触。琴線に触れるメロディアスな各曲をぜひ体感してほしい！　（梶原稔広）

『ザ・ナイトメア・オブ・ビーイング』
アット・ザ・ゲイツ

トゥルーパー／ QATE-10128-29
7 月 2 日発売
FOR FANS OF：ホーンテッド／イン・フレイムズ／ダーク・トランキリティ

ヨーテボリ・サウンドのパイオニア アット・ザ・ゲイツ待望の新作

メロディック・デス・メタル……と言うか、いわゆるヨーテボリ・サウンドのパイオニアのひとつ、アット・ザ・ゲイツによる3年ぶり7枚目のアルバム。1995年の『スローター・オブ・ザ・ソウル』がメロデスの名盤としてぶっちぎりで有名であるが、彼らはもともとコテコテのスウェディッシュ・デスにヴァイオリンを入れてみたりと、実に広い音楽的射程を持ったバンドでもある。前作でもヴァイオリンやチェロを導入し、“『スローター～』のパート2は作らないぞ”という気概を感じさせたが、今回はさらに意欲的。シンセやサックス、さらにはクワイヤやオーケストラ・サウンドも大胆に導入してみせるなど、一切守りの姿勢を見せていないのが素晴らしい。

そんな彼らのプログレッシブな一面をさらに楽しめるのが、日本盤ボーナス・ディスクだ。こちらにはキング・クリムゾン、さらにはフィリップ・グラスのカバーを収録。前者は「レッド」という納得の選曲、後者は『コヤニスカッツィ』という映画のサントラの曲で、ともにオランダのフェスにおけるライヴ録音。　（川嶋未来／SIGH）

Movie

一度は行きたい! ロック・ファンの聖地巡礼地 “レミーの棲家”レインボーのドキュメンタリー

米ロックンロールの聖地であり、ある時期からは“レミーの棲家”としても知られるようになった[レインボー・バー＆グリル]の歴史を描くドキュメンタリー映画がDVD化。

作中では同店の常連だったオジー・オズボーン、スラッシュ、ジーン・シモンズを始め、エンターテインメント界の大御所が次々登場し、レインボー、そして姉妹店でもあるライヴハウス[ウィスキー・ア・ゴー・ゴー]を自身の歴史とともに振り返ってくれる。

サンセット・ストリップを彩る重要拠点のひとつであり、ロック／メタル・ファンであれば必ず訪れておきたい殿堂でもあるレインボー。未踏の方は、まずは当映画で本場の雰囲気をのぞいてみては？

『ザ・レインボー』
キングレコード／ KIBF-1989
発売中

Box Set

ボックス第三弾がついに登場! 00年代以降の名盤を一気にゲット!

NWOBHMを出自としつつも米国で大成功を収め、2019年には“ロックの殿堂入りを果たした“英米での国民的ロック・バンド”デフ・レパード。そんな彼らの作品群を収めた豪華ボックス・セットが2018年から展開しているが、その第三弾が発売中だ。

その内容は『X』(2002年)、『YEAH！～イエーイ！』(2006年)、『ソングス・フロム・ザ・スパークル・ラウンジ』(2008年)の3枚を軸に、B面曲やカバー、ライヴ、未収録曲を収めた3枚をプラスした計6枚となる。特にボーナス3枚はジョー・エリオットが特別にコンパイルするという力の入れようだ。

レジェンドである彼らの後期作品にはまた別の風格があり、新旧ファンどちらにとっても楽しめるセットとなっている。

『[デフ・レパード – ヴォリューム・スリー] ボックス・セット』
ユニバーサル／ UICY-79523/8
発売中

Live

ステイ・ホームでもライヴが楽しめる! 今後も公式ブートレグ・シリーズを要チェック!

プログレッシブ・メタルを代表するバンド、ドリーム・シアターが、ライヴ、デモ、スタジオ・アウトテイクなどの秘蔵音源を《公式ブートレグ “Lost Not Forgotten Archives”》シリーズとしてリリースしていく。

記念すべき第一弾は、初商品化となる『イメージズ・アンド・ワーズ～ライヴ・イン・ジャパン2017』。タイトル名のとおり1992年発売の傑作を日本武道館にて完全再現したときのステージで、我々日本のファンならば絶対に持っておきたい音源と言えるのでは。

シリーズ第二弾も早くも決定しており、こちらは2011年作『ア・ドラマティック・ターン・オブ・イヴェンツ』ツアーでのライヴ音源を収録した2枚組作品となり、7月21日の発売予定となっている。

この企画はシリーズということで、今後も彼らの貴重なアーカイブの作品化が期待できる。まだまだ海外バンドの来日が難しいだけに、のこれら音源でライヴが疑似体験できるドリーム・シアター・ファンがうらやましい！

『ロスト・ノット・フォゴトゥン・アーカイヴズ：イメージズ・アンド・ワーズ～ライヴ・イン・ジャパン 2017』
ソニー／ SICP-31439
◎ 6/23 発売

『ロスト・ノット・フォゴトゥン・アーカイヴズ：ア・ドラマティック・ツアー・オブ・イヴェンツ～セレクト・ボード・ミックス』
ソニー／ SICP-31443~4
◎ 7/21 発売

ZOOM G6

ZOOM

G6が生み出す無限のヘヴィ・サウンド！

with **Tatsuya**（Survive Said The Prophet）

1980年代からユーザーに寄り添ったエフェクターを数多くリリースしてきたズームの新型ギター・プロセッサー［G6］は、タッチ・パネルによる直感的な操作で複雑なプロセスを経ることなく理想のサウンドを生み出してくれる。もちろん操作性だけではなく、最新の技術を組み入れた音色はプロをも唸らせるものだ。今回はこのズームの最新モデル［G6］を、バリトン・ギターを操り、重低音サウンドを轟かせるサバプロのTatsuyaがチェック!

試奏動画は［デジマート・マガジン］でチェック！

webサイト［デジマート・マガジン］では、Tatsuyaによる G6の試奏動画を公開中！　今回の演奏のために作曲されたオリジナル・インスト・チューンを、G6のサウンドを駆使してプレイしている。超低音リフから流麗なリード・フレーズまでをG6のみで完全構築。音色の切り換えやすさ、音作りのしやすさにも注目してほしい！

G6開発者より

何はともあれ、まずはG6を作製したズーム社の開発担当氏からのメッセージをお届けしたい。本モデルに盛り込んだ機能への想いからも、このモデルへの自信が感じられるのでは！？

多くのギタリストが求めているであろう“こんなアンプ・サウンドがあったらいいのに”を実現した6種類のズーム・オリジナル・アンプの音色をお試しいただきたいですね。いずれも実用性の高さにこだわったサウンドですので、きっとそこからインスピレーションや曲のアイディアを得ることができると思います。

また、IR（インパルス応答）を使用したキャビネット・シミュレーションで、オン・マイク、オフ・マイク、ルーム・マイクなどマイキング・ポジションの違いによる音響特性もリアルに再現します。SDカードに録音できるルーパー機能もお薦めです。SDカードに入れた2ミックスを再生し、そこにギターを重ねることができます。オーディオI/F機能を使えばSNSへのアップも簡単です。

こういった先進技術を駆使したサウンドを、スマホ感覚のタッチ・パネルで直感的に操作できるので、セオリーに囚われず自由な発想で音作りを楽しんでほしいですね。ギタリストにとって馴染みやすいUIに仕上げているので、これまでマルチ・エフェクターを敬遠していたコンパクト・エフェクター派の方々にも手に取ってほしい製品です。

ZOOM

G6

価格：オープン・プライス（市場実勢価格：40,000 円前後）

●製品に関する問い合わせ：ズーム
☎0570-078-206
◎https://zoomcorp.com/ja/jp/

◎おもな仕様
● 同時使用エフェクト数：9
● アンプ・モデル：22
● パッチ・メモリー：240
● サンプリング周波数：44.1kHz
● ディスプレイ：4.3インチTFTカラーLCD
● 電源：ACアダプター（DC9Vセンター・マイナス、500 mA）
● USB：USB2.0 Micro-B
● SDカード：SD/SDHC/SDXC 規格対応カード（Class10以上）
● 外形寸法：228（D）×418（W）×65（H）mm
● 重量：1.94 kg

この一台のなかに無限のサウンドを秘めたプロダクト、それがズーム製ギター・マルチ・プロセッサー［G6］だ。もちろん現在のギター機材群のなかには同様に多様なサウンドを創出するアイテムも多々あるが、本機の特徴は、何と言っても理想的な音をシンプルかつ少ない作業ですぐに鳴らせるところにある。そう、いかに多彩な音が作り出せるとしても、それが簡単に操作・出力できなければ宝の持ち腐れになってしまうからだ。

▷タッチ・スクリーンで直感的に音作り！

それを可能にしているのが、G6 最大の特徴である《タッチ・スクリーン》を使った操作方法にある。各パッチの表示からエフェクトの選択、並び替えまで、すべて画面上のビジュアルと指先の操作で完結させられるのだ。従来のマルチ・エフェクターにあった煩雑なスイッチ操作が“見たままのアイコン操作”に置き換わることで、格段にアナログ的プロセスに変わり、テンポ良く直感的な音作りができるようになる。画面も 4.3 インチと、一般的なスマートフォン以上のサイズ感で、細かいスワイプ動作も非常にしやすい。

▷ライヴでもわかりやすいスイッチング法

操作性という点では、《フット・スイッチ》の使い勝手の良さもポイントだ。製品サイズをコンパクトにまとめるため、ひとつのスイッチにさまざまな役割を持たせるのはマルチ機の常套手段だが、こちらはその役割を視認性の高いモード表示とともに提示。音色のスムーズな転換や踏み間違い防止という観点からも、ライヴではとても重要となる点だ。パッチの展開はもちろん個々のエフェクターの切り替えもこのスイッチで行なえ、その設定もタッチ・スクリーンでワンタッチだ。

▷音がいいから使いたいモデル

いかに使い勝手のいいマルチ・エフェクターでも、その音がイマイチだったら本末転倒。もちろん上位機種である同社［G11］直系のサウンドはどれも即戦力と言えるもの。定番 16 種＋オリジナル 6 種のアンプ・モデリング（キャビネットは 22 種）、最大で 9 タイプを同時使用できるエフェクトはオリジナルを含め 130 以上を内蔵。IR ローダー機能と併用することで、ズンズンと歪んだヘヴィなトーンからクリアでヌケのいい音まで、再現できない音はほとんどないとも言えるのでは。この音色については、Tatsuyaのラウドなプレイでチェックしてほしい。また専用ソフト［Guitar Lab］を使えば PC 上で

のサウンド管理ができるようになるほか、オンライン配信される追加エフェクトやプリセット・パッチを無料で取得することもできるので、利便性はさらに高くなることだろう。

▷ほかにも便利機能が盛りだくさん！

近年のテクニカル・プレイヤーには必須のルーパー機能の録音時間は、最長で 90 秒（モノラル時／ SD カード使用で拡張・保存も可能）。入出力端子も多彩で、すべての音を本機内で作り直接 PA に送り外音にするという使い方もオススメ。またエクスプレッション・ペダルを有していながら重量は 2kg 未満のため、ギター・ケースに入れてもらくらく持ち運べるのがうれしい。

＊　＊　＊

“なんでもできる”を売りにするサウンド・プロセッサーはいろいろあるが、決して高価すぎず、なによりも群を抜いて扱いやすい G6。これからマルチにトライしてみようと思っているギター初級者から、これまでいろいろな機材を使ってきた本格派のミュージシャンまで、自分に合った使い方にすぐに出会える一台と言えるだろう。

視認性の高いフット・スイッチ

▲フット・スイッチの役割は、その上部にあるモード表示ですぐさま把握することができる。鮮やかなカラー表示なので、ステージでの視認性も高い。踏み心地もしっかりしており、もちろん耐久性も充分。

大型スクリーンで直感的に操作

▲ 4.3 インチのタッチ・スクリーン。今まで何層にも入り組んでいたステップが、スマートフォン感覚でスイスイ行なえる。見たままの動きのため、説明書を読み込まずともすぐに使えるはず！

アナログ的ノブ操作で微調整

▲エフェクトの細かい設定は、タッチ・スクリーン下の《パラメーター・ノブ》で。コンパクト・エフェクターさながらのフィジカル的コントロールは、理想的な音を具現化する近道だ。

機能拡張に必須のSDカード

▲背面には、SD カードのスロットも装備。外部 IR データの読み込みやルーパーの録音時間拡張などが行なえるようになる。音源データを SD カードに入れて一緒に流すなど、活用はいろいろだ。

独自アプリでワイアレス操作

▲同社独自のアプリ［Handy Guitar Lab］（※ iOS 用）と別売の Bluetooth アダプターを使えば、ワイアレスでの操作も可能。しゃがむことなく、手もとで素早く設定が変更できる。

Playing Impression

TATSUYA × G6

それでは、G6を実際に使ってオリジナル・ソングを作ってくれたTatsuyaに、率直な使い心地を語ってもらおう。ぜひ［デジマート・マガジン］でも、ドロップA♭でくり出されるヘヴィ・グルーヴを体感してほしい。

Profile

Survive Said The Prophetのギタリスト。バリトン・タイプの6弦ギターで大幅にダウンさせたヘヴィ・サウンドと確かなテクニックを合わせ、ほかにないサウンドで存在感を示す。バンドの最新リリース作は『To Redefine / To Be Defined』。初夏からのフェスティバルへの出演も続々決定!
©https://survivesaidtheprophet.com/

使い方が自由なので、逆に“自分ならではの使い方を見つけてみろよ”って一台。

まずこの価格帯でタッチ・パネルっていうのが衝撃ですよね。表示される内容もわかりやすいので、エフェクトも“これは何だろう?”と直感的にやりやすかった。それにプラスして、アナログチックな真ん中のツマミ（パラメーター・ノブ）がいいんです。ゲインを上げたりミドルを下げたりと、それぞれのステータスがきちんといじれる。“それができないからマルチがイヤ”というエフェクター好きの人もいるので、そのかゆいところにも手が届いているな、という印象です。これならフィードバックの音を変えたりもしやすい。デジタル画面でやれと言われても、まぁ無理ですって思いますもんね（笑）。

今回の音作りでは、まずは最初から入っているプリセットから自分の楽曲に合う音を探すことから始めました。そもそもスゴい数のプリセットが入っていて、どれも“これ普通にそのまま使えちゃうんじゃないの”というのがたくさんあるんです。だからそれをベースに、そこからエフェクトをアサインして音を決めるだけであの音が作れました。もちろん深い作り方も完備されてるなと感じたので、作り方は無限大にあるなと。イチから作ると、時間がいくらあっても足りなそう（笑）。

使った音色は4パターンで、<リフA>、<リフB>、<リードA>、<リードB>という具合です。演奏するときには《メモリー・モード》でそれぞれをメモリー①～④に振り分けて踏み換えていったんですけど、リードAとBはディレイとワウのアリナシの違いなので、メモリー③のなかにディレイとワウもアサインさせてそのなかでオン／オフをすれば、3つのメモリーで完結させるという使い方もできたと思います。

僕は1曲のなかでセクションが進むのに合わせて音色を切り換えていったんですけど、ベースとなる音を作っておいて《エフェクト・ボード・モード》でエフェクターをオン／オフしていくという使い方もできる。こういった使い方は、好みだと思います。

音作りの際は、使いたいエフェクトをリアルタイムで入れられるのも使いやすいなという印象です。これができるって僕のなかではすごく大事で。一回システムを組んじゃうと、いじるときは改めてシステムを開けないといけない。それがその場で直感的にできてしまう。しかも、そのディスプレイ画面がわかりやすい。替えたいものを指でなぞるだけなのがすごいなと。自分のシステムはこの感じにするまでけっこうな額を投資しているんですけど、その前にG6を知っていたら使っていたかもしれない（笑）。

まだ実際のライブハウスで使ったわけではないですが、家やスタジオで使った限りでは“これで充分”というクオリティだと思います。僕はライヴだったら、リターンからアンプにつないでモニターにしつつ、LRのアウトから直接PAに送ると思います。アウトをアンプにインしてマイキングすると、G6の良さが減りそうなので。

僕らがギターを始めた時代でも、“マルチはマルチだよね”って言われていたと思うんです。それがこの時代まできて、実際にアンプを鳴らさずPAに直送りまでできるようになった。G6できちんと音を作り込んで、PAさんにうまく伝えられたら、自分の出したい音がそのままライヴで再現できちゃうんですよ。そのシステムがギター・バッグに入れられるくらい手軽に持ち出せて、この価格で実現するんだから安いですよ。若いバンドマンで“これから何買おう?”って悩んでいる人たちにも“これ一台あったらいんじゃない?”って伝えたいですよね。プリセットのなかにすでにいいのがあるし、ルーパーも入っていて……あれを単体で買うと高いので（笑）、それがマルチのなかに入っているのは最高に遊べると思います。

G6は使い方が自由なので、逆に自由だからこその“自分ならではの使い方を見つけてみろよ”って一台だと思います！

METAL NEW GEAR

試奏・文：梶原稔広
東京都出身、ALHAMBRAのギタリスト。数々のレコーディング、ライヴ・サポートを行ない、MI TOKYOにて後進の指導にも携わる。楽器メーカーの商品開発やデモ演奏のほか、ギタリスト向け教則本も執筆。
写真：鈴木千佳

IBANEZ
RG6HSHFX-BKF

価格：148,500円（税込）

Specifications

ボディ：バスウッド
ネック：メイプル／ウォルナット（5ピース）
指板：ローズウッド
フレット数：24
ピックアップ：オリジナルV7（フロント）、S1（ミドル）、V8（リア）
コントロール：ヴォリューム、トーン、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
ペグ：ゴトー製MG-T
ブリッジ：オリジナル・モノレール
付属品：ソフト・ケース

漆黒のなかに垣間見える洗練されたモダン・スタイル

アイバニーズの王道的存在と言えるRGから、邪悪系〜激音系メタルにピッタリの本器を紹介しよう。メーカー・ロゴを含め黒で統一された外観からはとても引き締まった印象を受けるが、それはサウンドにも同様のことが言える。

5ピース構造で剛性の高いネックにローズウッド指板、そしてバスウッド・ボディという本体に、同社オリジナル・ピックアップがとてもマッチしており、クランチではもちろんハイ・ゲインなモダン・セッティングでも常に安定した音像を提供してくれる。固定されたブリッジの影響もあるのだろう、ピッキングに対して弦振動を素直に表現。各弦のテンション・バランスの良さとも相まって、ダウン・チューニングでの強いピッキングでピッチがフラつく心配もなさそう。

もちろんRG特有のスリム・ネックはシュレッド・プレイとの相性も抜群。ステルス的ルックスを生かして、ぜひ漆黒のヴィジュアルで攻めるデス〜ブラック系バンドに手に取ってもらいたい1本なのでは！

▲各弦が独立する“モノレール・ブリッジ”。ピアノ的とも言える独立構造で各弦の干渉を抑え、きれいな倍音を生む。各弦のテンション・バランスや手触りも良好だ。

●問い合わせ：星野楽器販売
☎0561-89-6900
◎https://www.ibanez.com/jp/

RJM MUSIC TECHNOLOGY

OVERTURE

価格：55,000円（税込）

Specifications

コントロール：ゲイン、ヴォリューム、ベース、トレブル、プリ・ブースト、オン／オフ・スイッチ、ソロ・スイッチ、モード・スイッチ、プリ・ブースト・スイッチ
入出力端子：インプット、アウトプット、MIDIイン、MIDIアウト
外形寸法：111（W）×133（D）×61（H）mm
質量：481g
電源：DC9V／150mA（センター・マイナス）

▲各モードの切り替えは、中央のボタンで行なう。視覚的にもサウンド的にも変化がわりやすく、シンプルなフロント・パネルは操作性が高い。

●問い合わせ：株式会社ミュゼット・ジャパン
☎03-3526-6298
◎http://www.musette-japan.com/

アナログ・サウンドをデジタル制御する6モード搭載歪みペダル

［Amp Gizmo］や［Mastermind］などのスイッチング・システムやMIDIコントローラーなどで知られるRJMから、メーカー初となるエフェクト・ペダルが発表された。

本機はいわゆるオーバードライブだが、そこは同社……ただの歪みペダルではない。何とメモリ（つまみ）の設定が最大100パターン保存でき、本体操作のみでも8コのプリセットを呼び出すことができる。基本となる歪みはモード・スイッチから選べる6種類で、アナログ回路を採用した耳あたりのいいオーガニックな出音が特徴となる。

各モードの歪みはクリーン・ブースト〜クランチ〜ハード・ドライブといった具合で、“本機のみでモダンなハイ・ゲイン”とまではいかないが、“スタジオに常備されるアンプの歪み量を増しつつサスティンもプラスさせる”、“トランジスタ・アンプにチューブらしさを加える”といった使い方にはまさに打ってつけ。もちろんツェッペリンやレインボー、スコーピオンズ、AC/DCといった70〜80年代ハードロックならば、本機のみでバッチリ。

また、リード・プレイが必須のメタル・ギタリストにとっては、ソロ用プリセットへ切り換えてくれる“ソロ・スイッチ”もありがたい。多様なシーンでギタリストのワガママに応えてくれるギアになるだろう。

TWO NOTES

TORPEDO C.A.B. M+
TORPEDO CAPTOR X

価格：オープン・プライス（市場実勢価格：［TORPEDO C.A.B. M+］36,850円前後、［TORPEDO CAPTOR X］70,950円前後）

Specifications

［TORPEDO C.A.B. M＋］（写真左）
コントロール：プリセット／パラメーター、ヴォリューム／バリュー、入力レベル・スイッチ、グランド・リフト・スイッチ
入出力端子：アンプ・イン、スピーカー・アウト、XLR DIアウト、ライン・アウト、ヘッドフォン、AUXイン、USB
外形寸法：100（W）×121（D）×60（H）mm
質量：450g
電源：付属

［TORPEDO CAPTOR X］（写真右）
コントロール：アウト・レベル、ヴォイシング、スペース、プリセット、入力レベル・スイッチ、グランド・リフト・スイッチ、ヴォリューム・スイッチ
入出力端子：XLR DIアウト×2、スピーカー・アウト、スピーカー・イン、ヘッドフォン、MIDIイン、USB
外形寸法：128（W）×175（D）×64（H）mm
質量：1.3kg
電源：付属

◀［C.A.B. M+］の側面端子群。複雑な設定もUSBで接続したPCやスマホで操作できるため、専用アプリとの連動はマストと言えるだろう。

●問い合わせ：日本エレクトロ・ハーモニックス
☎03-3232-7601
◎http://www.electroharmonix.co.jp/twonotes/

理想のサウンドをそのまま具体化する魅惑のボックス

フランスのTwo notes社の新商品、［C.A.B. M+］と［Captor X］をピックアップしていこう。

DAWの普及でセルフ録音が手軽になった現在だが、いざレコーディング・スタジオのクオリティを自宅で再現……となると、やはり録音機材や環境、また音量の面などから、“同等に”というのはまだまだ難しいのも事実ではある。今回紹介する2機材は、その課題の一端を見事に克服してくれる便利なアイテムだ！

［C.A.B. M+］はギター本体、プリアンプ、アンプ・ヘッドなどさまざまなデバイスからの入力を可能とした小型スピーカー・シミュレーター。リハスタではいいと思ったセッティングがライヴではうまくいかないという“あるある”な悩みも、このペダルが手助けしてくれる。本機にてお気に入りのプリセットを作りPAに直接信号を送るだけで、環境に左右されない安定したサウンドを得ることが可能なのである！

［Captor X］は、所有する中〜大型アンプをライヴやリハーサルでしか使っていない人にお薦めの、“仮想の部屋にマイクを備えた”スピーカー・キャビネット・シミュレーター。アンプ本体からの出力を自然な形で減衰させる3段階のアッテネーター機能を搭載し、またスピーカーがなくても無音で出力できるダミーロード機能もあるため、防音設備のない部屋でもアンプの真空管をプッシュした（負荷をかけた）セッティングで録音できるのだ。

両機材は専用アプリ（無料）でサウンド・システムの作成&変更もできるので、視覚的かつ幅広い音作りができるのも嬉しい。

Akira Takasaki × Marshall Beer

梅雨が終われば、待ちに待った夏！　ギラギラ太陽のもと、爆音のメタルを聴きながらビールをグビッと……想像しただけでもノドが乾きます(笑)。そんなシチュエーションにピッタリなのが、今回ピックアップした“名ロック・サウンド製造機＝マーシャル”のオフィシャル・ビールです。世界中でマーシャル・アンプを鳴らしてきた高崎晃が、この夏はキレとパンチを備えたロック・ビールで豪快にノドを鳴らす！

Marshall Amped Up Lager

※７月下旬～８月上旬発売予定

●価格：1,815円（3本セット）、4,840円（8本セット）、9,680円（16本セット）●容量：330ml

鳴らしたことのないギタリストはいないだろう、ロック・アンプの代名詞＝マーシャル・アンプのオフィシャル・ビールが、この［マーシャル・アンプトアップ・ラガー］。マーシャルの生まれ故郷である英国の、スコットランドはウィリアムズ・ブラザーズ醸造所で作られるこのラガー・ビールは、ホップに<マグナム、シトラ、エクアノット、カスケード>の４種を使うことで、タブを開けた瞬間から新鮮な柑橘系の香りが立ちあがる。力強い苦味がありドライかつ切れのいい呑み心地にも関わらず、アルコール度数は4.6度と重くないため気軽に楽しめるのもうれしいところ。晩酌のおともに、お風呂上がりに、ライヴでの水分補給に……などなど、あらゆるシーンで呑みたいビールである！

●マーシャル・アンプらしいスタック風ギフト・ボックスに入っているため、部屋のインテリアや音楽仲間へのプレゼントとしても Good！

ロック・ミュージックもお酒も、自分自身を解放して自由になって楽しむもの。

ひと言でいうと、コクがあってすごく美味しいです。アルコール度数は4.6%ということだけど、もっと高い、5%以上あるのかなと思ったくらいガツンとした味わいがある。ダークな感じもあって、僕らがよくヨーロッパ・ツアーで呑んでいるビールに近いよね。

だから、日本の一般的な缶ビールとはだいぶ違う印象かな。最近だと大手メーカーもクラフト系のビールを出しているけど、それらと比べてもコクがあって美味しい。僕が好きなタイプのビールです。

もちろん呑みやすさもあるんですよ。ヨーロッパに行ったらもっと呑みにくいビールはあるので（笑）。アルコールだけ高いってわけじゃないので、普通の人……ロック・ファン以外の人でも親しめる味だと思います。むしろ、これに慣れてきたら普通のビールじゃ物足りなくなるかも（笑）。

普段は晩ご飯と一緒にビールを軽く呑む程度なんだけど、このマーシャル・ビールだったら、やっぱりステーキとか焼肉とか肉系のほうがいいですよね。例えばバーボンに合う料理だったら、このビールともだいたい合うんじゃないかな。

ジム・マーシャルさん（※マーシャル社の創設者）はウイスキーに精通していたそうで、僕もマーシャルのウイスキーを箱でいただいたことがあって。それもかなり美味しかったんですけど、このビールも期待していた以上。マーシャルって言ったらアンプの王様、世界一のアンプだけど、そのサウンドに負けずこのビールもかなり美味しいですよ（笑）。

※

マーシャルのアンプは歴代のレジェンド・ギタリストたちが使ってきただけあって、やっぱりいい音を引き出すことができるし、信頼性もある。ライヴで何十年も使い続けるって、やっぱり信頼感がないと無理なんで。生演奏で安定して自分の音を引き出していけるっていう凄みですよね。それまでにもキレのある音を出すアンプはあったけど、ああいうハイ・パワーで歪む音を一般の人でも出せるようにしたのもマーシャルのおかげなんじゃないかな。マーシャルのアンプがなければ、ロックの歴史は全然違ったものになったと思うよね。

1年以上こういう状況が続いているので、いつになったら昔みたいに安心してライヴができるのかはまだわからないけど、地道にやっていくしかない。ミュージシャンは家で練習だけしていても、ステージから離れていっちゃうと劣化していくんです。できるだけ早くコロナが収まって、普通にライヴがしたいですよね。

やっぱりロック・ミュージックもお酒もそうだけど、自分自身を解放して自由になって楽しむっていうのがあると思う。僕も演奏をするときはビールかジャック・ダニエルを少し呑んでいるので、お客さんにもマーシャルのビールを呑んでラウドネスを聴いてほしいよね。

そうそう、今回ラウドネスのオフィシャル・ビールを作ったので、そちらもぜひ呑んでみてください。マーシャル・ビールにもちょっと似たダークなテイストで美味しいですよ（笑）！

◀こちらが[40周年記念LOUDNESSオリジナル・クラフトビール]。“GOLDEN ALE”、“RED ALE”、“WHITE ALE”の3テイストがラインアップし、好みやシチュエーションに合わせて選べるようになっているぞ。詳しくはオフィシャルHPにてチェック！

都商会ロック酒通販サイト【MIYAKO WEB CHANNEL】

※お酒は二十歳になってから。
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

METAL HAMMER JAPAN
メタルハマー・ジャパン Vol.6

Rittor Music Mook

電子版　2021 年 7 月 1 日　第 1 版発行
（底本　2021 年 7 月 1 日発行　第 1 版 1 刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町一丁目 105 番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　永島聡一郎

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、E メールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.6（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話や FAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

ビジネス・コミュニケーション部
國崎晋
西澤文孝
横尾彰
原見理香
原田右恭
須賀琢郎

海外渉外担当
平井潤

表紙デザイン
村藤治（RAD）

表紙写真
The LIFE Picture Collection via Getty Images

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

電子版制作　大日本印刷株式会社

▲近所のスーパーで見かけたり、銭湯が同じだったり……そのサイズ感にいつも驚愕！　もし新店舗ができればまた！

©2021 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

本書の記事は、Future plc グループ企業である Future Publishing Limited, UK 1983 が著作権を保有またはライセンスを受けている Metal Hammer から翻訳または複製されています。 Metal Hammer は Future Publishing Limited の商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
　Future plc グループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。